

## VIII-4 販売促進

### 1 目的

- (1) ねらい 小売業が実際に行う販売促進の方法を学び、消費者の購買の動機付け方法について考察できるように指導する。
- (2) 身に付けさせたい資質・能力 ◎思考力 ○判断力

### 2 授業内容・研修内容

- (1) 期 日 10月13日(木)
- (2) 会 場 北海道静内農業高等学校 体育館
- (3) 参加者 食品科学科2学年17名、食品科学科3学年24名
- (4) 講 師 生活協同組合コープさっぽろ 店舗本部マーケティング部部長 川崎 正隆 様
- (5) 概 要 商品を販売するために必要なマーケティング方法について写真64のように学習した。また、消費者の購買意欲を喚起する方法の必要性と大切さについて学習した。

### 3 2学年の感想

- (1) マーケティングについて詳しく知ることができ、売れる商品、売れない商品のことについても深く知ることが出来ました。
- (2) 商品を売るときや開発するときは自分目線ではなく、お客様視点が必要だと学びました。
- (3) 売れる商品は作るだけではなくその商品の良さを伝えていかないといけないことを学習できました。

### 4 3学年の感想

- (1) どんなに良い商品でも黙っていても、商品の良さは伝わらないことを学習できました。
- (2) 商品で中身が見えない時に、POP等を用いて中身の写真をつけることは有効な手段であることを学習できました。
- (3) たくさんの量を売り場に出すだけで、売り上げは変化することを学ぶことができました。

### 5 成果

- (1) 商品を販売するためには製造するだけではなく商品の価値観をどのように伝えていくか、考える必要があることを生徒に理解させることができた。
- (2) 商品開発を行う上で、消費者がどのようなことを商品に求めているのか、生徒に考察させることができた。
- (3) マーケティング方法に関するグループ学習をとおして、商品開発に対する互いの意見を交換したことで、生徒の学習を深化させることができた。

### 6 課題

- (1) マーケティングに関する演習時間が長くなり最後まで内容を進めることができなかつたため、次年度は商品の魅力を伝える方法などの要点に絞り生徒に学習させる必要がある。
- (2) 商品開発や課題研究で開発している商品のマーケティング方法について知識を深めさせるため、次年度は各研究班で開発している商品をテーマに取り組みさせる必要がある。
- (3) より専門的な学びを行うため、次年度はマーケティングにおける基礎的な知識を生徒に事前に習得させ、発展的な内容を多く取り入れる必要がある。



写真64 「販売促進」の授業の様子

## VIII-5 【新商品コンペ】目指せ！我が町の「特産品」～地域で共創する商品開発～

### 1 目的

- (1) ねらい 高校生発案の加工品コンペ会を中小企業を対象に開催し、地域が求める商品を理解できるように指導する。
- (2) 身に付けさせたい資質・能力 ◎表現力 ○判断力

### 2 授業内容・研修内容

- (1) 期 日 12月9日(金)
- (2) 会 場 北海道静内農業高等学校 体育館
- (3) 参加者 食品科学科2学年17名、食品科学科3学年24名
- (4) 講 師 生活協同組合コープさっぽろ 商品本部 デリカ部部長 岩本 秀文 様  
生活協同組合コープさっぽろ デジタル推進本部広報部部長 緒方 恵美 様  
生活協同組合コープさっぽろ 商品本部デリカ部バイヤー 徳永 隆太 様

生活協同組合コープさっぽろ デリカ部商品開発マネージャー 深川久美子 様  
生活協同組合コープさっぽろ デリカ部商品開発チーフ 新山 佑奈 様

- (5) 概 要 道内有数のスーパーであるコープさっぽろのデリカ部門で商品を取り扱って頂くため、1年間掛けて開発してきた商品を生徒がプレゼンテーションをおして写真65のように発表した。その内容についてコープさっぽろの社員5名に評価を頂き、評価内容をおして地域産業や小売業について理解を深め、地域が求める商品について必要な知識を学習した。

### 3 2学年の感想

- (1) 自分達の商品だけではなく、他の班の商品やプレゼンを見て、とても勉強になったし、参考になる内容ばかりで今後も頑張ろうと思いました。  
(2) 開発したものをさらに活用し、原価など色々な普段詳しく調べていないところまで学べて知識や技術の向上に繋がったと感じました。  
(3) 商品のプレゼンの際、相手に伝えるべきことを明確にして伝えることが大切だと学ぶことが出来ました。

### 4 3学年の感想

- (1) コープさっぽろ様の質問を沢山聞くことができ、何が良くて何が良いのか、しっかりと分かるような質問ばかりで、これからどうするべきなのか、何をすべきなのか分かった気がします。  
(2) 様々な視点のアドバイスや意見を頂くことが出来て、将来に繋がる良い勉強になりました。  
(3) 自分達の商品のアピールポイントを明確にして、商品を販売することの大切さを今回のコンペをおして、理解できたような気がしました。

### 5 成 果

- (1) 開発した商品を用いた加工品を考案し試作させることにより、3次加工品を販売することの意義を生徒に考えさせることができた。  
(2) 地域で商品を取り扱うためには、地域や製造業者が販売できる視点を踏まえ開発していくことが重要であることを生徒に理解させることができた。  
(3) 売れる商品を開発するためには、美味しさはもちろんのこと、市場を分析し計画して商品を開発していくこと等が重要であることを生徒に理解させることができた。

### 6 課 題

- (1) コープさっぽろ様と生徒が関わる時間を発表以外に計画していなかったため、コミュニケーションや評価を生徒一人一人が聞くことができる時間を確保する必要がある。  
(2) 今年度は初の取組として2～3学年合同で授業を実施してきたため、次年度以降は生徒の学びが重複しないようカリキュラムを調整する必要がある。  
(3) 企業が実践する価格設定方法について生徒が学習する時間が少なかったため、次年度以降は生徒一人一人が実践的な価格設定ができるよう、商品開発の授業の中での時間を確保していく必要がある。



写真65 「【新商品コンペ】目指せ！我が町の「特産品」～地域で共創する商品開発～」の授業の様子

## VIII-6 商品開発

### 1 目 的

- (1) ねらい 学校での学習活動に有機的につなげるため、外部機関で実践する食品流通の実態を把握するとともに、今後の食品流通・マーケティングの在り方を考察できるよう指導する。  
(2) 身に付けさせたい資質・能力 ◎想像力 ○思考力

### 2 授業内容・研修内容

- (1) 期 日 12月7日(水)  
(2) 会 場 北海道静内農業高等学校 視聴覚室  
(3) 参加者 食品科学科1学年21名  
(4) 講 師 国分北海道株式会社地域共創部 商品共創課長 石田 健二 様  
国分北海道株式会社地域共創部 商品共創課グループ長 田口 静恵 様  
(5) 概 要 食品開発のプロセスを企業がに行った商品開発に照らし合わせ写真66のように学習するとともに、商品開発における基本的なマーケティング手法のSTP分析や、ブルーオーシャン戦略、戦略的BASICSについて写真66のように学習した。演習ではグループ毎に地元の食材を使用した商品開発案の立案を戦略的BASICSに照らし合わせ学習を行った。

### 3 生徒の感想

- (1) 来年の研究班活動で行う商品開発に生かせる知識を身に付けることができました。商品開発を行う際は戦略的BASICSを活用したいと思いました。
- (2) 国分北海道様の商品を実際に試食するとともに、その商品ができたストーリーを聞き、商品開発の楽しさややりがいがありました。国分北海道様の商品のサクリチーズのファンになりました。
- (3) 私は将来、食に携わる職業に就きたいと思っています。最後にお話された商品開発に求められる能力・スキルの中で一番大切な要素は、人生を楽しめる人と言うことを聞き、これからの学校生活でも意識し、何事にも前向きにチャレンジしてみようと思いました。

### 4 成果

- (1) 企業が行った商品開発の事例を、企画フェーズ・調整フェーズ・実行フェーズ・検証フェーズに沿って学習したことで、商品開発のプロセスを生徒に身に付けさせることができました。
- (2) STP分析、ブルーオーシャン戦略、戦略的BASICSといった、企業が商品開発時に行うマーケティング手法について、生徒が実践的に学習を行うことができました。
- (3) 地域資源を活用した商品開発の演習を行ったことで、地域資源の魅力や活用方法、効果的なマーケティング手法について生徒に理解させることができました。

### 5 課題

- (1) 今後の研究班活動及び商品開発時に、今回学んだ戦略的BASICS等のマーケティング手法を取り入れ、生徒が商品の企画・調整・実行・検証を行えるよう指導する必要がある。
- (2) 地域資源を生かした商品開発を行うためには地域を知ることが重要であるため、地域関係団体との協力体制を強化するとともに、地域の魅力や課題を生徒が学習できる機会を設けていく必要がある。
- (3) 商品開発に関する知識を深化させるため、生徒が取り組んできた商品開発のプロセスやマーケティング戦略を実際に企業の方に評価していただく機会を設けていく必要がある。



写真66 「商品開発」の授業の様子

## Ⅷ-7 新ひだか町の特産品と特産品作りの考え方

### 1 目的

- (1) ねらい 地域農業の実態や特色などに応じて、適切な題材を選定することができるよう指導する。
- (2) 身に付けさせたい資質・能力 ◎表現力 ○思考力

### 2 授業内容・研修内容

- (1) 期 日 5月23日(月)
- (2) 会 場 北海道静内農業高等学校 体育館
- (3) 参加者 食品科学科2学年17名、食品科学科3学年24名
- (4) 講 師 株式会社TAISHI ディレクター 嶋田 健一 様
- (5) 概 要 地域農産物を活用した商品開発を行うために地域の農業や食品産業について写真67のように学習した。また、グループ学習をとおして今後活用する地域素材について選定した。

### 3 2学年の感想

- (1) 今年から授業に入ってきた商品開発の授業を、これから一生懸命頑張ろうと思いました。
- (2) 新ひだか町に暮らしているのに知らなかった地域の魅力が沢山知れてとても勉強になりました。
- (3) グループワークをとおして、他の人の意見を知ることができて良かったです。

### 3 3学年の感想

- (1) 3年生は3グループに分かれ商品開発を行っていく予定なので、それぞれの分野で良い商品が出来るように頑張りたいと思いました。
- (2) 地域の食関連産業の方々も、地域のために頑張ろうとしていること学習できました。
- (3) 当たり前にある地域素材が、商品開発をする上で使用できることはとても嬉しく思いました。

### 4 成果

- (1) 地域農産物や地域の事業者を学習させることで、今後どのように商品を開発していけば良いか、生徒に考えさせることができました。
- (2) 地域農産物の魅力を知り、地域農産物を活用していくことを題材としたことで、地域の魅力を生徒に理解させることができました。
- (3) グループワークをとおして他者と意見交換をしたことで、特産品づくりに必要な地域素材を生徒に考察させることができました。

## 5 課 題

- (1) 特産品にはどのような商品があるか知識を深めるため、商品開発を行う他校との情報交換や北海道が公開している市町村特産品リスト等をもとに学習させる必要がある。
- (2) 商品開発の授業を進める上で、生徒が地域の農産物や事業者を知る機会を4月～5月上旬に設ける必要がある。
- (3) 地域の消費者や観光客はどのような購買心理を持ち特産品を求めているのか生徒に学習させるため、アンケートデータを集計し指導していく必要がある。



写真67 「新ひだか町の特産品と特産品作りの考え方」の授業の様子

## VIII-8 試作品の評価と試食会

### 1 目 的

- (1) ねらい 開発してきた特産品の試食会をとおして、顧客の求めている価値やニーズ、消費動向を踏まえた特産品開発ができているか考察・分析し、主体的な特産品開発を展開することができるよう指導する。
- (2) 身に付けさせたい資質・能力 ◎判断力 ○表現力

### 2 授業内容・研修内容

- (1) 期 日 1月24日(火)
- (2) 会 場 北海道静内農業高等学校 体育館
- (3) 参加者 食品科学科2学年17名, 食品科学科3学年24名
- (4) 講 師 株式会社T A I S H I ディレクター 嶋田 健一 様
- (5) 概 要 地域と協働で開発してきた特産品の試食会を、新ひだか町役場や関係機関と合同で行い、今後より良い特産品開発になるよう写真68のように意見交換を行った。

### 3 2学年の感想

- (1) 今までの学習をとおして、商品を1から考え、開発する知識が身に付きました。
- (2) 自分達で何かを創り上げることは大変ですが、多くの力が身に付いたと思います。
- (3) どんな人に向けて作るのか、何のために作るのかを明確にしておくことが、商品開発ではとても重要だということを学ぶことができました。

### 4 3学年の感想

- (1) 色々な材料を使ってどんな味にしていくか、決めるのがとても大変でしたが、事業者さんが作るまでたどり着くことができ良かったです。
- (2) 班長としてみんなの意見をまとめ、それを形にすることは大変でしたが、一人には出来ない力なのでとても勉強になりました。
- (3) 事業者さんに製造して頂いたものは、私達の想いを汲み取ってくれたものばかりで、とても嬉しい気持ちになりました。私達はこれで終わりですが、商品が売れて欲しいと思います。

### 5 成 果

- (1) 顧客の求めている価値やニーズを踏まえ、地域農畜産物を活用しながら特産品を開発していく難しさを生徒に理解させることができた。
- (2) 新ひだか町役場や地域関連産業等と意見交換をしながら試食会を進めたことで、地域が求める特産品を生徒に理解させることができた。
- (3) 生徒発案のアイデアが事業者での生産に生かされる学習をとおして、商品開発の手法を生徒に理解させることができた。

### 6 課 題

- (1) 生徒の意見の中に事業者とのやりとりを増やしたいという意見が見られたため、来年度は事業者とアイデア考案・試作等を行う時間を確保する必要がある。
- (2) 3年生に対して、事業者が生産した商品を販売する機会を設けることが出来なかったため、商品企画から販売までの流れを学ばせることができるように授業計画を改善する必要がある。
- (3) 市場のニーズを分析し、マーケットインの視点から商品の企画ができるようにするため、市場のデータの収集とそのデータの活用方法を生徒に指導する必要がある。

## 7 試食会参加者

団体等名	役職	氏名
新ひだか町	町長	大野 克之 様
新ひだか町	副町長	田中 伸幸 様
新ひだか町	総務部長	柴田 隆 様
一般社団法人新ひだか観光協会	事務局長	下条道 寿 様
新ひだか町商工会	事務局長	渡辺 勝造 様
みついし農業協同組合	営農部長	三浦 直己 様
みついし農業協同組合	営農部長	丹野 潤一 様
有限会社あま屋	料理長	谷 昇三 様
北海道クラフトビネガー株式会社	取締役社長	渡辺 英人 様
みついしょうじ株式会社	ふるさと納税担当	石丸 理佳 様
みついしょうじ株式会社	ふるさと納税担当	澤田 咲季 様
新ひだか町	課長	中村 英貴 様
新ひだか町	主幹	平田 明浩 様
新ひだか町	主事	井上 和哉 様
株式会社TAISHI	代表取締役	菅野 剛 様
株式会社TAISHI	ディレクター	嶋田 健一 様



写真68 「試作品の評価と試食会」の授業の様子

## VIII-9 販売活動(東京グルメ&ダイニングスタイルショー)

### 1 目的

- (1) ねらい 開発した商品を地域の特産品として、企業と連携しながら販売活動を実践することができるよう指導する。
- (2) 身に付けさせたい資質・能力 ◎実践力 ○表現力

### 2 授業内容・研修内容

- (1) 期 日 2月15日(水)～2月17日(金)
- (2) 会 場 国際展示場(東京ビッグサイト)東棟6ブース
- (3) 参加者 食品科学科2学年5名
- (4) 運 営 東京グルメ&ダイニングスタイルショー運営事務局
- (5) 概 要 日本最大級の商談会で、高級食材店・外食産業・酒販店・ホテル・旅館などを始めとする多くのバイヤーに、地域と協働で開発してきた特産品を、新ひだか町役場や関係機関と合同で商談活動を写真69のように行った。3日間の商談活動をとおして、20社以上の企業に興味を持って頂くことができた。

### 3 感想

- (1) 自分達が開発してきた商品を実際にバイヤーに取り扱って貰うためには、どのような言葉を使えば良いのか考えることが難しかったけど、日に日に説明やPRができるようになりました。
- (2) 自分達が開発してきた商品が、道外の方々に認められたことで、次年度もっと頑張ろうと思いました。

(3) 人が途切れることなくブースにバイヤーが来てくれ、たくさん話せたことで、モノの売り方には色々な方法があることを学ぶことが出来ました。

#### 4 成 果

(1) 日本最大の商談会で、多くのバイヤーと話す機会が得られたことで、企業が求める商品を生徒に理解させることができた。

(2) イベントに出展する道外の事業者の特産品等を知ることができたことで、生徒に地域の資源について理解させることができた。

(3) 地域事業者と共に商談活動を行うことで、商談するための言葉使いや実践的なPR方法の技術を、生徒に身に付けさせることができた。

#### 5 課 題

(1) 参加人数が5名と限られたため、次年度は北海道で開催される商談会への参加やオンラインでつながり等、生徒全員が学ぶことができる機会を設ける必要がある。

(2) どのようなバイヤーへ繋ぎたいのか、参加出来なかった事業者と事前に打ち合わせをすることができなかつたため、次年度は事前に事業者と生徒が打合せをした上で参加する必要がある。

(3) イベントに出展する道外の事業者と話す機会を設けることができなかったため、次年度は参加する事業者と話す機会を設け、商品開発の学びを深められるよう、生徒へ事前に指導する必要がある。



写真69 「試作品の評価と試食会」の販売活動の様子

### VIII-10 eコマース

#### 1 目 的

農業分野において、インターネットを事業に活用し地域で活躍できるデジタル人材を育成するため、ヤフー株式会社の通販サイトを通じて、ふるさと「新ひだか町」の特産物や本校の学校農場生産品等の情報発信や販売の方法を学ばせる実践的教育に取り組み、地域に先駆けたビジネスモデルを創り出すとともに新ひだか町経済の活性化を図るよう指導する。

2 対象生徒 食品科学科2年生17名、生産科学科2年生23名

#### 3 プログラムの開発と実践

1年間の学習プログラムは、ヤフー株式会社SR推進統括本部の皆様と連携し立案した。実際の指導に当たっては、ヤフー株式会社SR推進統括本部と連携し授業の計画を立案し、写真70のように本校教諭が指導した。

#### 4 授業内容・研修内容

回・日時	講師，授業者	内 容	身につけさせたい 資質，能力
第1回目 6月16日(木)	ヤフー株式会社 SR推進統括本部 旭 慎太郎 様	「オリエンテーション」 ・講話(eコマースについて講師より講話) ・グループ活動①(チーム力を高める演習) ・グループ活動②(EC管理ツールに関する演習)	◎思考力 ○判断力
第2回目 6月28日(火) 7月8日(金)	教諭 田中 彩佳 教諭 三浦 創	「商品を理解する」生産者へインタビューをする。 ・グループ活動①(生産者について深く知る演習) ・グループ活動②(商品の質問事項を考える演習) ・グループ活動③(生産者から商品情報を聞く演習)	◎実践力 ○表現力
第3回目 7月14日(木) 8月17日(水) 8月22日(月)	教諭 田中 彩佳 教諭 三浦 創	「写真撮影技術を学ぶ」 ・視聴(動画にて撮影技術の学習) ・グループ活動①(商品の写真構図を考える演習) ・グループ活動②(商品写真の撮影)	◎創造力 ○実践力

第4回目 8月29日(月) 9月5日(月) 9月13日(火)	教諭 田中 彩佳 教諭 三浦 創	「消費者に伝わる文章を学ぶ」 ・グループ活動①(生産者から集めた情報を整理) ・グループ活動②(どう伝えるかをテーマに商品ページを作成する演習)	◎表現力 ○創造力
第5回目 9月22日(木)	ヤフー株式会社 SR推進統括本部 旭 慎太郎 様 水上 哲也 様	「マーケティングを学ぶ」 ・講話(マーケティングについて講師より講話) ・グループ活動(ターゲットを設定する演習)	◎表現力 ○創造力
第6回目 10月14日(金)	教諭 田中 彩佳 教諭 三浦 創	「作成内容を振り返る」 ・グループ活動(今までの学びから商品ページを振り返る演習)	◎創造力 ○実践力
第7回目 10月24日(月) 11月7日(月)	教諭 田中 彩佳 教諭 三浦 創	「販売内容の最終確認をする」 ・グループ活動(作成した商品ページの見直し)	◎判断力 ○創造力
第8回目 12月5日(月) 1月27日(火)	教諭 田中 彩佳 教諭 三浦 創	「成果をまとめる」 ・グループ活動(商品ページの閲覧数などの情報から今回学んだことをまとめる)	◎判断力 ○創造力
第9回目 2月7日(木)	ヤフー株式会社 SR推進統括本部 旭 慎太郎 様	「成果発表」 ・各班学んだ成果をまとめたものを発表し、講師より講評をもらう。	◎表現力 ○実践力

## 5 感想

- (1) 文字で相手に伝えることの大変さを学びました。
- (2) サイトを見てもらうためには、漢字ばかりを使うのではなく、ひらがなやカタカナなどを使い、どのような検索の仕方でもヒットしやすいように細かな仕掛けをする事が大切だということがわかりました。
- (3) グループで役割分担を決め活動することで、一人で悩むより課題を効率よく解決していけることがわかりました。
- (4) 普段SNSに使用する写真を撮るので写真撮影は簡単だと思っていましたが、商品の良さを引き出すために撮る写真は角度に気をつけたりと簡単ではないことを知ることができました。
- (5) 他の班の発表を見ていると、自分たちの班と力を入れる部分が違いとても参考になりました。
- (6) 普段インターネットで買い物をするときにページをくまなく確認することはありませんでした。ですが、商品ページを1つ作るだけなら簡単ですが、その商品を見えない相手に伝えるためのページを作るためには、さまざまな工夫が必要なことがわかりました。

## 6 成果

- (1) インターネットショッピングサイトを活用した商取引について、実践的な技術を生徒に身に付けさせることができた。
- (2) 新ひだか町観光協会と連携したショッピングサイトを運営できたことにより、地域資源の魅力を生徒に発見させることができた。
- (3) チームで課題に取り組む姿勢や態度、取り組んだあとの成果を生徒に感じさせることができ、協働して取り組むことの大切さを生徒に理解させることができた。

## 7 課題

- (1) 商品アイテム数を増やし、1商品に対して取り組む生徒人数の調整の必要がある。
- (2) 学習成果が継続して発揮できるよう、新ひだか町観光協会と連携を密にし、インターネットショッピングサイトを継続的に運営できるように取り組む必要がある。
- (3) 地域資源の魅力を更に深く理解できるよう、他の科目と学習内容を整理し指導を進める必要がある。



写真70 「eコマース」の授業の様子

## 第9節 遠隔システムを活用した海外の学校との交流

### IX-1 海外の農業高校の生徒との交流 日本の農業(文化)を伝える

#### 1 目的

- (1) ねらい 生徒が英語に触れる機会を充実させ、授業を実際のコミュニケーションの場面をとおして、農業科で学んでいる知識を身に付けるように指導する。
- (2) 身に付けさせたい資質・能力 ○思考力 ◎表現力

#### 2 授業内容・研修内容

- (1) 期 日 令和4年6月18日(土)～7月20日(水)
- (2) 会 場 北海道静内農業高等学校
- (3) 参加者 食品科学科・生産科学科全学年141名
- (4) 概 要 昨年度から日仏農業教育連携事業の一環として交流をしてきたフランスのLycée les Vergers(ヴェルジェ高校)から2名の留学生を受け入れ、本校の生徒と授業や実習、学校行事をとおして写真71のように交流を行った。

#### (5) 詳細

- ア 経 緯 農林水産省日仏農業教育連携事業で交流相手校となった、Lycée les Vergersと昨年度来、本校3年生の全生徒がオンライン上でのコミュニケーションを図ってきた。令和3年12月に在フランス日本大使館を通じて、本校への訪問を希望する生徒がいる旨の連絡があり、受け入れの可否を含めた検討を開始した。
- イ 入国手続 新型コロナウイルス感染症の流行による渡航に関する様々な制約のほか、先方から依頼のあった期間が1か月間と比較的長い期間であること、留学生の受け入れ先、経費に係る事柄について懸念がなされた。入国検疫上の条件が刻々と変わる中ではあったが、在留管理庁に確認したところ、本留学生には一定の条件のもとに短期滞在許可の在留資格が発給される可能性があるとのことで、1つ目のハードル通過の見通しを付けることができた。
- ウ 受け入れ 留学生受け入れ先の確保については、マイスターハイスクール事業を通じて地元の関係団体から静内インターナショナルクラブ(SIC)の紹介を受けた。SICは、新ひだか町の姉妹都市であるアメリカ・ケンタッキー州のレキシントン市との交流を中心に担っており、国際交流のノウハウ蓄積があり、フランス人留学生受け入れに関してもご理解を示していただいた。本事業についてはSIC副代表の谷岡牧場様において1か月間インターンシップとホームステイを受け入れていただいた。
- エ 交流事業 留学生は滞在先牧場でのインターンシップと本校での留学を主な目的としたが、国際交流事業をとおして地元地域との連携強化を図るために様々な交流イベントを企画した。主な日程は次のとおり。

日 付	内 容
6月18日(土)	到着(羽田経由—新千歳)
6月20日(月)	高校訪問・打ち合わせ
6月21日(火)	新ひだか町長表敬訪問
6月19日(日)～26日(日)	牧場・農業インターンシップ
6月27日(月)～7月5日(火)	高校留学“La Semaine de France”(フランス週間)
6月27日(月)	静内農業高校全校歓迎会(All Englishにて実施)
6月28日(火)	英語科・家庭科・馬事コース教科連携授業
6月29日(水)	桜丘小学校児童との日仏交流
7月3日(日)	静内農業高校で送別会(フェアウェル)
7月6日(水)	静内ロータリークラブ歓迎会
7月6日(水)～19日(火)	牧場・農業インターンシップ
7月11日(月)	高静小学校児童との日仏交流
7月13日(水)	北海道大学静内研究牧場視察
7月20日(水)	帰国(新千歳—羽田経由)

#### 3 生徒の感想

- (1) 馬のセリと一緒にいたり、朝学習と一緒にやったりと必ず話せるチャンスがあったことが良かった。そして、英語の授業で本物のフランス語を聞いて感動しました。
- (2) フランス語には男性形とか女性形があるということを知って複雑そうだけど面白くて、自分の知らない外国語や話している人達たちの文化に興味を持つことができました。



- (3) 英語が苦手なスマホアプリを使って話していましたが、英語ができたらもっとお互いを知る事ができたのかなと後悔しました。連絡先を交換し、放課後に遊んだら英語がわからなくても意外に話が通じて、とても笑いました。

#### 4 成 果

- (1) 国際交流を軸とした英語教育の充実に関して、留学生を招へいすることで、英語の得手不得手にかかわらず多くの在校生にとって刺激となり、生徒に異文化や言語への関心を高めさせることができた。
- (2) 地域の各種関連団体や牧場、自治体、小学校などの連携・協力があり、単なる留学生訪問にとどまることなく、今後の本校英語教育を進めていく上での関係機関との連携体制を構築することができた。
- (3) 日仏農業教育連携事業での留学生受け入れは国内で初めての取り組みとなり、様々な場所で本校生徒の活動が評価されることにもつながった。また、令和5年2月には農林水産省のフランス訪問プロジェクトに本校生徒3名が選ばれ、リヨン市にて農業高校訪問やワイナリー・農場見学、ホームステイなどを通じて、日仏両国の生徒同士の交流を深めるとともに、現地の日本食普及イベント等へ生徒に参加させることができた。

#### 5 課 題

- (1) 留学生の受け入れプログラムは特に地域の方々のボランティア精神あふれる善意により実現できたところが大きい。特に、事業計画を立案後に受け入れを快諾いただき、1か月にわたり滞在のホストファミリーとして協岡牧場様にはご負担をおかけした。事業継続性を見据え、新ひだか町の姉妹都市交流委員会を通じて協力を募るといった幅広い呼びかけが必要である。
- (2) 特に海外学校との事業実施は、既定の制度で十分対応しきれないことがあり、関係諸機関との密な連携の上、合理的な配慮と柔軟な対応についての教職員の理解が必要である。
- (3) ヴェルジェ高校は今年度以降の教職員・生徒の移動を含む交流を希望しているため、分掌に位置付ける等、学校としての受け入れ体制を整備する必要がある。



写真71「海外の農業高校の生徒との交流 日本の農業(文化)を伝える」の交流の様子

### IX-2 遠隔システムを活用した海外の学校との交流

#### 1 目 的

- (1) ねらい 生徒が英語に触れる機会を充実させ、実際に役立つ英語によるコミュニケーション能力を身に付けるように指導する。
- (2) 身に付けさせたい資質・能力 ○思考力 ○表現力 ◎実践力

#### 2 授業内容・研修内容

- (1) 期 日 令和4年4月から毎月1回程度の交流を随時実施
- (2) 方 法 オンライン(教育用動画共有サービスflip)
- (3) 相手校 LaFayette High School (アメリカ・ケンタッキー州)  
Lycée les Vergers (フランス・イル＝エ＝ヴィレーヌ県)  
James Ruse Agricultural High school (オーストラリア・ニューサウスウェールズ州)
- (4) 参加者 食品科学科・生産科学科全学年141名
- (5) 概 要 本校の所在地である、新ひだか町の姉妹都市レキシントン市のLaFayette High Schoolで日本語を履修する生徒と英語および日本語を用いた写真72のように交流を行った。本校生徒1名に対して、相手校の生徒1名を基本のペアとし、身の回りのことや学校生活など様々なトピックについて話し合った。フランスのLycée les Vergersにあつては日仏農業教育連携事業の枠組みを活用し、農業分野での交流もテーマとした授業を実施した。なお、交流相手校のうち、アメリカのLaFayette High Schoolは昨年、オーストラリア・ニューサウスウェールズ州にあるJames Ruse Agricultural High schoolはオーストラリアで名門に数えられる農業高校であり、本校英語科において今年度新たに開拓した。

#### 3 生徒の感想

- (1) 新しい刺激があり、英語をもっと話せるようになりたいと思うようになり、英語を勉強する力になったと思う。
- (2) もちろん英語をもっと勉強して話せるようになりたいけど、コミュニケーションで大事なことは、笑顔とか伝えようとする事でなんだかんだ伝わるんだ！と感じた。
- (3) 交流している相手校から留学生も来日して、国際交流にとっても興味がわきました。私も海外に行ってみたいと思うようになりました。

#### 4 成 果

- (1) 昨年度から継続して交流している2学年では、導入当初に比べ、英語を話したり動画を撮影したり

- することに慣れ、コミュニケーションそのものを楽しみを見出す喜びを生徒に体験させることができた。
- (2) 昨年度の状況を相手校の担当者と振り返り、交流テーマの設定や生徒の状況についてオンラインミーティングを通じて共有し改善することにより、活発な交流活動を生徒に体験させることができた。
  - (3) 海外の文化や人々に触れ、生徒たちが普段意識することの少ない「外の世界」について生徒に感じる機会を増やすことができた。また、様々な国際交流の事業に興味を持ち積極的に生徒に取り組みさせることができた。

## 5 課 題

- (1) 昨年度の反省をふまえ、本校と相手校の負担を軽減するため交流の回数を月1回程度に削減したが、生徒の中にはもっと交流の頻度を増やしてもらいたいと考える者もいたため、交流頻度や方法について再考及び改善していく必要がある。
- (2) オーストラリアの高校は日本との時差が少ないことから、ライブ接続によるオンライン交流授業を次年度から実施できるように相手校と調整を行う必要がある。
- (3) 生徒が自らの考えを自由に表現することでコミュニケーションを活発にすることができるように、汎用性の高い英語表現や相手校の生徒がよく使う語彙をさらに強化して身に付けさせていく必要がある。

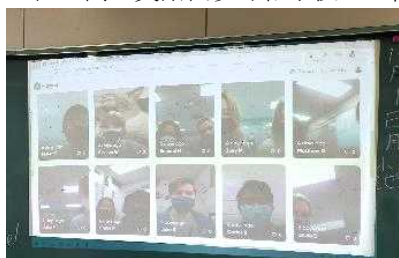


写真72「遠隔システムを活用した海外の学校との交流」の授業の様子

## IX-3 英語を通じたコミュニケーション (Englih Salon)

### 1 目 的

- (1) ねらい 授業以外の場面でリラックスした雰囲気の中で英語を通じたコミュニケーションをとり、英語でコミュニケーションをとる姿勢を身に付けるように指導する。
- (2) 身に付けさせたい資質・能力 ○表現力 ◎実践力

### 2 授業内容・研修内容

- (1) 期 日 令和4年6月1日(水)～令和5年3月31日(金)のALT来校日
- (2) 会 場 北海道静内農業高等学校 図書室
- (3) 参加者 食品科学科・生産科学科全学年希望者
- (4) 講 師 ルーカス・シヴァン、センカリ・ウィリアムズ
- (5) 概 要 ALTと気軽に英語でコミュニケーションをとることができる空間の中で、日常会話で使われる表現や英語の独特な言い回し、文化等を写真73のように学習した。

### 3 生徒の感想

- (1) 今まで授業以外にALTの先生と関わることがあまりなかったので、Englih Salonで沢山話すことができ嬉しかったです。
- (2) ALTの先生とお話する中で、初めて知った英語の面白い表現や文化を学ぶことができとても勉強になりました。また先生とお話しするのが楽しみです。
- (3) 話したいことがあっても英語でそれをどう言えばいいのかわからないことがあり、もっと英語を勉強しようと思いました。

### 4 成 果

- (1) 生の英語に触れ、自発的に英語で会話をする機会を増やし生徒の英会話技能を高めることができた
- (2) ALTとのコミュニケーションを通して、日本と海外の文化や価値観の違い等を生徒に理解させることができた。
- (3) 日常会話で使用される語彙や表現を生徒に身に付けさせることができた。

### 5 課 題

- (1) より多くの生徒がEnglih Salonに参加し、英語や英語圏に興味を持ち、自らの視野を広げていくことができるよう、活動の周知を工夫していく必要がある。
- (2) 会話活動を通して生徒がより深い学びを得ることができるよう、内容の改善・充実を図る必要がある。
- (3) Englih Salonで学んだ事と普段の授業の学びが有機的に結びつくよう、ALTとの連携をより深めていく必要がある。



写真73 「英語を通じたコミュニケーション (Englih Salon)」の交流の様子

## 第10節 キャリア・パスポートの活用（指定期間において継続して活用）

### X-1 キャリア・パスポートの活用（指定期間において継続して活用）に関する取組

#### 1 目的

- (1) ねらい キャリア・パスポートへの取り組みを通して、自己の変化や成長を自分の目で見えて気づくことができるようにするとともに、自分の将来や働きたい仕事について主体的に考えられるように指導する。
- (2) 身に付けさせたい資質・能力 ◎思考力 ○表現力

#### 2 授業内容

- (1) 期 日 令和4年4月8日(金)～令和5年3月24日(金)
- (2) 場 所 北海道静内農業高等学校
- (3) 参加者 食品科学科・生産科学科全学年139名
- (4) 概 要 国立教育政策研究所が示したキャリア・パスポートを参考に本校の書式を作成し、生徒自身が高校生活の学びとキャリア形成の関係性について見通しを持って生活できるように写真74のように学習した。

#### 3 生徒の感想

- (1) これまでの学習の振り返りを元に、次の目標を決める機会となり良かった。
- (2) 振り返る機会ができて良い、改めて書くことの大切さを学べて良かった。
- (3) 進路実現に向けて、落ち着いて考える機会ができたので、良かった。

#### 4 成果

- (1) 1年生では、将来を見据えた目標設定することの大切さを生徒に理解させることができた。
- (2) 2年生では、自分自身の振り返りとともに、高校生活で学ぶべきことや将来に向けたキャリア形成の考え方を生徒に理解させることができた。
- (3) 3年生では、自己理解を高め、将来の進路を考える資料として生徒に活用させることができた。

#### 5 課題

- (1) 1年生は、書く内容を自分で考えることができない生徒もいた。また、取り組みやすい書式の研究と指導方法の改善が必要である。
- (2) 2年生は、自分自身が成長できていないことに気づいてもそのまま過ごしてしまうことや、就きたい仕事が明確にならなくて悩んでしまうなどがあるため、担任が中心となって生徒の進路相談に対応するための体制づくりなどが必要である。
- (3) 3年生は、進路活動の際に自己理解や志望理由を文章でまとめるための有効な手段として活用していくことを習慣として定着させる必要がある。



写真74 「キャリア・パスポート」の記入に取り組む様子

### X-2 上級学校を知る

#### 1 目的

- (1) ねらい 農業に関する実践的な学習活動を行うため、大学及び農業大学校などと連携を図り、地域における産業の実態を把握し、今後の在り方を考察することができるよう指導する。
- (2) 身に付けさせたい資質・能力 ◎実践力 ○想像力

#### 2 授業内容・研修内容

- (1) 期 日 11月2日(水)
- (2) 会 場 北海道大学農学部キャンパス
- (3) 参加者 食品科学科1学年21名、生産科学科1学年38名 計59名
- (4) 講 師 北海道大学大学院農学研究院 地域連携経済学研究室 准教授 小林 国之 様  
北海道大学大学院農学研究院 食品栄養学研究室 教授 石塚 敏 様  
北海道大学大学院農学研究院 園芸研究室 講師 実山 豊 様
- (5) 概 要 大学の概要について説明を受け、学科別に模擬授業を写真75のように受講した。その後、研究室を見学し大学院生とフリートークを行った。バスによるキャンパス見学では小林准教授から説明を受けた。模擬授業の内容は次の通り。

- ・食品科学科 「未病の成り立ちを考える ―食べ物で予防できる病気の芽―」  
教授 石塚 敏 様
- ・生産科学科 「究極の持続的農法，自然栽培の畑にて」  
講師 実山 豊 様

### 3 生徒の感想

- (1) 初めての大学視察でしたが，大学ではどのような学習ができ，どのような研究をしているのかがわかりました。
- (2) 大学生の皆さんと交流する中で，高校生のうちに身に付けた方が良いこと，挑戦した方が良いことがわかりました。
- (3) 私は将来大学進学を目指しているので，今回の模擬授業や研究内容の紹介はとても勉強になりました。難しい部分もありましたが，今後もっと勉強して理解できるようになりたいと思いました。

### 4 成 果

- (1) 学内や研究室の見学，模擬授業をとおして，大学の概要や農学部の研究内容について生徒に理解させることができました。
- (2) 大学院生との交流をとおして，卒業後のキャリア形成について生徒に考えさせることができました。
- (3) 最新の研究内容や設備を見学したことで，今後のプロジェクト学習に繋がる内容を生徒に理解させることができました。

### 5 課 題

- (1) 視察の効果を高めるため，大学で学ぶことの意義や大学の歴史等に関する事前学習を行う必要がある。
- (2) 進路意識をより高めるため，自己のキャリアプランニングについて事前に十分考えて視察に望むよう，進路指導部と連携し事前指導を行う必要がある。
- (3) 生徒のよりよい進路選択を構築するため，進路活動に生かせるポートフォリオを作成していく必要がある。



写真75 「上級学校を知る」の授業の様子

## X-3 実用英語技能検定等に関する対策

### 1 目 的

- (1) ねらい 資格取得を目標とした英語学習を通じて，言語運用能力を育成し，実践的な英語力を身に付けるように指導する。
- (2) 身に付けさせたい資質・能力 ◎実践力 ○表現力

### 2 授業内容・研修内容

- (1) 期 日 令和4年4月1日(金)～令和5年3月31日(金)
- (2) 会 場 北海道静内農業高等学校
- (3) 参加者 食品科学科・生産科学科全学年希望者
- (4) 担 当 北海道静内農業高等学校英語科教員
- (5) 概 要 実用英語技能検定に向けて，受験希望者に対して写真76のように課外学習を実施した。

### 3 生徒の感想

- (1) 過去問や問題集を解くことで，自分の苦手な部分と得意な部分が変わり，効率的に勉強することができました。
- (2) 事前に対策をしたことで試験に対する不安が和らぎ，自信を持って試験を受けることができました。
- (3) 検定の勉強をしたことで，普段の授業の内容への理解が深まりました。

### 4 成 果

- (1) 試験対策や学習方法などについての指導を通して，試験に対する生徒の理解を深めることができた。
- (2) 検定に向けた学習や受検を通して語彙や使用頻度の高い表現等を生徒に身に付けさせることができた。
- (3) 検定に向けた学習や受検を通して，学習する習慣を生徒に身に付けさせることができた。

### 5 課 題

- (1) より多くの生徒が検定を受検し，学力を伸ばしていくことができるよう，案内の方法や指導内容の改善，工夫をしていく必要がある。
- (2) 各生徒が目標とする級に合格することができるよう，普段の授業においても語彙や表現についての指導をわかりやすく，より理解が深まるかたちで行っていく必要がある。

(3) 作文や二次の英語での面接をクリアできるよう、指導を充実させていく必要がある。



写真76 「実用英語技能検定等に関する対策」の授業の様子

#### X-4 食品表示に関する検定対策

##### 1 目的

- (1) ねらい 課題を解決する力の向上を目指して自ら学び、農業の創造と発展に主体的かつ協働的に取り組む態度を身に付けるよう指導する。  
 (2) 身に付けさせたい資質・能力 ◎実践力 ○判断力

##### 2 授業内容・研修内容

回・日時・場所	参加者	講師	概要
第1回目 11月8日(火) 特別教室4 (オンライン)	食品科学科 3学年2名 2学年1名	国分北海道株式会社 人事総務部主任 松本 智貴 様	食品表示検定を受験する生徒に対し、模擬問題を作成していただき、模擬試験問題のポイント写真を写真77のように学習した。
第2回目 11月9日(水) 特別教室4 (オンライン)	食品科学科 3学年3名	国分北海道株式会社 人事総務部主任 松本 智貴 様	食品表示検定を受験する生徒に対し、模擬問題を作成していただき、模擬試験問題のポイント写真を写真77のように学習した。

##### 3 2学年の感想

- (1) 勉強していてわからない事があったり、不安なこともたくさんあったので専門家の人からアドバイスをもらえたり、わからない事をすぐに教えてもらえてよかったです。

##### 4 3学年の感想

- (1) テキストではわからない事があったので、専門家の人に話を聞いて良かったです。  
 (2) いただいた模擬問題は思ったよりも難しく、受験日までにはしっかり勉強しないといけないと改めて思いました。

##### 5 成果

- (1) 外部講師より直接ご指導いただいたことで、資格取得に向けた生徒の意欲を向上させることができた。  
 (2) 法律に関する細かい訂正部分などを、具体的にわかりやすく説明いただけたことで、生徒に問題に取り組む姿勢を理解させることができた。

##### 6 課題

- (1) 検定への受験者を増やすため、検定内容を食品流通の授業に組み込む必要がある。  
 (2) 検定受験者は希望生徒のみの参加としたため、来年度は放課後実習の時間を活用し3学年全員に受験させる計画を立てる必要がある。



写真77 「食品表示に関する検定対策」の授業の様子

## 第11節 教育課程の刷新の方向性を検討・改善(次年度、学校設定科目を設定)

### XI-1 教育課程委員会の実施状況

教育課程委員会を8回開催し、教育課程編成に取り組んだ。各学科の教育内容を明確化するとともに、獣医師志望者や4年生大学志望者の対応などについて協議した。開催内容は次のとおりである。

回	日 時	内 容
1	5月12日(木)	・マイスター・ハイスクール事業における課題の明確化 ・単元配列表の作成について
2	6月14日(火)	・単元配列表と教科横断的な学習について(校内研修)
3	7月6日(水)	・教科横断的な授業の実践に向けた情報の共有について
4	9月22日(木)	・教科横断的な授業の実践に向けた進捗状況の確認 ・令和5年度、令和6年度の教育課程編成の方針について ・獣医師、4年制大学進学希望者への対応
5	11月25日(金)	・令和5年度、令和6年度の教育課程編成の方針について ・獣医師、4年制大学進学希望者への対応
6	12月9日(金)	・各教科、学科における育てる生徒像に対する教育内容の検討について ・選択科目の配置に関する意見交換
7	1月19日(木)	・各教科、学科における育てる生徒像に対する教育内容の確認 ・教科主任からの要望とりまとめ ・教科、学科会議における専門科目の選定について
8	2月7日(火)	・令和5年度の教育課程の最終確認 ・令和6年度教育課程の検討について

### XI-2 令和5年度入学生教育課程について

#### 1 令和5年度入学生教育課程における改善事項

第1学年、第2学年において学校設定科目「応用英語」1単位、「応用数学」(1単位)を選択科目として設定する。獣医師志望者や4年制大学志望者に対する学習を強化することを目的とし、長期休業を活用した集中授業として実施する。

#### 2 令和5年度学年別教育課程について

第1学年、第2学年において学校設定科目「応用英語」1単位、「応用数学」(1単位)を選択科目として設定する。獣医師志望者や4年制大学志望者に対する学習を強化することを目的とし、長期休業を活用した集中授業として実施する。

## 第3章 評価と課題

### 第1節 定量的目標の評価

#### 1 定量的目標の評価方法

本事業で定めた定量的目標の評価のため、項目ア～カ、ケ、コについては、アンケート調査により生徒の意識の変容を調査することとした。項目キ、ク、サについては、卒業生の進路動向から結果をまとめることとした。

定量的目標のア～カ、ケ、コに関わるアンケート調査は全校生徒を対象に6月と12月に実施した。新ひだか町に対して「魅力・愛着」が持て、「課題」を理解し、地元での「将来」について考えることができたかを測定した。「進路」「資格取得」「ICT」「英語教育」などへの考えがどのように変化したかを測定した。アンケートはいずれも、「大いにあてはまる」を4、「あてはまる」を3、「あまりあてはまらない」を2、「まったくあてはまらない」を1として回答することとした。

アンケートの集計にあたっては、結果を明確に判断するため、肯定的な評価をした生徒の割合から生徒の意識の変容を図ることとした。

また、事業2年目における生徒の変容を理解するため2年間継続して本事業のプログラムを経験した令和3年度の入学生(現2年生)と令和2年度入学生(現3年生)については、令和3年度の第1回目の評価と今年度の2回目の評価を比較することとした。英語に関する項目は、定量的目標における評価項目が卒業生を対象に集計した項目であることと、英語教育に関する総合的な評価を行うため、コミュニケーション、海外の人との交流に加え、読む、書くなどの英語に関するアンケート項目を全て集計した結果を比較した。

#### 2 定量的目標の評価結果

##### (1) 令和4年度の評価結果

項目	目標値	肯定的評価をした生徒の割合		
		6月	12月	増減
ア 地域に魅力を感じ、愛着を持った生徒の割合	在籍者の80%以上	64.9%	72.1%	7.2pt
イ 地域の課題を発見し、解決に向けて多面的・論理的に考え、行動できた生徒の割合	在籍者の80%以上	59.2%	67.5%	8.3pt
ウ 将来、地域のために貢献したいと考え、行動できた生徒の割合	在籍者の80%以上	40.8%	53.7%	12.9pt
エ 様々な産業人との交流を通し、自身の進路について考えることができた生徒の割合	在籍者の80%以上	62.3%	76.2%	13.4pt
オ 自身が目指す進路に関連した資格取得を積極的に行えた生徒の割合	在籍者の80%以上	80.4%	82.5%	2.1pt
カ ITやICT, IOTの役割を理解し、活用することができる生徒の割合	在籍者の80%以上	79.3%	82.8%	3.5pt
キ 卒業後、即就農及び地域の主要産業への就職者の割合	卒業生の50%以上	55.3% (事業前3年間)	54.1%	-1.2pt
ク 卒業後、就農及び地域の技術者を目的とした進学者の割合	卒業生の40%以上	18.4% (過去3年間平均)	31.3% (R3卒業生)	13.1pt
ケ 英語で日常的なコミュニケーションが関わるようになった人の割合	卒業生の30%以上	42.0%	50.4%	8.4pt
コ 在学中に海外の人と交流した人数	卒業生の50%以上	72.5%	87.6%	15.1pt
サ 将来的な新規参入を目指して進学または雇用就農した人数	3人以上 (3年間累計)		2	2

表1 令和4年度の定量的目標の評価結果

今年度の定量的目標の評価結果は、表1のとおりである。11項目中、5番の「自身が目指す進路に関連した資格取得を積極的に行えた生徒の割合」、6番「ITやICT, IOTの役割を理解し、活用できる生徒の割合」、7番の卒業後、即就農および地域の主要産業への就職者の割合」9番「英語で日常的なコミュニケーションができるようになった人の割合」、10番在学中に海外の人と交流した人数の5つの項目で目標とした値を達成した。

ITやICTについては、NTTドコモ様による全体講演や園芸コースでも学習のテーマとして取

り上げていることに加えて、コンピューターや情報端末に触れる機会も多く、生徒の関心が高いと考えられた。

卒業後、即就農および地域の主要産業への就職者の割合については、食品科学科については、JAしずない、JAにかっふ、日高軽種馬農協をはじめとした就職先に就職の内定をいただいた。生産科学科においては、ノーザンファーム、小国ステーブル、ホロシリ乗馬クラブなどへの就職の内定をいただいている。

英語を用いたコミュニケーションや在学中に海外の人と交流した人数については、特に英語科の取組によるところの大きい評価項目である。ビデオメッセージソフトを活用した海外の学校との交流、北海道から派遣されるALTのみならず、新ひだか町のALTを招き、積極的にネイティブな英語に触れる機会を多く設けていること、フランスからの留学生を本校に招いたことも寄与していると考えられる。

11番、「将来的な新規参入を目指して進学もしくは雇用就農した人数」については、3年間の目標を3名としているが、本年度は2名の生徒が将来的な新規参入を目指した進学もしくは就職をしている。1名の生徒は当初、馬事コースに所属して学習したが、園芸の学習の面白さからコースを変更し、将来の就農を目指して北海道立農業大学の畑作園芸コースへの進学を予定している。もう1名は酪農における新規就農を目指しており、町内の酪農場でのデュアル派遣実習とともに長期休業中は十勝管内鹿追町にて削蹄業を営む事業者のもとで実習を行っている。当面は削蹄師を目指しているが、将来においては新ひだかで酪農を営むことを目標としている。本事業において、大学科農業における人材育成に合わせた成果と考えられる。今後はこうした希望を持っている生徒に対して、実際に新規就農したり、雇用就農するなどした際の道しるべを明確に示していく必要もある。

様々な産業人との交流を通し、自身の進路について考えることができた生徒の割合」が76.2%、資格取得についても82.8%と多くの生徒が肯定的に評価していることから、本事業をとおして、生徒が自分自身の進路とのつながりについて肯定的に捉えているといえる。

しかし、この中で、「将来、地域のために貢献したいと考え行動できた生徒の割合」は、53.7%と目標の80%に対して26.3ポイント下回る結果となった。今年度は特に生徒の課題解決能力を高めるため、専門的な知識や技術を持つ職業人材の皆様へに指導していただき、地域課題への取組については、確実に力をつけていると考えている。一方で、地域に愛着を感じたり課題の解決に取り組んでも、実際に地域の方と活動したり、交流したりした経験が不十分であったことも要因として考えられる。このため、生徒が地域の方と共同で課題の解決に取り組むような活動機会を創出し、「地域の役に立った」、「地域の人から認められた」など、自己有用感を感じることできる経験を生徒に積ませるなど、自分と地域社会の関係を肯定的に受け止めることができるよう指導する必要があると考える。

## (2) 令和3年度と令和4年度の評価の比較

### ア 令和2年度入学生(現3年生)

項 目	目標値	肯定的評価をした生徒の割合		
		令和3年 6月	令和4年 12月	増減
ア 地域に魅力を感じ、愛着を持った生徒の割合	在籍者の80%以上	65.7%	75.5%	9.8pt
イ 地域の課題を発見し、解決に向けて多面的・論理的に考え、行動できた生徒の割合	在籍者の80%以上	61.3%	82.5%	21.2pt
ウ 将来、地域のために貢献したいと考え、行動できた生徒の割合	在籍者の80%以上	34.4%	65.4%	31.0pt
エ 様々な産業人との交流を通し、自身の進路について考えることができた生徒の割合	在籍者の80%以上	58.7%	91.5%	32.8pt
オ 自身が目指す進路に関連した資格取得を積極的に行えた生徒の割合	在籍者の80%以上	78.3%	86.7%	8.4pt
カ ITやICT、IoTの役割を理解し、活用することができる生徒の割合	在籍者の80%以上	71.9%	87.5%	15.6pt
キ 英語教育		50.3%	65.6%	15.3pt

表2 令和2年度入学生の定量的目標の評価結果

現在の3年生における本事業によるプログラム開始当初と2年間経過後の変容については表2の



とおりである。評価項目全般にわたって、肯定的な評価を行う生徒が増加しており、マイスター・ハイスクール事業をとおして着実な意識の変容が見られる。

特に、本事業をとおして「地域の課題を発見し、解決に向けて多面的・論理的に考え、行動できた生徒の割合」、「将来、地域のために貢献したいと考え、行動できた生徒の割合」「様々な産業人との交流を通し、自身の進路について考えることができた生徒の割合」に関する意識の変容が大きく、イノベーターとしてのマイスター・ハイスクール育成を目指した本事業の目的がよく達成されているのではないかと考えられる。

「地域に魅力を感じ、愛着を持った生徒の割合」については、9.8ポイントの増加にとどまった。事業開始当初よりは肯定的評価をした生徒の割合は増加しているものの、大きく評価を伸ばしたイ、ウ、エの各項目と比較すると、生徒に対する働きかけが強くなかったのではないかと考えられる。

#### イ 令和3年度入学生(現2年生)

項目	目標値	肯定的評価をした生徒の割合		
		令和3年 6月	令和4年 12月	増減
ア 地域に魅力を感じ、愛着を持った生徒の割合	在籍者の80%以上	71.1%	76.0%	4.9pt
イ 地域の課題を発見し、解決に向けて多面的・論理的に考え、行動できた生徒の割合	在籍者の80%以上	37.8%	75.4%	37.6pt
ウ 将来、地域のために貢献したいと考え、行動できた生徒の割合	在籍者の80%以上	23.4%	43.8%	20.4pt
エ 様々な産業人との交流を通し、自身の進路について考えることができた生徒の割合	在籍者の80%以上	21.9%	83.0%	61.1pt
オ 自身が目指す進路に関連した資格取得を積極的に行えた生徒の割合	在籍者の80%以上	72.6%	83.3%	10.7pt
カ ITやICT, IOTの役割を理解し、活用することができる生徒の割合	在籍者の80%以上	69.4%	90.0%	20.6pt
キ 英語教育		44.7%	47.5%	2.8pt

表3 令和3年度入学生の定量的目標の評価結果

現在の2年生における本事業によるプログラム開始当初と2年間経過後の変容については表3のとおりである。評価項目全般にわたって、肯定的な評価を行う生徒が増加しており、マイスター・ハイスクール事業を通して着実な意識の変容が見られる。評価項目の中では「様々な産業人との交流を通し、自身の進路について考えることができた生徒の割合」が61.1ポイント増加し、「地域の課題を発見し、解決に向けて多面的・論理的に考え、行動できた生徒の割合」に関する項目も37.6ポイント増加した。本学年は今年から学科やコースの特性に応じて、専門的職業人材による講義や実技指導を受けるとともに、プロジェクト学習においても地域の課題解決に取り組むというテーマのもと専門的な知識、技能を有する職業人材の皆様へ課題解決の支援をいただいております。彼らが生徒により変容を与えたものと考えられる。本学年については、唯一、3年間このマイスター・ハイスクール事業に取り組む学年であるため、今後の変容について注視していきたい。

## 第2節 定性的目標の評価

### 1 定性的目標の評価方法

定性的目標はすべてアンケート調査により、生徒の意識変容を調査することとした。定性的目標に関わるアンケート調査は全校生徒を対象に6月と12月に実施した。各項目とも5つの設問に対して「大いではまる」を4、「あてはまる」を3、「あまりあてはまらない」を2、「まったくあてはまらない」を1として回答することとした。アンケートの集計にあたっては、結果を明確に判断するため、肯定的な評価をした生徒の割合を測定することで生徒の意識の変容を図ることとした。

また、事業2年目における生徒の変容を理解するため2年間継続して本事業のプログラムを経験した令和2年度の入学生(現3年生)と令和3年度入学生(現2年生)については、令和3年度の第1回目の評価と今年度の2回目の評価を比較することとした。

## 2 定量的目標の評価結果

### (1) 令和4年度の評価結果

項 目		肯定的評価をした生徒の割合		
		6月	12月	増減
自己認識	自分を客観視する力, 自分に対する自信ややり抜く力	72.2%	78.5%	6.3P
意欲	物事に対して意欲的に取り組める力	76.0%	81.9%	5.9P
忍耐力	根気強く物事にあたる力	64.3%	71.8%	7.5P
自制心	自分自身の感情や欲望などをうまくコントロールする力	69.5%	77.4%	7.9P
メタ認知 ストラテジー	自分が今置かれている状況や理解度を把握する力	74.0%	80.6%	6.6P
社会性	リーダーシップがとれ, 他者とのコミュニケーションがとれる力	62.6%	68.3%	5.7P
回復力と 対処能力	問題が起こった時にすぐに立ち直れる, またそれに対応できる力	66.6%	72.0%	5.4P
創造性	ものを作ったり, 工夫したりする力	61.7%	67.3%	5.6P

表4 定性的目標の評価結果

今年度の定量的目標の評価結果は、表4のとおりである。年度初めの評価と比較すると全ての項目において肯定的な評価をした生徒の割合が増加した。項目ごとの全体の伸び幅は、大きな差はないように見られる。この1年間を通してバランスよく変容したものと考えられる。項目別に見ると、意欲、メタ認知ストラテジーの項目の評価が高く、生徒はそれぞれ自分自身の状況をよく考えながら、意欲を持って学習に臨んでいる様子がうかがわれる。一方、社会性、創造性の項目は、他の項目と比較すると評価が低く、どちらかという受け身の生徒が多い、他者と話し合うことや話し合いをまとめること、アイデアを出したり、工夫することに苦手意識を持っている様子が察せられる。

### (2) 令和3年度と令和4年度の評価の比較

#### ア 令和2年度入学生(現3年生)

項 目		肯定的評価をした生徒の割合		
		令和3年6月	令和4年12月	増減
自己認識	自分を客観視する力, 自分に対する自信ややり抜く力	66.5%	80.0%	13.5P
意欲	物事に対して意欲的に取り組める力	65.0%	81.6%	16.6P
忍耐力	根気強く物事にあたる力	62.0%	77.4%	15.4P
自制心	自分自身の感情や欲望などをうまくコントロールする力	63.5%	82.6%	19.1P

メタ認知 ストラテジー	自分が今置かれている状況や理解度を把握する力	65.5%	83.2%	17.7P
社会性	リーダーシップがとれ、他者とのコミュニケーションがとれる力	62.5%	72.1%	9.6P
回復力と 対処能力	問題が起こった時にすぐに立ち直れる、またそれに対応できる力	62.0%	72.1%	10.1P
創造性	ものを作ったり、工夫したりする力	59.0%	68.4%	9.4P

表5 令和2年度入学生の定性的目標の評価結果

現在の3年生における本事業によるプログラム開始当初と2年間経過後の変容については表5のとおりである。評価項目全般にわたって、肯定的な評価を行う生徒が増加しており、マイスター・ハイスクール事業をとおして着実な意識の変容が見られる。全校生徒の傾向と同様に、本事業をとおして、専門的職業人材による様々な刺激を受け、意欲を持って取り組んだ様子が察せられる。一方で社会性、創造性については評価が低い、伸び幅が小さいなどの傾向が見られており、現在の3年生の苦手意識があるように感じられる。

イ 令和3年度入学生(現2年生)

項 目		肯定的評価をした生徒の割合		
		令和3年6月	令和4年12月	増減
自己認識	自分を客観視する力、自分に対する自信ややり抜く力	63.8%	78.8%	15.0P
意欲	物事に対して意欲的に取り組める力	64.3%	79.5%	15.2P
忍耐力	根気強く物事にあたる力	60.0%	66.7%	6.7P
自制心	自分自身の感情や欲望などをうまくコントロールする力	63.8%	73.3%	9.5P
メタ認知 ストラテジー	自分が今置かれている状況や理解度を把握する力	58.9%	78.5%	19.6P
社会性	リーダーシップがとれ、他者とのコミュニケーションがとれる力	52.4%	66.2%	13.8P
回復力と 対処能力	問題が起こった時にすぐに立ち直れる、またそれに対応できる力	61.1%	74.4%	13.3P
創造性	ものを作ったり、工夫したりする力	55.1%	69.2%	14.1P

表6 令和3年度入学生の定性的目標の評価結果

現在の2年生の入学時からの変容は表6のとおりである。評価項目全般にわたって、肯定的な評価を行う生徒が増加した。現在の3年生と比較して特徴的なのは、創造性に関する評価項目が、入学時と比較すると14.1ポイント上昇している点である。講義や実習においては、令和3年度の実施を踏まえ、特に実験や演習などを取り入れる、専門家の指導を受けながら生徒が考えて取り組む時間を確保するなど改善を図ってきた。これに加え、地域や産業界の課題解決に取り組んだプロジェクト学習では、鑑の製作などではICT技術を活用したり、商品開発ではコープさっぽろ様の協力により新商品コンペにて指導をいただくなどの生徒が創意工夫をしながら取り組む機会を多く持ったことも一因ではないかと考えられる。

### 第3節 生徒アンケート自由記述による評価

#### 1 生徒アンケート自由記述による評価方法

1年間のプログラムを経て、生徒の考えがどのように変化したかを知るため、自由記述によるアンケート調査を1月に実施した。質問項目は、今年度の感想として「マイスター・ハイスクール事業に関する講義や実習、視察などをとおして、学習できて良かった、知ることができて良かった、と思うものは何ですか？具体的に記入してください。」と、次年度に期待するものとして「マイスター・ハイスクール事業で、「こんなことを学習したかった、体験したかった」というようなものはなんですか？具体的に記入してください。」の2つを設定した。

アンケートはグーグルフォームを活用し、全校生徒に対して実施した。

アンケートのテキストデータはユーザーローカル テキストマイニングツール (<https://textmining.userlocal.jp/>) を使用して解析し、語句の傾向や関係性を分析することにより、生徒の考え方の変化について分析することとした。

分析は、専門的な教育活動を行った食品科学科、生産科学科馬事コース、生産科学科園芸コースの3つの集団について行った。生産科学科1年生は、園芸コースのプログラムと馬事コースのプログラムの両方を受講しているため、記載内容を園芸コースに関連するものと馬事コースに関連するものとに分類した。また、1年生についてはプログラムが2年生や3年生と比較すると少ないため、回数に関連する記載は除外することとした。

分析項目は、ワードクラウドとして2つのアンケートに出現する単語をスコア別に大きさを図示し、概要を把握することとした。単語分類・単語出現比率では2つのアンケートに出現する単語を品詞別に分類しその傾向を分析することとした。

#### 2 食品科学科の評価結果

##### (1) テキストマイニングによる分析結果

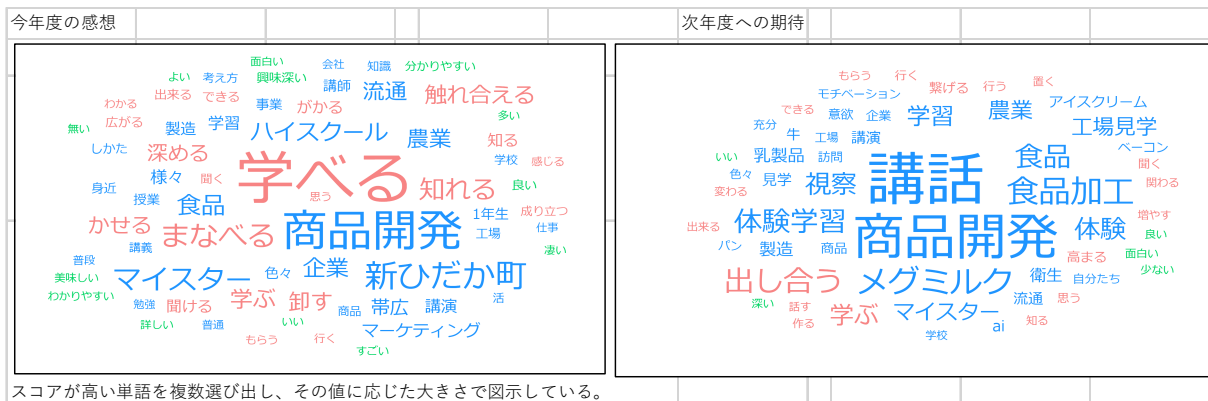


図1 ワードクラウドによる分析結果(左:今年度の感想, 右:次年度への期待)

感想にだけ出現	感想によく出る	両方によく出る	期待によく出る	期待にだけ出現
授業 学べる 知れる 様々 普通 勉強 普段 知識 聞ける よい 1年生 しかた チーズ ハイスクール マーケティング 上 事業 今後 仕方 全部 内容 参考 帯広 新ひだか町 方々 機会 歴史 活 生活 考え方	企業 知る 商品開発 できる 出来る 学校 色々 マイスター 仕事 会社 流通	良い 思う 食品 聞く 学習 学ぶ 商品 農業 製造 将来 もらう 作る 話す 関わる	面白い 行く いい 講話 行う 見学 視察	体験 少ない 深い 牛 出し合う 増やす 変わる 繋げる 置く 高まる

2つの文書に出現する単語を、どちらの文書に偏って出現しているかでグループ分けし、表にしている。グループ中の単語は出現頻度が多い順に並ぶ傾向がある。

表7 単語分類による分析結果

■単語出現比率(上位10語)			○動詞			○形容詞		
感想	単語	期待	感想	単語	期待	感想	単語	期待
0	体験	100	40	思う	60	50	良い	50
80	企業	20	81	知る	19	7	面白い	93
100	授業	0	100	学べる	0	0	少ない	100
54	食品	46	100	知れる	0	0	深い	100
65	商品開発	35	78	できる	22	13	いい	87
100	様々	0	13	行く	87	100	よい	0
44	学習	56	54	聞く	46	100	すごい	0
70	学校	30	75	出来る	25	100	詳しい	0
100	普通	0	47	学ぶ	53	100	わかりやすい	0
66	色々	34	100	聞ける	0	100	凄い	0

2つの文書に出現する単語を、それぞれどちらの文書に偏って出現しているかでグループ分けし、表にしている。グループ中の単語は出現頻度が多い順に並ぶ傾向がある。

図2 単語出現比率による分析結果

## (2) 評価

食品科学科の分析結果は図1，表7，図2の通りとなった。

食品科学科では、学校設定科目を配置して重点化した「商品開発」がほぼ中央に表示されており、教育課程を刷新して取り組んだ内容が、生徒に浸透したとともに、更に発展的な取組に期待をしている様子が見られる。

ワードクラウドでは、今年度の感想として「学べる」「知れる」といった語句が大きく表示されている特徴がある。食品科学科では様々な企業の方を招いて授業を行っているが、生徒が今まで知らなかったことを知ることができたことが印象的であったものと考えられる。また「新ひだか町」と言う言葉が大きく表示されており、新ひだか町や新ひだか町の事業者と連携した商品開発における一連の学習が象徴的に表示されている特徴がある。

次年度に期待する内容として「講話」が表示されているが、生徒のコメントを見ると、「もっと企業の方の講話を聞きたい」とした生徒と「講話を聞くだけではなく実際に経験を積みたい」という異なる意見があげられていることが要因と考えられる。また、「視察」「体験学習」「工場見学」などの言葉上げられている点を見ると、生徒が食品製造の現場に関心を持っていることや、学校外での学習活動に期待を寄せている様子が見られる。さらに、商品開発の過程に存在する「(意見を)出し合う」と言う活動や具体的な企業名が表示されている点に特徴がある。

単語分類・単語出現比率において、今年度の感想における頻出語をみると、「知識」「興味」「講義」等、名詞が多く出現している特徴がある。また、キーワードと生徒のコメントを照らし合わせてみると、「食品衛生の講義や食の販売ルートなど食品の基本的な知識をさらに深めることができるとも身になりました。」という内容からも、本事業の実施により、生徒が今までよりも食品業界や食品について深く学ぶことができたようである。

次年度への期待における頻出語をみると、「思う」「行く」「学ぶ」等、動詞が多く出現している特徴がある。また、キーワードと生徒のコメントを照らし合わせてみると、「実際に会社に行って学ぶ事を沢山したかったです。」「食品関係の工場とかで視察して色々学びたかったです。」という内容からも受動的な学びを経て、今後は能動的な学びを期待しているようである。

続いて生徒のコメントを抜粋してみたい。

## (3) 生徒のコメント

### ア 今年度の感想

- ・知らないことが沢山知れて色々なことが勉強になった、この学校に進学してこんな貴重な話が聞けてすごく良かったなと思いました。これから色々な人がこの学校にお話しに来たりするんだな



■単語出現比率(上位10語)

○名詞

感想	単語	期待
50	馬	50
100	日高育成牧場	0
100	普段	0
100	実習	0
0	牧場	100
43	競馬場	57
100	jbba	0
100	活用	0
33	調教	67
75	藤沢	25

○動詞

感想	単語	期待
100	出来る	0
42	行く	58
100	聞ける	0
33	学ぶ	67
33	知る	67
25	聞く	75
100	くれる	0
66	できる	34
33	思う	67
100	教える	0

○形容詞

感想	単語	期待
0	いい	100
100	よい	0
66	良い	34
54	詳しい	46
0	欲しい	100
100	凄い	0
100	出来やすい	0
100	嬉しい	0

2つの文書に出現する単語を、それぞれどちらの文書に偏って出現しているかでグループ分けし、表にしている。グループ中の単語は出現頻度が多い順に並ぶ傾向がある。

図4 単語出現比率による分析結果(上位10語)

(2) 評価

生産科学科馬事コースの分析結果は図3、表8、図4の通りとなった。生産科学科馬事コースでは、「日高育成牧場」と「門別競馬場」という競馬に関わる2カ所の名称があげられている特徴がある。「日高育成牧場」は、生徒が競走馬の育成に関する専門的な学習を行ったり、騎乗や馴致の実習を行っており、充実した学習ができています。門別競馬場はコロナウイルスの感染拡大防止の観点から中止となったが、競馬開催日に競馬の運営について学習する予定であり、競走馬の生産から販売までを一貫して学習する本校の生産科学科馬事コースにおける学習が確実に生徒に定着するとともに、学習のよりでは、津のが今年「どのよう」に学んだかというところから、今後「何を」学びたいかというように意識が変化している様子が見られる。また、海外に関心を持った生徒がいる点に特徴があった。ワードクラウドでは、今年度の感想と次年度への期待の両方に「JRA」や「JBBA」が大きく表示されている特徴がある。このことから、生徒の学習を支援していただいている両団体に対して充実した学習ができていたり、専門的な知識や技術を得る事への期待感が表れているといえる。今年度の感想と次年度への期待の双方に名詞が中心に表示されている特徴があり、学んだことあるいは学びたいことが明確化しているといえる。

単語分類・単語出現比率において、今年度の感想における頻出語をみると、「出来る」「聞ける」「教える」といった動詞の他に「普段」という状態を表す単語が出現している特徴がある。また、キーワードと生徒のコメントを照らし合わせてみると、「札幌競馬場の普段は行けない所に行けて勉強になった。」「様々な専門家の方がきて普段聞けない話や実習をしていただいて勉強になった。」という内容からも、専門的職業人材による授業が特別なものとして認識されている様子がうかがえる。

次年度への期待における頻出語をみると、「牧場」「門別競馬場」「トレセン」等、場所に関する名詞が多く出現している特徴がある。また、キーワードと生徒のコメントを照らし合わせてみると、「牧場に関する講義や、経営についての講義をもっと聞きたかったです。」「JRAのトレセンを見学してみたいです。」という内容からもさらに発展的な学習に期待しているようである。

続いて生徒のコメントを抜粋して見ていく。

(3) 生徒のコメント

ア 今年度の感想

- ・3Dを活用した馬の馬体検査を行って最新のことを活用すれば簡単に馬の馬体について異常などの発見が出来やすくなっているとわかった。(3年生)
- ・金子さんに教えて頂きながら体験した、はづめ廻しがとても印象的だった。いつも先輩方が馬の爪の手入れをしているのを見ていたので、自分も体験出来て嬉しかったし、少しコツを掴むことができた。有名な藤沢元調教師さんが来てくださって、3年生と一緒に質問攻めにしたこと。凄い調教師さんなのに、この目で見ることが出来るのが凄く夢のようだったし、改めて馬への接し方も考え方も、自分達の何歩も先を行っている人なんだと思った。そして、改めて自分も、馬に対してたくさん考えられる人になろうと思った。(2年生)
- ・ドコモなどの大手企業をはじめとして、さまざまな人が農業をこのまま廃れさせるわけにいかないと、ITを活用してスマート農業を普及させていること。また実物も見せてくれたこと。(2年生)

イ 次年度への期待

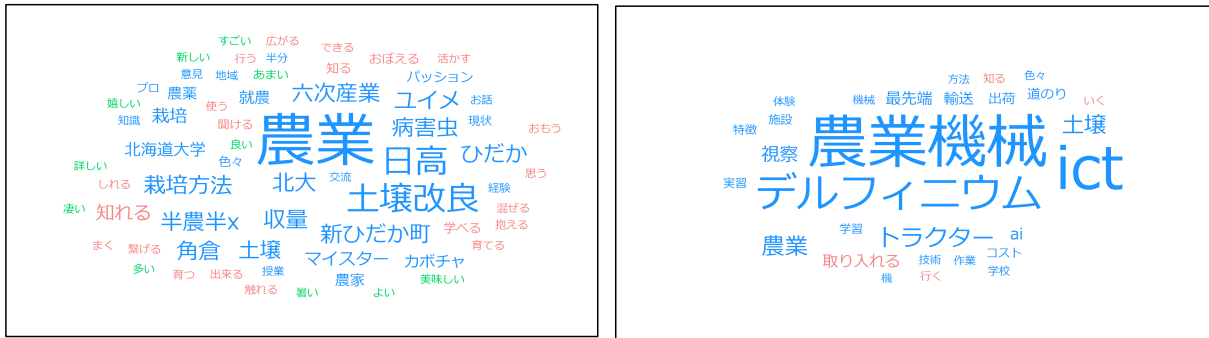
- ・競馬を開催している時のバックヤードに入ってみたかった。(3年生)
- ・門別競馬場に行ってレースを実際に見てみたかった。(2年生)
- ・動物への医療技術や看護について知りたいです(1年生)

#### 4 生産科学科園芸コースの評価結果

##### (1) テキストマイニングによる分析結果

今年度の感想

次年度への期待



スコアが高い単語を複数選び出し、その値に応じた大きさで図示している。

図5 ワードクラウドによる分析結果(左:今年度の感想, 右:次年度への期待)

感想にだけ出現	感想によく出る	両方に よく出る	期待によく出る	期待にだけ出現
良いよいできる知れる日高新しい出来る詳しいしれる聞けるカボチャ北大授業栽培現状知識農家あまいすごい凄い多い嬉しい暑い美味しい使う思う育てる行うお話パッション		農業知る色々	いく作業土壤学校技術方法	取り入れる行くaiictコストデルフィニウムトラクター体験出荷学習実習施設最先端機械特徴視察輸送農業機械道のり

2つの文書に出現する単語を、どちらの文書に偏って出現しているかでグループ分けし、表にしている。グループ中の単語は出現頻度が多い順に並ぶ傾向がある。

表9 単語分類による分析結果

■単語出現比率(上位10語)

○名詞

感想	単語	期待
50	農業	50
6	作業	94
100	日高	0
0	ai	100
0	ict	100
0	コスト	100
0	デルフィニウム	100
0	トラクター	100
0	体験	100
0	出荷	100

○動詞

感想	単語	期待
0	取り入れる	100
50	知る	50
0	行く	100
100	できる	0
7	いく	93
100	知れる	0
100	出来る	0
100	しれる	0
100	聞ける	0
100	使う	0

○形容詞

感想	単語	期待
100	良い	0
100	よい	0
100	新しい	0
100	詳しい	0
100	あまい	0
100	すごい	0
100	凄い	0
100	多い	0
100	嬉しい	0
100	暑い	0

2つの文書に出現する単語を、それぞれどちらの文書に偏って出現しているかでグループ分けし、表にしている。グループ中の単語は出現頻度が多い順に並ぶ傾向がある。

図6 単語出現比率による分析結果(上位10語)

##### (2) 評価

生産科学科園芸コースの分析結果は図5, 表9, 図6の通りとなった。生産科学科園芸コースでは、今年度の感想として「農業」を中心に様々な名詞が出現し、今後の期待として「農業機械」を中心に「ICT」や「最先端」といった名詞が出現し、生産方法やスマート農業に関する記述がある点に特徴がある。

ワードクラウドでは、今年度の感想では「日高」「ひだか」といった地名や「就農」「ユイメ」「半農半X」「パッション」などのキーワードが大きく表示されていることに特徴がある。今年度の事業では、栽培技術に関する学習に加え、新規就農までのロードマップを学習したりロールモデルの人生



設計を学習をしたりするなど、新規就農を目指した学習が印象的であったようである。次年度への期待として、「ICT」「デルフィニウム」「土壌」といった学習対象や「視察」など学習方法が大きく表示されている特徴がある。今年度の学びから、さらに具体的な学びに期待を寄せているようである。

単語分類・単語出現比率において、今年度の感想における頻出語をみると、「日高」「カボチャ」「北大」等の名詞とともに「良い」「新しい」「詳しい」等、形容詞が多く出現している特徴がある。また、キーワードと生徒のコメントを照らし合わせてみると、「農業や食品などについて今まで触れたことがなかったため、新しい発見が多くあり、視野が広がりました。」「地元出身だったが日高の農業の知らないことがしれた。」という内容からも、本事業の実施内容が生徒の気づきを促したり、専門的な学習を深めたようである。

次年度への期待における頻出語をみると、「AI」「ICT」「トラクター」等、名詞が多く出現している特徴がある。また、キーワードと生徒のコメントを照らし合わせてみると、「AIを取り入れた農業の機械などをどんな作業しているのかこの目で見たかった」という内容からも、生徒がよりスマート農業の学習を期待しているようである。

続いて生徒のコメントを抜粋してみていく。

### (3) 生徒のコメント

#### ア 今年度の感想

- ・バラ農家の最初からの経営の話が良かった。農家と色々なものを混ぜてやっててよかった(3年生)
- ・自分が知っている農業は常に畑で作業しているという感じだったのでそれ以外にデータを取っているって知って今の農業はこんな感じなのかって思いました。(2年生)
- ・北海道大学で行われた授業において、農薬も肥料も使わない、栽培方法でミニトマトが通常より2倍ほど収量が増加したことを知ることができました。(1年生)

#### イ 次年度への期待

- ・視察にもっとたくさん行きたかったです。(3年生)
- ・色々な土壌や施設の特徴を知ってみたい。(2年生)
- ・デルフィニウムの出荷方法や輸送コストなどをさらに詳しく学んでみたいです。(2年生)

## 第4節 インタビュー調査

### 1 インタビュー調査の目的

インタビュー調査は、定量的目標や定性的目標の評価では、測ることができない生徒個々の進路や高校生活に対する考え方を調査するために実施した。また、本事業が生徒の進路やキャリア形成に及ぼす影響について調査することとした。

### 2 インタビュー調査の方法

食品科学科、生産科学科園芸コース、生産科学科馬事コースの2学年、3学年の生徒を対象に実施した。実施時期は令和4年10月以降とし、全校生徒の8%に当たる12名の生徒から聞き取り調査を行った。12名の概要は次のとおりである。

対象者	学年	学科・コース	進路(2年生は希望, 3年生は内定先)
①Aさん(女子)	2	食品科学科	進学(4年制大学)
②Bさん(女子)	2	食品科学科	就職(食品流通業)
③Cさん(男子)	2	食品科学科	進学(調理専門学校)
④Dさん(男子)	2	生産科学科園芸コース	就職(職種未定)
⑤Eさん(男子)	2	生産科学科園芸コース	就農もしくは進学(4年制大学)
⑥Fさん(男子)	2	生産科学科馬事コース	大学(4年制)

⑦Gさん(女子)	2	生産科学科馬事コース	就職(乗馬クラブ)
⑧Hさん(女子)	3	食品科学科	就職(製菓専門学校)
⑨Iさん(男子)	3	食品科学科	就職(食品製造業)
⑩Jさん(女子)	3	生産科学科園芸コース	進学(農業大学校)
⑪Kさん(女子)	3	生産科学科馬事コース	就職(乗馬クラブ)
⑫Lさん(男子)	3	生産科学科馬事コース	就職(軽種馬生産牧場)

生徒への質問項目は次のとおりである。なお、2学年については次年度も同一の生徒から聞き取り調査を行う予定である。

(1) 3年生

- ① 高校卒業後の進路先
- ② 進路決定の理由, 時期, 経緯
- ③ 以前(高校入学当時)の自分と比較してどんな能力が伸びたと思うか。
- ④ 以前(高校入学当時)の自分と比較して進路に対する考え方はどのような変化があったか。
- ⑤ マイスター・ハイスクール事業が自分の進路決定にどのように影響したか。

(2) 2年生

- ① 高校卒業後の進路は決まっているか。
- ② 決まっていればその理由や時期はいつか。
- ③ 将来の夢や目標は何か。
- ④ 普段の学校生活ではどんなことに充実感を感じているか。
- ⑤ 高校生の時に伸ばしたいこと, しておきたいことは何か。
- ⑥ マイスター・ハイスクール事業は自分の進路選択にどのように影響しているか。

### 3 インタビュー調査の結果(3学年)

対象者	学年	学科コース	進路(内定先)	進路先を決めた経緯	進路を決めた時期	進路の決め手など
⑧Hさん(女子)	3	食品科学科	専門学校(調理)	生徒や先生同士の距離が近く, それぞれの生徒にあった就職先の話合いができることを重視。	1年生の夏頃	国家資格が取れること。実習数が多くて, 生徒同士がフレンドリーなところ。
⑨Iさん(男子)	3	食品科学科	就職(食品製造業)	とても悩んだが, 先生方からのアドバイスで決心した。	3年生の中頃	マイスターの授業
⑩Jさん(女子)	3	生産科学科園芸コース	進学(農業大学校)	2年の時の担任の先生と「馬の方の進路に行きたい気持ちあまりない」という相談をした時に, 「じゃあ野菜とかの方は?」と提案していただきました。	2年生の後期中間くらい	野菜の栽培についてもっと深く知り, 将来就農したいという気持ちがあったため。
⑪Kさん(女子)	3	生産科学科馬事コース	就職(乗馬クラブ)	デュアル派遣実習や乗馬クラブでの研修を通して実際の雰囲気や仕事の流れなどを見て決めた。	3年生の夏	乗馬技術を向上させられる環境だったから。お客様と直接かかわれるから。

⑫ Lさん (男子)	3	生産科学科 馬事コース	就職 (軽種馬生産 牧場)	特に悩んでないけど、親にはいろんな牧場を見てから決めれば？って言われたけどデュアル派遣実習で行ってすぐ決めた。	3年生のデュアルの時	インターンシップで行っていい所だったのでデュアル派遣実習でも行ってみて決めた。
---------------	---	----------------	---------------------	---	------------	---

表10 インタビュー調査の結果（3学年）

3学年に対するインタビュー調査の概要は、表10のとおりである。次にインタビュー調査によって得られた回答をまとめる。回答をまとめるにあたり、次のテーマ、項目を設定した。

テーマ	項目
能力や考え方に関する こと	(1) 以前(高校入学当時)の自分と比較してどんな能力が伸びたと思うか。
	(2) 以前(高校入学当時)の自分と比較して進路に対する考え方はどのような変化があったか。
マイスター・ハイ スクール事業との関 わり	(3) マイスター・ハイスクール事業が自分の進路決定にどのように影響したか。
	(4) マイスター・ハイスクール事業で、あなたの進路選択に対して影響の大きかった授業や会社や団体名、講師のお名前を教えてください。

<能力や考え方に関すること>

(1) 以前(高校入学当時)の自分と比較してどんな能力が伸びたと思うか。

- 何事もチャレンジ精神を持てるようになった。メンタルも鍛えられた。馬に関わる知識や技術。挨拶などの礼儀。学びに行く姿勢が向上しました。(Kさん)
- 積極的に行動する力です。(Iさん)
- 人前で発表することや、堂々とした姿でいられることができなかったけど、農業クラブの事業や、色んな企業と関わる事が多く、3年間(特に研究班が始まった2年生から)は自分の意見や研究してきたことを堂々と人前で発表できるようになりました!(Hさん)
- 物事に挑戦する姿勢・フットワークが軽くなったように思います。(Jさん)
- 馬の知識、技術(Lさん)

(2) 以前(高校入学当時)の自分と比較して進路に対する考え方はどのような変化があったか。

- 馬関係という曖昧な目標しかなかったが高校で現場を実際にみて決めることが出来た。馬の世界の現実を見る事で自分に向いている職種を選べるようになった。(Kさん)
- 入学した時はとりあえずお給料とか思ってたけど、今は自分がしたいことかやりがいがあるかの観点で見ることが出来た。(Iさん)
- 進路自体は製菓の道に進むつもりだったので変わってはいませんが、農業について学んだことでより深く自分の目指す製菓業界について考えることが出来ました。(Hさん)
- ぼんやりしていた進路が、こうしてこうしてこうしたい!という目標ができたように思います。(Jさん)
- 積極的になったと思う。(Lさん)

<マイスター・ハイスクール事業との関わり>

(3) マイスター・ハイスクール事業が自分の進路決定にどのように影響したか。

- 気づきや興味をもち新しい分野について知ることが出来たし、自分に向いている進路を決められた。(Kさん)
- 自分の進路を決める大きなものだった。様々な企業の方のお話を聞くことが出来て視野が広がった。(Iさん)
- 商品開発や、石屋製菓への視察研修は特に影響しました。石屋製菓では普通の学校では見ることが出来ない裏側や、講和など農業高校で、マイスター・ハイスクールの指定校に選ばれたからこそ

経験できたことが進路に直結してると思います。(Hさん)

- 「こういう進路もアリなのか」と視野が広がりました。(Aさん)
  - ひとくちに馬の仕事といっても沢山の職業があることが知れた(Lさん)
- (4) マイスター・ハイスクール事業で、あなたの進路選択に対して影響の大きかった授業や会社や団体名、講師のお名前を教えてください。
- 中西先生から授業や部活動でたくさん教えてもらったことと、JRA日高育成牧場でたくさんの実習ができたこと。(Kさん)
  - 雪印メグミルク様の商品開発の授業です。フレーバーの比較実験をしたときに、こんなに変わるんだ、とびっくりしたことを思い出します。あと、雪印メグミルクから道経連にきている方からは、学校にきたときに相談に乗ってもらいました。(Iさん)
  - 夏休みに行われたデュアル派遣実習で石屋製菓北広島工場の視察研修です。石屋製菓北広島工場の代表取締役である石水 創様に講話をしていただき、普段知ることが出来ない裏側の話や、多種多様な質問にも答えていただけてとても有意義な時間を過ごせました。また、製菓関係ということもあり、白い恋人を初めとする北海道の銘菓を作る石屋製菓と関わりを持てたことは学生生活において、また、今後の将来において学びのある時間になりました。進路についてもひとつの『選択』として候補が増えたことも大きな影響だったと思います。(Hさん)
  - YUIME株式会社様。自分でも農業ができそうと思えるようになりました。たくさんの方のお話を聞かせてもらってイメージがしっかりとできました。(Jさん)
  - 特にないです(Lさん)

<まとめ>

進路選択に当たっては、「マイスターの授業」、「インターンシップで行っていい所だったのでデュアル派遣実習でも行ってみて決めた」というコメントに代表されるように、専門的な知識や技能を有する専門的職業人材との関わりやインターンシップ、デュアル派遣実習などが職業理解を深めている様子が見えてくる。多くの高校生にとって初めての就業体験となる2学年時のインターンシップや学校での学習と企業や牧場等での実習を並行し、実践的な知識や経験を養う3学年時のデュアル派遣実習は、能力の面においては、「何事もチャレンジ精神を持てるようになった」、「自分の意見や研究してきたことを堂々と人前で発表できるようになりました」というコメントに代表されるように、積極性や学びに向かう姿勢の変化などがあげられていた。プロジェクト学習や発表活動など農業クラブ活動をとおして自己の能力の高まりが実感できているようである。これらはいずれも学んだ知識を活用する学習活動であり、これらの活動を経験することで自分の成長を感じているようであった。こうした発表活動やプロジェクト学習の指導方法の改善と充実を図ることで、生徒の能力の一層の伸長を期待できるものと考察できた。

また、本事業との関わりについてまとめると、生徒は本事業をとおして進路選択や考え方の変化を実感しており、生徒に好ましい変容をもたらしていた。また、専門的な知識や技能を有する職業人材の方から授業や実習を指導していただくことが、大きな影響を与えている。しかしこれは、独立して影響を与えているものではなく、「普通の学校では見ることができない裏側や、講話など」というコメントに代表されるように、学校の教員が教えることに上積みされて効果が発揮されていると捉えることができる。今後は、学校教員が教えるべき内容と専門的な知識や技能を有する職業人材が教えるべき内容を精査してプログラムを開発していくことが、生徒の学習効果やキャリア形成に関する考え方の好ましい変容をもたらす上で重要になると考察できた。

### 3 インタビュー調査の結果(2学年)

対象者	学科 コース	進路 (希望先)	高校卒業後の進路はどの ように考えていますか?	あなたの将来の夢や目 標は何ですか?	現在の進路先 を決定した時期
①Aさん (女子)	食品科学科	進学 (4年制大学)	高校卒業後は、酪農学園大学などの食を学べる学校に進学したいと思っていますが、必要な学力と入試方法もよくわかっていない状態でこの進学という選択でもいいのかって言う所で一番迷っています。	商品開発部門で働くこと、無理そうなら自分が出来るところで長く働けたらいいと思っています	2年生の6月頃

②Bさん (女子)	食品科学科	就職 (食品流通業)	国分北海道に就職したいと思っています。就職後は自分の目標として上を目指したいと思っています。将来的には会社の企業をしたいです。	いずれは服関係の会社を起業することです	2年生の1月頃
③Cさん (男子)	食品科学科	進学 (調理専門学校)	野口観光プロフェッショナル学院の総合調理科。	ホテルの調理する人？とりあえず料理できてればいいかな	開校したのが平成30年4月だから中1か中2くらい
④Dさん (男子)	生産科学科 園芸コース	就職 (未定)	農業系か他の業種にするか悩んでいるけど少しだけ農業系をやりたいと思っている。	人の心に寄り添えるような人になる	
⑤Eさん (男子)	生産科学科 園芸コース	就農もしくは進学 (4年制大学)	大学進学かユイメで就職(新規就農プログラム)するかで悩んでいる。	農家	2年生の12月ごろ
⑥Fさん (男子)	生産科学科 馬事コース	大学 (4年制)	関東の馬術部のある大学に進学予定。学科、学問専攻で迷っている。大学生活のイメージがあまりないのが不安。	今、目標として立てているのは馬術の全国大会に出場することです。	1年生の1月ごろです
⑦Gさん (女子)	生産科学科 馬事コース	就職 (乗馬クラブ)	ライディングヒルズ静内に就職したい。	上級者に教えられる乗馬インストラクターになりたい！マイスターハイスクールの授業みたいに、自分も学校で講義をしたい！	2年生の夏頃

表11 インタビュー調査の結果（2学年）

2学年に対するインタビュー調査の概要は、表11のとおりである。次にインタビュー調査によって得られた回答をまとめる。回答をまとめるにあたり、次のテーマ、項目を設定した。

テーマ	項目
能力や考え方に関する こと	(1) 高校入学時の自分と比較するとどんな力が伸びたように思いますか？
	(2) 普段の学校生活ではどんなことに充実感を感じていますか？
	(3) 高校生の時の伸ばしたいこと、しておきたいことはなんですか？
マイスター・ハイスクール事業との関わり	(4) マイスター・ハイスクール事業で、あなたの進路選択に対して影響の大きかった授業や会社や団体名、講師のお名前を教えてください。

<能力や考え方に関すること>

(1) 高校入学時の自分と比較するとどんな力が伸びたように思いますか？

- チャレンジ精神と自分で決める力が伸びたと思います(Bさん)
- コミュニケーション能力、行動力、人前で話せるようになった。他にも伸びたところは多いと思う(Cさん)
- 自主的になった。積極的になった(Eさん)
- 発言力と行動力は中学に比べて身に付いたかなと思います。その分見えてきた悪いところもあるんですけどね。(Aさん)
- 人前で発表したり自分の意見をしっかり伝えられるようになったことです。(Fさん)

- 入学時は正直、乗馬の技術と馬の生態さえ知れば満足だと思っていましたが、幅広い授業を受けたことでもっと知りたい！だとか、こういう世界もあるんだと気づきがあったりしたので、物事を深く知りたいという好奇心が増したり、何かを変えるために無意識に自分から行動するようになった。例えば、マイスターの講義の後、自分から質問をしに行くなど。前までは聞きたいことがあっても聞けなかったり、聞きたいことが思いつかなかったが、今は聞かないと気が済まない！と思うし、専門家の方が目の前にいて、何も聞かないのはもったいない！何か他の人は聞いていない知識を1つでも引き出さなければもったいない！と思って、積極的に聞くようになりました。(Gさん)
  - 外部の人と会話するときの喋りかたや言葉遣いが良くなってきたと思っています。(Dさん)
- (2) 普段の学校生活ではどんなことに充実感を感じていますか？
- 何かに挑戦し、成果を残せた時や何かで1位をとったときとか自分でやると決めたことを最後までできた時(Bさん)
  - 普段学べないことを学べる場所。製造や食品化学とか(Cさん)
  - 卓球ができること農業ができること(Eさん)
  - できることを増やすことと、友達と勉強を教えあったりすることです(Aさん)
  - 授業や部活などで馬に触れる機会が増えてきて上手くいくばかりではない中で自分の中で考えて工夫したりすることに充実しているなと感じます。(Fさん)
  - 農業クラブ三大会があることと、部活動で充実感を得ています！農業クラブの大会は、全て頑張れば結果がつくし、誰だって上に行ける大会なので、挑戦したい！と燃えるし、自分にも輝ける場所があるんだ！と思っています。札幌の中学校にいた時は、生徒が多いのと全校生徒が挑戦できる大会などももちろん無いので、農高でしか出来なくて、誰にでもチャンスがある農高の大会は、私にとって「自分に自信をつける、自分の限界を知るチャンス」です！(Gさん)
  - 友達に会えることや自分の知らないことを常に学べる場所。(Dさん)
- (3) 高校生の時の伸ばしたいこと、しておきたいことはなんですか？
- コミュニケーション能力です。一番必要だと思います。(Bさん)
  - コミュニケーション能力もっとあげないといけないあとと思っています。(Cさん)
  - 農業の技術。コミュニケーション能力(Eさん)
  - 中学の時は、高校生活を無事に生き残ることと学校へ行くということが目標でした。今は次年度は最後の一年ってことで何事も本気で取り組んで行きたいと思っています。(Aさん)
  - 馬の技術、筋力、忍耐力、青春。(Fさん)
  - もっと色々な場所をこの目で見たいです。例えば馬だったら、授業ではよく「馬の育成、調教」などという言葉が出てきますが、調教をしている所を見たことがありません。また、仔馬の出産も、他の牧場の人達はどのような対策をしたり行動をしているのかを知っておきたいです。(自分たちのやり方以外にも方法があるというような、幅広い馬への接し方を知りたいです)。また、乗馬実習も、色々な所で体験して、様々な教わり方をしたいです！農高でしかできない、「馬と接する技術」を伸ばしたいです。(Gさん)
  - 何を足るにも人と関わるのでコミュニケーション能力を高めたくなあとと思っています。(Dさん)
- <マイスター・ハイスクール事業との関わり>
- (4) マイスター・ハイスクール事業で、あなたの進路選択に対して影響の大きかった授業や会社や団体名、講師のお名前を教えてください。
- 国分北海道様(Bさん)
  - 国分北海道、管理栄養士の人達をみて、いろんな仕事の種類や(Cさん)
  - ユイメやローズラボさん。(Eさん)
  - コープさっぽろ様、もうひとつあげてもいいならカゴメ様(Aさん)
  - 金子大作先生の蹄についての授業(Fさん)
  - 北里大学の松浦先生の、「ホースセラピーの効果について」の講義が印象的でした。乗馬をすることで背筋が良くなる、性格が明るくなる、リラックスするといったような効果が、科学的に立証されていることを知って驚きました。人のリラックスの度合いを数値化出来ることに驚きました。さらにこの内容は、研究班でも実験をしたので印象的でした。また、日高育成牧場で当歳を引かせて頂いた時、静農の当歳との違いや課題がハッキリ分かったし、静農の当歳では出来ない実習を行うことが出来てとても嬉しかったし、良い経験になりました。ブルーシートの上を通らせて、人をリーダーだと認識させるなどの方法を初めて知り、印象的でした。さらにそれを実際に体験できてとても楽しかったです。馬に対する考え方が、少し変わりました。馬と接する時は、いままで思っていたよりも単純に考える事が大切だと思いました！(Gさん)
  - プロジェクト学習や課題研究で試験場の先生に教えてもらったり、農家の方と話したりするのが

すごく印象に残っています。

<まとめ>

進路選択に当たっては、明確に目標を定めている生徒がいる一方で、「大学進学かユイメで就職(新規就農プログラム)するかで悩んでいる」というコメントに代表されるように、進路選択に迷っている生徒の様子うかがわれる。これをさらに分析すると、大学進学を選択するか、本年度より本事業で新規就農の学習でご協力いただいたYU I ME株式会社が運営している新規就農のための特別プログラムを活用するかというように、将来は農家になる目標のものと悩みや迷いであり、本事業による学習プログラムが農家ではなくても農家になれる「新規就農」を生徒に明確に意識させることにつながった好例といえる。一方で、大学進学を希望しながら、学科や専攻、入試の方法での迷いも見られている。このことは、生徒の情報収集の不足でもあるが、進路指導における教員の働きかけの不足と捉えることもできる。現在本校では、獣医師志望者や大学進学者を対象に、英語、数学における7時間目授業などを実施しているが、こうした授業の一部にガイダンス機能を盛り込む、あるいは強化するなど、全体指導だけでは補えない部分を個別に対応する必要があると考察される。

能力の面においては、「チャレンジ精神と自分で決める力」、「人前で発表したり自分の意見をしっかりと伝えられるようになった」というコメントに代表されるように、積極性やコミュニケーション能力の伸びを実感するコメントがあげられている。本事業の本年度は、特にプロジェクト学習の強化に重点を置いて取り組み、専門的な知識や技能を有する職業人材の力を借りながら、高い水準の学習活動の実践を目指した。このように専門的職業人材や地域の農業生産者や食品事業者、あるいは生徒間で協働で課題の解決に取り組んだり、農業クラブの発表活動や各種コンテストに取り組んだことが、コミュニケーション能力や積極性を高めることにつながったといえる。またこうした活動は、「人の役に立った」、「人から認められた」など、自己有用感の向上や学習意欲の向上につながるものといえる。専門的な知識や技能の習得のみならず、地域と協働で課題解決に取り組むよう指導方法の充実と改善を図ることで、生徒の能力の一層の伸長を期待できると考察できた。また、「上手くいくばかりではない中で自分の中で考えて工夫したりすることに充実しているな」と感じます。」というコメントからは、試行錯誤する中で思考を巡らせることに充実感を得ていることがうかがわれる。学習到達目標の設定を高く設定すること、その課題の解決に向けた考え方を間接的に指導することで、生徒の思考力や判断力等の能力の伸長につながるものと考察できた。

本事業との関わりについてまとめると、生徒は専門的職業人材との関わりから好ましい影響を受けていることがうかがわれるが、調査対象とした生徒に共通する事項はないように見える。これを学科別に見た際、食品科学科では商品開発に関わる講師陣、生産科学科園芸コースでは新規就農を学ぶ際のロールモデル、馬事コースでは実技を伴う授業をご指導いただいた講師陣と考えられ、本事業で重点を置いて取り組んだ内容が反映されていると捉えることができる。2学年は、次年度も調査を行うこととしており、今回の調査内容との変容について注視していくこととしている。

## 第5節 教職員のアンケート調査

### 1 マイスター・ハイスクールビジョンの進捗状況に関する調査

#### (1) マイスター・ハイスクールビジョンの進捗状況に関する調査の方法

本校における人材育成計画の概要として定めたマイスター・ハイスクールビジョンが、どの程度取り組まれているか、またどの程度の進捗状況にあるかを知るため、3カ年の事業の中間となる今年度の9月に、本校の教職員を対象にアンケート調査を行った。

アンケートの対象は、表12のとおりである。アンケートは本校で定めたマイスター・ハイスクールビジョンに対して、取組状況を「十分取り組まれている」を4、「取り組まれている」を3、「あまり取り組まれていない」を2、「取り組まれていない」を1として評価することとし、達成状況を「十分成果が上がっている」を4、「成果が上がっている」を3、「わずかに成果が上がっている」を2、「成果が上がっていない」を1として評価することとした。

アンケートの集計にはGoogleフォームを活用し、各評価段階の割合と評価の平均値を計算した。また、取組状況と達成状況の評価において評価者のコメントを記載し、参考とすることとした。

実施した教職員	教諭22名、実習担任教諭1名、指導実習助手1名、実習助手3名 事務主任・事務職員4名 合計31名
---------	---

表12 マイスター・ハイスクールビジョンアンケートの対象者

## (2) マイスター・ハイスクールビジョンの進捗状況に関する調査結果

## ア 取組状況

マイスター・ハイスクール ビジョン	評価者の割合 (%)				評価 平均
	十分取り組 まれている	取り組まれ ている	あまり取り組 まれていない	取り組まれ ていない	
高度熟練技能者による指導や企業等と連携した商品開発や軽種馬生産など、地域や産業界と連携した実践的・体験的な学習活動の推進及び学校設定科目の設定	46.4	53.6	0.0	0.0	3.5
プロジェクト学習を中核とした教科等横断的な地域課題探究型の学習活動の推進	25.0	53.6	17.9	3.6	3.0
デュアルシステムを活用した地域の企業等と連携したキャリア教育の充実	35.7	60.7	3.6	0.0	3.3
地域や小・中学校と連携した教育活動など、異年齢集団による活動の推進	10.7	60.7	25.0	3.6	2.8
オンライン授業や実験施設を利用した高度な実験・実習など大学等との連携・協働	32.1	53.6	14.3	0.0	3.2
農業経営のグローバル化等に対応するためのeコマースの活用や英語教育の充実	39.3	46.4	14.3	0.0	3.3

表13 マイスター・ハイスクールビジョンに関する取組状況の調査結果

## イ 達成状況

マイスター・ハイスクール ビジョン	評価者の割合 (%)				評価 平均
	十分成果があ がっている	成果があが っている	わずかに成果が あがっている	成果があが っていない	
高度熟練技能者による指導や企業等と連携した商品開発や軽種馬生産など、地域や産業界と連携した実践的・体験的な学習活動の推進及び学校設定科目の設定	14.8	74.1	11.1	0.0	3.0
プロジェクト学習を中核とした教科等横断的な地域課題探究型の学習活動の推進	18.5	40.7	37.0	3.7	2.7
デュアルシステムを活用した地域の企業等と連携したキャリア教育の充実	33.3	51.9	11.1	3.7	3.1
地域や小・中学校と連携した教育活動など、異年齢集団による活動の推進	3.7	48.1	37.0	11.1	2.4
オンライン授業や実験施設を利用した高度な実験・実習など大学等との連携・協働	22.2	59.3	18.5	0.0	3.0
農業経営のグローバル化等に対応するためのeコマースの活用や英語教育の充実	33.3	48.1	14.8	3.7	3.1

表14 マイスター・ハイスクールビジョンに関する達成状況の調査結果

マイスター・ハイスクールビジョンに関する取組状況の評価は表13、達成状況の評価は表14のとおりである。

結果を見ると、「高度熟練技能者による指導や企業等と連携した商品開発や軽種馬生産など、地域や産業界と連携した実践的・体験的な学習活動」、「デュアルシステムを活用した地域の企業等と連携したキャリア教育の充実」と「農業経営のグローバル化等に対応するためのeコマースの活用や英語



教育の充実」に関する評価が高くなっている。事業開始当初より外部から多数の講師を招いたプログラムを実施しているが、講師や生徒の動きが教職員から見えやすいこと、デュアル派遣実習については、生徒が実習を行った企業を受験するなど、目に見えた成果が上がっていることなどにより高い評価になったと考えられる。

英語教育の充実については、今年度はフランスからの留学生を受け入れ、生徒が積極的に交流を図っている様子を観察できていることが大きいと考えられる。

一方で、プロジェクト学習に関する項目、異年齢集団による活動の推進に関する項目については、取組状況、達成状況とも評価が低くなっている。プロジェクト学習は、生徒の学習単位が細分化されており、各班の取組が把握しづらいこと、異年齢集団と交流する取組の数が少なく、馬事部門が中心になっているなど、部門に偏りがあることが要因と考えられる。プロジェクト学習の推進や異年齢集団による活動は、専門的職業人材による授業などでインプットした知識を活用し、自らその後のプロセスを組み立てアウトプットに至る学習活動であり、学んだ知識を活用することは、本校の生徒が、将来のイノベーターとして成長できる重要な学習であるため、今後、学校全体で取り組めるよう改善を図る必要がある。

アンケートを通じて、本事業に係わる情報が共有されているかということも、評価に影響していると考えられた。そのため、職員間で適切に授業や生徒の様子について情報を共有していくことも重要と考えられる。

先生方の自由記述によるコメントでは、内容の充実や生徒が受けた刺激について、肯定的なコメントが多くあった。一方で授業の実施方法や内容の見直しなどに触れているコメントもあり、内容充実のためには、今後再検討を要するものもある。続いて先生方のコメントを抜粋してみたい。

#### ウ 取組状況に関するコメント

- (ア) 高度熟練技能者による指導や企業等と連携した商品開発や軽種馬生産など、地域や産業界と連携した実践的・体験的な学習活動の推進及び学校設定科目の設定
- ・昨年度よりカリキュラム改善が図られた事で、今年度の目標としては十分だと感じる
  - ・食品科学については、講義形式の一斉指導が多く、生徒たちもやや食傷気味である。外部講師による体験を伴う授業が増えると更に良くなると感じる。
- (イ) プロジェクト学習を中核とした教科等横断的な地域課題探究型の学習活動の推進
- ・横断的な学習の視点の観点から見ると、校内研修等を通して共通理解は図られているものの、推進状況には課題がある。
  - ・この件に関しては、数学科の教科担任として、不十分で申し訳ないということです。特に統計の面ではプロジェクト学習に統計を活用するような態度の育成をしていきたいという思いがあります。
  - ・プロジェクト学習については一生懸命取り組まれているが、他教科との連携については実現されているように思わない。
  - ・あまり積極的にされているとは言えないと思います。
- (ロ) デュアルシステムを活用した地域の企業等と連携したキャリア教育の充実
- ・管外への食関連産業へのデュアル派遣実習は、現場実習の受け入れ状況が厳しく、管内へのデュアル先開拓も視野に入れていく必要がある。
  - ・新規就農を目指す生徒のため、園芸分野でのデュアル先の開拓が必要だと思っています。
- (ハ) 地域や小・中学校と連携した教育活動など、異年齢集団による活動の推進
- ・食品科については、マイスターの授業時数が多く、普段の授業をした上でこの、異年齢集団との活動を推進していく上では、現在行っているマイスターの時数見直しも再検討する必要がある。
  - ・マイスターが開始されてから、新たに小中学校と何かをしたことがないと思う。
  - ・個々の取り組みはあると思いますが、学校全体で取り組まれているとは言えないのではないかと思います。
  - ・馬事部門で取り組まれているが、全体のものにはなっていない
- (ニ) オンライン授業や実験施設を利用した高度な実験・実習など大学等との連携・協働
- ・食品については、大学との連携は少ない分、企業との連携が充実している
  - ・指定事業終了後も充実した取り組みの継続につなげられるよう、オンラインによる外部講師の活用は重要だと思っています。
  - ・園芸では、新ひだか町の花き実験センターとの繋がりが無いため、役場農政課と連携して繋がりを作ります。
  - ・馬事、園芸、食品の順で外部に出ていく機会が少なく、全体としては不十分に思える
- (ホ) 農業経営のグローバル化等に対応するためのeコマースの活用や英語教育の充実
- ・eコマースについては課題を把握し、次年度にむけて改善プログラムが必要である。
  - ・農業経営のグローバル化に向けた英語教育とあるが、どのような取り組みがされているか知らない。
  - ・英語については、大変充実した取組がなされている。Eコマの学習は体系化されており、考

え方は他の授業も参考になる

## エ 達成状況に関するコメント

- (ア) 高度熟練技能者による指導や企業等と連携した商品開発や軽種馬生産など、地域や産業界と連携した実践的・体験的な学習活動の推進及び学校設定科目の設定
- ・マイスター・ハイスクールの事業を通して、指導頂いた企業先への就職希望者が見える形で出てきたことは大きな成果である。
  - ・何を持って成果とするかは分からない。
  - ・課題研究の商品開発、山村活性の商品開発など実施している。商品開発を複数実施するためにはあまりにも時間が足りないため工夫が今後必要。
- (イ) プロジェクト学習を中核とした教科等横断的な地域課題探究型の学習活動の推進
- ・生徒の記録簿を見ると、内容に変容が見られるが定性的な判断は難しいものがある。
  - ・講話を通して、意識向上は十分になされていると思います。研究班活動や実習で深まっているかは、実績発表大会の報告などで拝見して判断させていただきたいと思います。
  - ・今年度より本格的に実施しているため。
  - ・英語科と公民科、理科と食品科など少しずつ成果が出ているのではないかと思います。
- (ウ) デュアルシステムを活用した地域の企業等と連携したキャリア教育の充実
- ・デュアル派遣実習へ参加した生徒はその実習先への就職を確信するきっかけになる生徒が多くみられた。
  - ・夏季休業中にデュアル派遣実習を実施し、生徒は実際に企業感を身につけることができた。
- (エ) 地域や小・中学校と連携した教育活動など、異年齢集団による活動の推進
- ・取り組みが少ないことから、評価は難しいと判断する
  - ・積極的には行えていない。
  - ・取り組み自体わからないので、成果もわからない。
  - ・アンケート①と同じで、全校的な取り組みはあまり見られないです。
- (カ) オンライン授業や実験施設を利用した高度な実験・実習など大学等との連携・協働
- ・食品科では実際の現場で行われている商品開発方法を学び、その学びを活かして商品開発が推進されている。
  - ・私が関与した部分では、令和4年3月の東農大オホーツクキャンパスとの交流でした。
  - ・学んだ実験方法を生かす場面があった。
- (キ) 農業経営のグローバル化等に対応するためのeコマースの活用や英語教育の充実
- ・eコマースをキャリア形成の視点から、進路と横断的に取り組むことも1つの視点として、必要なのではないかと考える。
  - ・フランス交流は生徒も大変刺激を受けていた。

## 2 生徒の変容に関する調査

### (1) 生徒の変容に関する調査の方法

マイスター・ハイスクール事業の実施によって生徒がどのように変化してきたかを知るため、3カ年の事業の中間となる今年度の9月に、本校の教職員を対象にアンケート調査を行った。アンケートの対象は、「(1)マイスター・ハイスクールビジョンの進捗状況に関する調査」と同様とした。アンケートの集計にはGoogleフォームを活用し、食品科学科、生産科学科園芸コース、生産科学科馬事コース、英語教育に関する4つに分類した。

### (2) 生徒の変容に関する調査結果

マイスター・ハイスクール事業をとおした生徒の変容について、教職員から多数の事例が報告された。大きく分類すると、進路意識に関するもの、学びの深まりに関するもの、生徒の行動の好ましい変容に関するものに分類できる。さらに、事業との関わりについて分類すると、外部講師による授業によるもの、プロジェクト学習によるもの、デュアル派遣実習によるものに大別できる。これらの分類が本校におけるマイスター・ハイスクール事業を実施する上での重要なポイントとなると考えられた。続いて先生方が観察した生徒の変容の状況を抜粋してみている。

### (3) 生徒の変容に関するコメント

#### ア 食品科学科

##### 3年生 Aさん

昨年度のマイスター・ハイスクール事業（A社）から、進路を商品開発が学べる就職先を希望するようになった。今年度のデュアル派遣実習を通して、就職希望先としてA社を強く希望するようになった。

##### 3年生 Bさん

もともと、パン関連産業への就職を希望していた生徒である。マイスター・ハイスクール事業を通して、個人で開業するためには、一定期間修行が必要だと考えるようになった。今年度のデ

デュアル派遣実習を通して、B社への就職を強く希望するようになった。

2年生 Cさん

昨年度のマイスター・ハイスクール事業（C社）から、ラインの製造業に興味を持つようになった。今年度のデュアル派遣実習を通して、C社でのライン作業が自分の適性に合っているのではないかと考えるようになった。現在はC社パンへの就職を希望している。

2年生 Dさん

昨年度のマイスター・ハイスクール事業から、進路を商品開発が学べる就職先を希望している。高校卒業後は、すぐに商品開発につけないと理解したことから1度進学をして、商品開発に関する知識を高めたいと考えている。外部講師の授業の際、講義中に挙手をして質問することは出来ないが、休憩時間などに講師の方のところに伺って質問をするなど、学習意欲の高まりが他の生徒と比べて顕著に感じられるようになった。

2年生 Eさん

プロジェクト学習でD社と研究を進めるようになってから、主体的に物事に取り組むようになった。研究が始まった頃よりも商品開発に取り組む意欲が顕著に高まったように見える。

3年生 Fさん

2年生の頃は、やってみたいという気持ちと裏腹に一步踏み出せないくすぶり感があったが、商品開発の授業をきっかけに、アイデアだしの機会が多くなってくると、話し合いに積極的に参加するようになったりと、意欲的に取り組むようになった。大ほっかいどう祭りに参加するなど、他の生徒と比べても意欲的に取り組んでいる。

3年生 Gさん

もともと、製菓を希望して入学してきた生徒である。マイスター・ハイスクール事業を通して、将来の目標が明確になり、進路実現に向けて意欲的に取り組むようになった。デュアル派遣実習を希望し、製菓の学習に熱心に取り組んでいる。

2年生 Hさん

マイスター・ハイスクール事業で外部講師と関わることが多くなってから、素直さがまし、あいさつが格段に良くなった。プロジェクト活動におけるグループ活動が増えてからは、責任感が増し学校生活も意欲的に取り組むようになった。

2年生 Iさん

自分の疑問や意見など、積極的に発言、行動する事が苦手であったが、マイスター・ハイスクール事業を通し、大勢の前でも、発言する事ができるようになった。また、自分の関心を食品関連産業と結びつけた進路を考えられるようになった。

3年生 Jさん

もともと酪農に関心の強い生徒であったが、デュアル派遣実習での学習をとおして、酪農産業で自分が頑張る姿をより強くイメージできるようになった。

3年生 Kさん

E社でのデュアル派遣実習で、工場見学をさせていただいた影響から、工場での製パン作業も「機械のみで完了するわけではなく、人の手が加わる過程が多くあって商品完成にたどり着くことを理解できた。」と、生産現場の実態をより正しく理解できるようになった。

3年生 Lさん

昨年のF社のマイスター・ハイスクールの授業をとおして商品開発に興味を持つようになった。

3年生 Mさん, Tさん

昨年のG社の授業後から、野菜を活用したスイーツ開発に取り組むようになった。

3年生 Nさん, Oさん

今年の8月にH社, I社でのデュアル派遣実習で職業観を感じとってから、表情に自信が感じられるようになった。

3年生 Pさん

1年生の頃は、漠然とパン作りに携わる仕事をしたいと考えていた。マイスター・ハイスクール事業で学ぶ中で、自分のパンのお店を出したいという具体的なイメージを持てるようになった。全体講演ではあいさつをする機会の多い生徒であるが、講師とお話をしたり挨拶をしている姿を見ると様々な力が身につけてきていると感じられるようになった。

3年生 Qさん

変化が見られ始めたのは3年生に入ってからで、特にこれといってきっかけがあったわけではない。マイスターの授業を重ねるにつれ少しずつ変化していったように思う。元々はマイスターに前向きに取り組んでいるようには正直見えていなかった（授業で眠くなるだとか感想がほぼ書けないなど）が、回数を重ねるにつれマイスターの授業に前向きに取り組む姿勢が見られるようになっていった。また、進路においても最終的にJ組合に出願することになったきっかけも、マイスターの学年合同授業で馬についての内容があり、馬に関して興味を持ったのがきっかけになったと聞いた。

3年生 Rさん, Sさん

普通高校にいて勉強しているだけでは、将来どのようにになりたいのかというビジョンを思い描くことが難しかった生徒だと思われる。様々な講師との関わりが、将来どうになりたいのかを真剣に考えて、何をすべきなのかを行動に移せるようになったきっかけであったと感じている。

#### イ 生産科学科園芸コースに関するコメント

2年生 Tさん

マイスターの取り組みで、彼の目標であるスマート農業に関して学ぶことができ、有意義な時間を過ごしていると度々聞きます。

2年生 Uさん

マイスターハイスクール事業に関係しているのか分かりませんが、6月、7月あたりから、学習に対する意欲がこれまで以上に強くなったように感じられる。興味のあることを学ぶために、広い視野をもつことが大切なのだと感じたからなのだと推測している。

2年生 Vさん

1年生の時は、集団の中で自分の考えを表に出すことが得意ではないように見えた。ハウスで収穫作業を行っているときに「これはこの前、マイスターでやっていた尻腐れ病ですね」と聞いてきた。関心を持って学習に参加できるようになった。

2年生 Wさん

K社の講演を聴き、将来は、ICTを活用した農業経営をしていきたいと考えるようになった。

2年生 Xさん

本校のピーマンの尻腐れ研究を学ぶ中で、地域生産者に対する栽培方法に疑問を持つようになった。

3年生 Yさん

どちらかというとおとなしい生徒であるが、試験研究機関の病害虫についての講義を受けた際は、講師の雰囲気作りも上手であったため、質問や疑問を率直に発言し、充実した表情を見せられるようになった。

#### ウ 生産科学科馬事コース

馬事コースの生徒全体

学校には、教材である馬、専門教員の数に限りがあるため、1人あたりが馬に触れて学習する機会のごくわずかである。視察や実習に行くと生徒1人に対して、専属の馬と指導者をつけてもらっているため、生徒の技術向上や充実感を話す生徒が多くなった。

馬事コースの生徒全体

馬事教育に関わる生徒たちは、令和3年秋からマイスター・ハイスクール事業での学習が増え、考える幅が増えたと感じられるようになった。

馬事コースの生徒全体

生産科については、実習を伴う学びの中で実践的かつ専門的な技能や知識の享受ができています。その点については生徒も大変満足しているように見える。

#### エ 英語科

授業を受けている生徒全体

大学の出前授業で海外への興味を持ったり、大学そのものへ興味を持てるようになった。

授業を受けている生徒全体

留学生との交流で異文化への興味、外国語習得への関心の高まりが感じられるようになった。

授業を受けている生徒全体

留学生との交流で学校内の雰囲気が良い意味で変わったように感じられた。

2年生 Zさん

アメリカの高校生との動画交換交流において、交流開始当初は、自分を表現する事に慣れていない様子でメッセージ作成や動画撮影に時間がかかっていたが、最近は以前よりスムーズに取り組めるようになった。交流を通して、自身の気持ちを言葉等で表現する事が以前より得意になった。

### 3 教員自身のものの見方や考え方の変化に関する調査

#### (1) 教員自身のものの見方や考え方の変化に関する調査方法

マイスター・ハイスクール事業の実施が、教員自身のものの見方や考え方にもどのように影響しているかを知るため、3カ年の事業の中間となる今年度の9月に、本校の教職員を対象にアンケート調査を行った。アンケートの対象は、「(1)マイスター・ハイスクールビジョンの進捗状況に関する調査」と同様とした。アンケートの質問項目は、北海道教育委員会が定める「北海道が求める教員像（北海道における教員育成指標）」を引用し、教職を担うに当たり必要となる素養に関する事項を5つ、教育又は保育の専門性に関する事項6つ、連携及び協働に関する事項を5つの全16項目について、「大いに向上している」を4、「ある程度向上している」を3、「わずかに向上した」を2、「向上していな

い」を1として評価することとした。アンケートの集計にはGoogleフォームを活用し、各評価段階の割合と評価の平均値を計算した。また、取組状況と達成状況の評価において評価者のコメントを記載し、参考とすることとした。

(2) 教員自身のものの見方や考え方の変化に関する調査結果

【教職を担うに当たり必要となる素養に関する事項】		評価者の割合(%)				評価平均
		向上していない	わずかに向上した	ある程度向上した	大いに向上した	
1	使命感や責任感・倫理観	3.7	33.3	37.0	25.9	2.9
2	教育的愛情	3.7	33.3	40.7	22.2	2.8
3	総合的人間力	3.7	40.7	33.3	22.2	2.7
4	教職に対する強い情熱・人権意識	7.4	37.0	22.2	33.3	2.8
5	主体的に学び続ける姿勢	3.7	25.9	29.6	40.7	3.1
【教育又は保育の専門性に関する事項】		向上していない	わずかに向上した	ある程度向上した	大いに向上した	評価平均
6	子ども理解力	7.4	37.0	40.7	14.8	2.6
7	教科等や教職に関する専門的な知識・技能	7.4	25.9	29.6	37.0	3.0
実践的指導力	8 授業力	18.5	33.3	37.0	11.1	2.4
	9 生徒指導・進路指導力	7.4	51.9	22.2	18.5	2.5
	10 学級経営力	11.1	59.3	18.5	11.1	2.3
11	新たな教育課題への対応	11.1	29.6	44.4	14.8	2.6
【連携及び協働に関する事項】		向上していない	わずかに向上した	ある程度向上した	大いに向上した	評価平均
12	学校作りを担う一員としての自覚と協調性	3.7	44.4	29.6	22.2	2.7
13	組織的、協働的な課題対応・解決能力	11.1	29.6	33.3	25.9	2.7
14	地域等との連携・協働力	7.4	37.0	22.2	33.3	2.8
15	人材育成に貢献する力	11.1	44.4	33.3	11.1	2.4

表15 教員自身のものの見方や考え方の変化に関する調査結果

教員自身の物の見方や考え方の変化に関する調査結果は表15のとおりである。この調査結果を比較しますと、特に、5番「主体的に学び続ける姿勢」、8番「教科等や教職に関する専門的な知識・技能」の2項目については、評価平均が3.0を超える値となっている。北海道教育委員会は「主体的に学び続ける姿勢」について、「情報収集や各種研修をとおして、必要な資質能力を身に付けようとする姿勢」と示している。また、「教科等や教職に関する専門的な知識・技能」については、

「教職の意義や教員の役割，職務内容に関する知識を身につけ，職務に活かす力」「学校種(幼稚園を含む)・職種に関する専門的な知識・技能を身に付け教育活動に活かす力」と示している。いずれも本事業において本校と産業界が一体・同期化した取組をする中で，企業や各団体の取組に触れることで，高度で最先端の知識や実践事例に触れ，生徒の変容を間近で観察し，その必要を切実に感じるようになったものと考えられる。

先生方のコメントを見ると，情報収集や研修の大切さを感じたコメントが多く寄せられていた。「教科等や教職に関する専門的な知識・技能」については，生徒の学習指導を行う上で基本となるものであるが，企業や団体，地域との連携から先生方も生徒同様に多くのことを学んでいることがコメントからも読み取れる。本事業で専門的職業人材の指導を受ける機会が多くあること，本校における教職員の年齢構成を見ても，これから経験を積んでいく年代の先生が多く，非常に多くの刺激を生徒と同様に受けていることが感じられた。続いて先生方のコメントを抜粋してみたい。

### (3) 教員自身のものの見方や考え方の変化に関するコメント

#### ア 使命感や倫理観

- ・生徒達の変容を見ると，幅広い企業の視点を伝えることがいかに重要かが理解できるようになった。(30代)
- ・「地域を知ること，地域を支える企業を知ること，そして，地域や企業を支えていく一員を育成すること」という観点で教育を考えることが大切であることをより一層自覚するようになりました。(30代)
- ・獣医学部進学を目指し，入学をしてきた意識の高い生徒と向き合うことで，自ずと使命感は高まった。(40代)

#### イ 教育的愛情

- ・まだまだ未熟ですが，生徒個々のキャリア教育に関わる力(進路決定，進路実現)を向上させるために，特に担任団と連携した学年指導の必要性を強く考えるようになりました。(30代)
- ・農業高校を選択して入学したのであれば，農業を仕事にする魅力を伝えたい。また，就農を目指している生徒にも，学ばせるべき内容や，進路について日頃から考えるようになった。(30代)
- ・そもそも生徒数が少ないということもありますが，一人一人の些細な変化や，マイスター講演会終了後の感想などを聞いて，何が印象に残ったのかを知り，生徒の変化がこのようにして起こせるのだと学びになりました。(30代)

#### ウ 総合的人間力

- ・企業とどのように授業を推進していくか，それは普段の授業でも言えるPDCAが重要なのだと感じた。(30代)
- ・地域農業者や農業関係機関と結びつく場面が増えたおかげで，野菜栽培における専門的な知識や技術を習得できた。(30代)
- ・校内校外問わず，様々な人との関わりの中で，相手の考えや経験，良さを引き出し，自分のものにしようとするのができた。(30代)

#### エ 教職に対する強い情熱・人権意識

- ・馬関連の授業を参観すると，生徒たちの興味関心がとても高く，主体的に取り組む生徒がほとんどです。その様子を見て，私自信も生徒を引き付ける授業をしていかなければならないと感じています。(20代)
- ・さまざまな業種の方々の仕事にかける情熱に刺激されたため(30代)
- ・事業の中で，日本の教育の課題から，農水省の課題を絡めて考えるようになり，農業高校の果たすべき役割について改めて考えなおし，農業高校に入学した生徒は未来の人材として尊重して接するように考えるようになりました。(30代)
- ・生徒を導いていくことの大切さ，生徒の力を伸ばしながら，やりたいことを探すことの面白さを感じます。(20代)

#### オ 主体的に学び続ける姿勢

- ・企業と事業を行っていく上で，情報収集は必要不可欠であり，生徒に情報収集力を身に付けさせる立場として，どのように収集したら良いか改めて感じるのができた。(30代)
- ・積極的に情報収集や研修に参加することによって，自分自身の能力向上を目指したいと考えようになった。(20代)
- ・自分の授業で外部講師と関連した内容を取り扱うことで横断的な学びの機会を作ろうとした。(30代)
- ・業務が重なることがあり，最初から最後まで聞くことができないこともあった。出られる時間は積極的に参加し，自己研鑽のためにも出席するよう心がけた。(30代)

- ・ 教員として常に最先端のことを知っていなければならないと改めて思います。マイスターの講演会を聞かせていただくたびに、まだまだ自分は知らないことばかりだと知ることができます。(20代)
- カ 子ども理解力
- ・ 生徒理解の重要性を理解した上で、積極的に関わりを持ちたいと考えるようになった。(20代)
  - ・ 生徒1人ひとりの考えを尊重しながら、指導するように心掛けた。(30代)
  - ・ 事業の達成度を上げるため、生徒一人一人の特性をなるべく理解し、取り組み方の助言をするようになりました。(30代)
- キ 教科等や教職に関する専門的な知識・技能
- ・ 企業が今の時代に求める視点はどの企業も同じ内容がある。その内容を今後どのように授業に取り入れ改善していくか、考えるきっかけになった。(30代)
  - ・ 地域と広く結びつくことができ、野菜栽培に関する技術や支援を受けられるようになり、私自身の専門性が向上した。(30代)
  - ・ 自らの役割を理解し、基礎的、専門的な知識を身につけたいと考えるようになった。(20代)
  - ・ マイスター・ハイスクールの授業を通し、今の業界で必要とされている知識や技能を知れたため。(30代)
  - ・ 研究者の方からの資料や、生産者からの講義は、教科書やインターネットだけの情報ではなく、より地域性、専門性を高めた質の良い学びを提供して頂いている。今頂いた知識や技能は授業改善に繋げている。(30代)
  - ・ 専門が農業ではないため、聞く話のほとんどが新しい発見だった。自分の授業においても農業と関連づけて授業展開できれば、より教育効果が高いと感じる。(30代)
- ク 授業力
- ・ 毎回指導案の作成まではできていないが、意図的、計画的な授業を心がけている。(30代)
  - ・ 事業計画を行ううえで、学習指導要領を参考にする事が多くなった。ねらいや意図など、明確な基準のもと授業計画に取り組んでいる。(30代)
  - ・ 農業と関連づけて自分の授業も展開できれば、より教育効果を高めることができる。(30代)
- ケ 生徒指導・進路指導力
- ・ 実践的な指導や個性を尊重することで、少しでも進路や生徒指導の手助けができればと考えるようになった。(20代)
  - ・ 新規就農や、生産法人を含めた就農先についての情報が収集が薄い。より多くの情報を収集し、生徒へ提示していきたい。(30代)
  - ・ 生徒指導部と3学年に所属しているので、どちらも関わるうちに生徒へのアプローチの仕方を工夫するようになっていきました。(30代)
- コ 学級経営力(専攻班などの手集団指導力)
- ・ グループ展開するための方法には様々な方法があることを理解できた。(30代)
  - ・ 専攻班指導の重要性を理解し、集団としての指導や集団の形成の手助けができればと考えるようになった。(20代)
  - ・ コミュニケーションに困り感を持つ生徒に苦慮した。生徒の個性に応じたコミュニケーション能力の育成を推進する必要がある。(30代)
  - ・ 人数が多いと、全体を見切れないと特別支援教員時代は思っていたのですが、生徒同士の集団や関係を利用することが大切なのだと学びました。(20代)
- サ 新たな教育課題への対応
- ・ 企業の取り組む姿勢を見ると、教員も先進的な知見を集団として取り入れていく必要があると再認識した。(30代)
  - ・ ICTをより効果的に活用していくために、最新の情報を常に取り入れるようにしていく。(20代)
  - ・ これからの農業生産の課題を解決するためにICTを活用した農業が推進されているが、本校ではICT機器の活用が遅れていると感じ、導入を検討している。(30代)
- シ 学校作りを担う一員としての自覚と協調性
- ・ 学校全体で取り組むべきことなのに偏りがある。少ない人数だからこそもっと協力するべき。自分の範囲だけで終わる方が多い。(30代)
  - ・ 学科長として責任ある行動と考え方をしなければならないと強く感じている。そのための情報収集と情報の整理を心掛けているが、自らの考えの発信については自信がない。(30代)
  - ・ 学校で行われている教育活動の目的や意図をより意識するようになった。(30代)
- ス 組織的、協働的な課題対応・解決能力

- ・ 集団として協働的に活動することの重要性を理解したいと考えるようになった。(20代)
  - ・ 組織の人数が多くなり、連携の大切さと難しさの理解(30代)
  - ・ 円滑に教育活動が進むよう、状況に応じて役割を果たすことができた。(30代)
- セ 地域等との連携・協働力
- ・ 特に留学生受け入れを行い、学校内の閉じた環境で行われる教育よりも学校のある地域の方と協働して行う教育には非常に大きな効果があると体感しました。(40代)
  - ・ 地域との連携や協働の重要性を理解した上で、積極的に関わりを持ちたいと考えるようになった。(20代)
  - ・ 以前は生産者や普及センターなど地域の農業に関わる経験が乏しく、本事業を通して地域との連携や協働が教育にとって、大きな効果があることを学び、積極的に連携するようになった。(30代)
  - ・ 昨今、コロナ禍になりなかなか開かれた学校づくりに取り組むことができなかったが、マイスター・ハイスクール事業を通じて、コロナ禍でも十分に開かれた学校づくりができることを認識することができた。(30代)
  - ・ 外部との連携は初めてというわけではない。ただし、自分の担当科目の範囲外の、いわば異業種の方達との関わりが深まったのは大変勉強になっている。(50代)
- ソ 人材育成に貢献する力
- ・ 支え合う環境を整え、互いに能力向上を目指せる環境づくりをしたいと考えるようになった。(20代)
  - ・ 仕事の関係上、負荷がかかる時期やタイミングが違うため、職員の状況を見ながら支援するようにしているが、自らが支援されていることが多いと感じる。(30代)
  - ・ 誰かに任せっきりにするのではなく、お互いで協力し合い、教育活動を行っていく意識を高めることができた。(30代)

## 第6節 教育課程に関するアンケート調査

### 1 教育課程に関するアンケート調査方法

#### (1) 教育課程に関するアンケート調査の内容と方法

マイスター・ハイスクール事業の指定期間終了後においても、現在の取組を一定程度維持していく上でどのような方策が必要か、検討材料を得るため、令和3年9月にアンケート調査を行った。

アンケートは、マイスター・ハイスクールCEOと産業実務家教員を除く校内のマイスター・ハイスクール事業推進委員11名を対象に調査を行った。質問は、「プロジェクト学習の推進に関わる課題」、「デュアル派遣実習の実施に関わる課題」、「進路指導や進路指導部との連携に関する課題」、「関係機関との情報交換、交流の維持に関する課題」、「カリキュラム開発や教員の専門性向上に関わる課題」の5点とし、それぞれ現状を説明した上で、校内の事業推進委員が感じている課題や方策の記述を求めた。

アンケートの集計にはGoogleフォームを活用し、自由記述方式でコメントを求めた。

### 2 教育課程に関するアンケート調査結果

アンケートの結果は(1)から(5)に示すとおりである。

プロジェクト学習の推進に当たっては、専門的職業人材と連携を図るための予算や、設備機器などの充実について必要性が挙げられた。デュアル派遣実習では、実習先の確保や実習に関わる金銭的な負担、受け入れ側とのメリットの共有を図る必要性が挙げられている。進路指導や進路指導部との連携に関する課題では、学びを生かした進路実現を図るための進路学習計画や地域との連携の改善について必要性が挙げられた。関係機関との情報交換、交流の維持に関する課題では、指定事業終了後、どのような形であれば、現在の学習プログラムの維持について共通認識を持つ必要性が挙げられている。カリキュラム開発や教員の専門性向上に関わる課題では、今後も質の高い専門教育を維持していくために、研修参加の機会や企業との連携方法の模索について検討する必要性が挙げられている。

アンケートの結果を分析すると専門的知識や技能を有する企業や団体との連携について言及した意見が多くあげられた。これは本事業の目的を達成するために現在進めている専門的知識や技能を有する企業や団体との連携が有効であるだけでなく、アンケートの回答者が専門高校の人材育成として、こうした関わり合いが欠かせないと考えていると言える。

また、専門的な知識や技能を有する企業や団体との連携については、本事業実施のためだけではなく、専門高校における人材育成という観点から本事業の指定期間終了後も継続する必要があるとアンケート



の回答者が認識していることが読み取れる。

一方で、専門的な知識や技術を有する企業や団体との連携以外にも、校内の指導体制について言及した意見も合った。本校における1つの課題であると同時に、組織的な指導により生徒の教科指導の充実が図られるとともにキャリア形成にも良い影響を与えられると考えられる。

更に、実習時における移動や宿泊、実習の充実の為の予算確保について課題が挙げられている。これらは、昨年度の実施結果を踏まえ、専門的な知識や技術を有する職業人材のからの指導を受けるだけでなく、生徒が学んだ知識を学校の農場で活用する場面が必要であること、学校を離れ企業や団体を視察したり実際に実習を経験することが生徒の学習効果をより一層高める効果があるという認識によるものと考えられる。

5つのアンケート項目からは、共通して専門的職業人材を派遣する企業や団体と、人材育成の理念を共有したり、双方にとってメリットのある関係性構築の必要性が挙げられているといえる。今後、本事業の指定期間終了後を見据えた取組を協議していくこととなるが、こうした意見を十分に踏まえながら進める必要がある。

教育課程に関しては、学科の科目構成や、獣医師養成を含めた大学進学希望者に対する学力保障を目的としたことで、7時間目の設定や個別の添削指導、個人ごとに必要な科目の実力向上のため指導などに取り組んでいる。本事業を踏まえ、産業界と一体化した教育課程の編成について、継続的に検討する必要がある。

次に各質問ごとのコメントを見ていく。

#### (1) プロジェクト学習の推進に関わる課題

- ・無償で本校の教育活動に協力して頂くために、CSRを取り組む営利企業等との関係作りが必要である。
- ・食品科学科では、プロジェクト学習を推進するための備品や新たな商品を開発する上での予算、生産科学科では、馬部門における複数頭の生産や園芸部門におけるICT関連機器の導入が必要である。
- ・プロジェクト学習で創り出した農業生産物を、地域に還元する適切な環境づくりが必要である。
- ・地域外の連携する企業への訪問や高大接続を行う際の移動手段や予算を確保する必要がある。
- ・現在、関わりを持つ企業の中には、マイスター・ハイスクール事業の期間中のみの協力という認識になっている企業があり、事業終了後に継続していただくための協力依頼が必要である。

#### (2) デュアル派遣実習の実施に関わる課題

- ・幅広い分野の企業を開拓し、派遣実習先への就職率を向上させるためには、進路指導部と協力し取り組む必要がある。
- ・日高管外の実習を視野に入れるために、移動手段や予算を確保する必要がある。
- ・食品企業のデュアル派遣実習は、現在も続くコロナ禍の影響で実習の受入が厳しいことが現状にあることから、コロナ禍の中でも受入をして頂ける実習先を開拓していく必要がある。
- ・移動や宿泊に費用が発生する場合、保護者の負担を軽減しながらの取組を考える必要がある。
- ・現在、新ひだか町の受入して頂いている食品関係企業は求人を出していない企業が多く、実習先が進路に結びつかない実態がある。
- ・デュアル派遣実習の選択調査を行う前に、早期から生徒の進路に対する動機付けとデュアル派遣実習に参加する目的や意義等を理解させる指導と時間を確保する必要がある。
- ・現在は実習参加生徒を受け入れていただいているという認識の方が強く感じられるが、実習に参加する生徒にも、受け入れる牧場や企業にも双方メリットがあることを確認したり、共有しながら進めていく必要がある。

#### (3) 進路指導や進路指導部との連携に関する課題

- ・農政やJA、北海道農業公社のような農業関連団体職員を目指す生徒を増やすためのきっかけづくりを横断的に行っていく必要がある。
- ・意欲のある生徒を組織的に育成するために、企業や団体、自治体に奨学生制度等の協力をして頂く必要がある。
- ・専門学校・大学の説明会を精査し、農業に関連する進学先の知見を向上させる必要がある。
- ・生徒の農業に関する進路選択肢の幅を早期に広げるために、農業の人材支援事業YUIME等の新規就農をサポートする企業と関係づくりをする必要がある。
- ・定期的な生徒の進路希望調査と面談を実施して学科と共有し、生徒の適性を鑑みた進路先のアドバ

イスを掲示していく必要がある。

(4) 関係機関との情報交換，交流の維持に関する課題

- ・関係機関が来校して講義をすることが難しいと判断した場合，オンラインや授業内容に関するアドバイス，先進的な取組の情報提供等，企業にとって負担の少ない協力依頼をしていく必要がある。
- ・関係企業と交流を維持するために，企業が求める人材を育て送ることが必要である。
- ・現在，協力を引き受けていただいている団体には，必ず継続支援を交渉する必要がある。
- ・予算確保が難しいことを見据え，無償で本校の教育活動に協力して頂ける営利企業等との関係作りが必要である。
- ・事業終了後に向け，新ひだか町や振興局，JAなどの担い手育成に関わる関係団体と良好な関係を構築し，情報交換を定期的に行う必要がある。

(5) カリキュラム開発や教員の専門性向上に関わる課題

- ・関係企業と人材育成や教育に関するパートナーシップを締結する必要がある。
- ・関わるその時だけの連絡に留まらず，教員の困り感を日頃から伝えアドバイスを頂ける関係性を構築する必要がある。
- ・時代の変化に合わせた専門性を獲得するために，研修に行ける機会と時間を確保する必要がある。
- ・関係企業と事業を振り返り，その結果に基づき，カリキュラムを検討する必要がある。
- ・企業による継続的な職員研修を開催するために，時間を確保する必要がある。
- ・研修の場を設け，職員で共有して高め合える体制を構築する必要がある。  
(例えば講師から学んだ教員が別の教員へ伝達する場をつくったりなど)
- ・静内農業高校の活動を知ってもらうためにも，日常的な情報発信を継続する必要がある。

第7節 運営委員による評価

1 運営委員による評価の調査方法

運営委員による評価は，1月25日(水)に実施した第3回運営委員会開催後に行った。第3回運営委員会では今年度の生徒による事業報告とプロジェクト発表，定量的目標と定性的目標の評価結果の説明，次年度の実施計画における重点などの説明を実施した。この説明の後，事業の内容に関する質問を5項目，教育と指導に関する設問を5項目，全体評価に関する質問を5項目の全部で15の質問を設定した。質問に対して「大いにそう思う」を4，「そう思う」を3，「あまりそう思わない」を2，「まったく思わない」を1として回答していただくこととした。アンケートの集計にあたっては，それぞれの質問に対する評価者の割合と，評価平均を算出した。

2 運営委員による評価結果

	質問項目	評価者の割合				評価 平均
		大いにあ てはまる	あてはま る	あまりあて はまらない	あてはま らない	
事業 の 内 容	地域の理解や郷土愛の醸成に関する教育，地域と連携した事業を行ったことは，生徒の将来(進路)に有意義である。	88.9%	11.1%	0.0%	0.0%	3.89
	本事業は，校長をはじめ，マイスター・ハイスクールCEOを中心に組織的・計画的に運営されている。	77.8%	22.2%	0.0%	0.0%	3.78
	生徒の変容を促す効果的な授業や講演などの機会が適切に設定されている。	55.6%	44.4%	0.0%	0.0%	3.56
	本事業は地域産業の課題解決の一助を担っている。	44.4%	55.6%	0.0%	0.0%	3.44

	本事業で育成された人材（生徒）は地域産業の持続的発展をけん引するイノベーターとして期待が持てる。	33.3%	66.7%	0.0%	0.0%	3.33
教育と指導について	2年目の本事業は、事業計画に基づき適切かつ計画的に実践されている。	33.3%	55.6%	0.0%	11.1%	3.11
	本事業は各種検定試験対策（資格）に対する理解を深め、受験に挑戦する心身の醸成や受験につながっている。	22.2%	77.8%	0.0%	0.0%	3.22
	本事業で実施した授業や講演会などは、目指す人材育成に効果的である。	77.8%	22.2%	0.0%	0.0%	3.78
	本事業における自治体や産業界と一体・同期化した取組は、生徒の学習効果の充実につながっている。	100.0%	0.0%	0.0%	0.0%	4.00
	本事業における自治体や産業界と一体・同期化した取組は、教職員の意識改革につながっている。	66.7%	33.3%	0.0%	0.0%	3.67
全体評価	本事業を通じて、生徒の資質・能力が向上し、生徒の地域に対する意識の変容が見られた。	55.6%	44.4%	0.0%	0.0%	3.56
	本事業を通じて、地域住民及び保護者、関係機関などの地域課題への意識が変化した。	0.0%	100.0%	0.0%	0.0%	3.00
	本事業を通じて、教育課程の刷新の方向性が検討され、改善につながっている。	11.1%	77.8%	11.1%	0.0%	3.00
	本事業の運営委員会や事業推進委員会は効果的に機能した。	33.3%	66.7%	0.0%	0.0%	3.33
	本事業の内容や取組は、地域創生に寄与している。	44.4%	55.6%	0.0%	0.0%	3.44

表16 運営委員による評価結果

運営委員からの評価は、表16の通りとなった。

まず、事業内容に関する評価項目について、「地域の理解や郷土愛の醸成に関する教育、地域と連携した事業を行ったことは、生徒の将来（進路）に有意義である。」「本事業は、校長をはじめ、マイスター・ハイスクールCEOを中心に組織的・計画的に運営されている。」「生徒の変容を促す効果的な授業や講演などの機会が適切に設定されている。」「本事業は地域産業の課題解決の一助を担っている。」の4項目については、評価者の割合、評価平均から見て肯定的な評価といえる。「本事業で育成された人材（生徒）は地域産業の持続的発展をけん引するイノベーターとして期待が持てる。」の項目は事業内容に関する質問の中では、回答者の割合、評価平均から見てやや肯定的な評価といえる。本項目については、生徒の卒業時の姿のみならず卒業後の姿を見る必要もあり、高評価を得るためには時間を要する項目であると考えられる。

次に、教育と指導の項目について、「2年目の本事業は、事業計画に基づき適切かつ計画的に実践されている。」の項目については、評価者の割合、評価平均から見てやや肯定的な評価といえる。否定的な評価も11.1%となっており、運営委員会及び運営委員一人一人に対する丁寧な説明が必要であると考えられる。「本事業は各種検定試験対策（資格）に対する理解を深め、受験に挑戦する心身の醸成や受験につながっている。」の項目については、評価者の割合、評価平均から見てやや肯定的な評価といえる。資格取得と生徒の内面の変化等との相関を分析するとともに、運営委員に対しても説明の機会の確保が必要であると考えられる。「本事業で実施した授業や講演会などは、目指す人材育成に効果的である。」「本事業における自治体や産業界と一体・同期化した取組は、生徒の学習効果の充実につながっている。」「本事業における自治体や産業界と一体・同期化した取組は、教職員の意識改革につながっている。」の3項目については、評価者の割合、評価平均から見て肯定的な評価といえる。特に「本事業における自治体や産業界と一体・同期化した取組は、生徒の学習効果の充実につながっている。」の項目については、評価者の割合、評価平均ともに15項目中最も高かった。定量的目標と定性的目標の評

価結果として、この1年間における全校生徒の好ましい変容や、本事業を2年間継続して経験した現在の2年生と3年生が好ましく変容している状況を運営委員が確認できていることが主な要因と考えられる。

最後に全体評価について、「本事業を通じて、生徒の資質・能力が向上し、生徒の地域に対する意識の変容が見られた。」の項目については、評価の割合、評価平均から見て肯定的な評価といえる。「本事業を通じて、地域住民及び保護者、関係機関などの地域課題への意識が変化した。」、「本事業を通じて、教育課程の刷新の方向性が検討され、改善につながっている。」、「本事業の運営委員会や事業推進委員会は効果的に機能した。」、「本事業の内容や取組は、地域創生に寄与している。」の4項目については、評価者の割合、評価平均から見てやや肯定的な評価といえる。この中で「本事業を通じて、地域住民及び保護者、関係機関などの地域課題への意識が変化した。」、「本事業を通じて、教育課程の刷新の方向性が検討され、改善につながっている。」の2項目は評価者の割合や評価平均も3.00と全15項目中もっとも低かった。「本事業を通じて、地域住民及び保護者、関係機関などの地域課題への意識が変化した。」の項目については、学校ホームページやSNSでの情報発信、マスメディアによる本校の取り組みの紹介などで広報がなされてきたが、今後、地域住民や保護者などへのさらなる取組の周知が必要であり、それが理解と協力につながるよう努める必要がある。「本事業を通じて、教育課程の刷新の方向性が検討され、改善につながっている。」の項目については第1回運営委員会において、本年度の刷新内容を説明しているが、その後の進捗や結果の説明が十分ではなかったことから、次年度においては運営委員会やその他の機会での丁寧な説明が必要である。情報の発信に関して、インターネットの活用やテレビ、新聞などのマスメディアによる報道などは即時性かつ広範に周知することが可能で極めてインパクトがあるが、本校の取組を体系的、継続的な発信による地域住民や保護者等への理解の浸透も重要である。今年度は試行的に生活協同組合コープさっぽろで実施した販売実習において、スペースをお借りして本校のプロジェクト活動の内容をポスターにして展示し、生徒によって来場した地域住民の方の説明する機会を持った。このことは、本校の取組に対する理解を浸透させる上で重要な取組であったと考えられる。今後は、基礎自治体やJA、JBB Aなどへの広報媒体の協力を得ての継続的な情報発信やプロジェクト研究やデュアル派遣実習などの成果を町内外にて積極的にPRする機会を確保することが必要である。

続いて運営委員によるコメントを見ていく。

### 3 運営委員によるコメント

- ・運営委員として参加し子供たちの活動を深く知ることができた事はとても有意義な時間でした。農高の活動が高く評価されてきたのはマイスター・ハイスクール事業のおかげだと思います。地域の活性化や地元への就職率アップのためにも部活やクラブのような形で、色々な職業の地域の方と高校生がもっと定期的に関われる機会があればおもしろいのではないかと思います。これからの農高がとても楽しみです。
- ・マイスター・ハイスクールを通じて、生徒と共に、教職員の意識がかなり高くなっていると感じています。一方で、教職員の負担もかなり大きいかと心配もしています。指定期間終了後の自走、地域産業の発展に向けて、食や観光など、高校と地域が連携した取り組みを展開していくことに期待しています。
- ・プロジェクト学習の地域課題解決の取り組みは興味深く、素晴らしい内容だった。この様なマイスターハイスクール事業の取り組みをもっと地域社会に周知することも必要だと感じた。そのことによって今後より地域に根ざした高校になるのではないのでしょうか。
- ・本年でマイスター・ハイスクール事業としての取り組みは終了いたしますが、来年以降も「静内農業高校」「国分北海道」双方にメリットのある形で様々な取り組みを継続させて頂きたいと考えております。その際に、関係各部署にお力添えを頂けたら幸いに思います。引き続きよろしくご願ひ申し上げます。
- ・この2年間は、コロナ過の中ほぼ計画通りに、カリキュラムを進めてきたのではないのでしょうか？その成果は生徒さんの実績で良くわかります、心から感謝と敬意を表するものです、最終年度までよろしくご願ひします。
- ・ただ授業を受けるだけでなく、地域の皆さまと連携した実践的な授業のため、生徒の皆さんが体感している経験は、社会で大いに通用する内容だと思います。また、結果だけでなく、取り組みの過程がすべて学びの機会にもなっており、卒業後も自信を待ってさまざまな活動に取り組めると実感しています。
- ・次年度の事業計画策定にあたって、生徒への負担についても考慮をお願いします。

## 第8節 北海道静内農業高等学校におけるマイスター・ハイスクール事業の今後の課題と展望

### 1 一年の経過概要

マイスター・ハイスクールの2年目となる本年は、当初計画においてテーマとした「挑戦」につながる取組を進めるとともに、3カ年の期間終了を見据えた「自走」につながるよう、マイスター・ハイスクールの事業予算を中核に置きつつも、本校を支える企業・団体、研究機関、行政機関等からの多様な支援手法を模索した1年となった。

### 2 昨年度からの課題と本年度の重点的な取組

昨年度からの課題として、定量的目標の評価結果にある「将来、地域のために貢献したいと考え、行動できた生徒の割合」が大きく目標に届いていない状況を踏まえ、課題を解決する力の向上を目指し、自ら学び、農業をはじめとした地域産業の振興や地域社会の貢献に主体的かつ協同的に取り組む姿勢を生徒が身につけることができるよう、デュアル派遣実習とプロジェクト学習の改善に取り組んだ。

### 3 デュアル派遣実習の充実

デュアル派遣実習については、町外の協力企業にて長期休業の期間を活用した取組とすることにより、食品企業をはじめ農業関連企業等への就業に繋げることができた。こうした取組は、企業の専門家から直接指導を受けることにより、生徒にとっては、専門的な知識・技術の重要性や企業、社会への貢献に対する意識を身近に感じ、理解を深めるとともに、企業にとっても、受入にあたって望ましい人材の確保に繋がることが期待されるものとなった。

### 4 プロジェクト学習の充実

プロジェクト学習については、地域の実態に即した学習活動となるよう、産業現場の第一線で活躍されている企業や団体、大学、研究機関等の専門家から、課題の設定から研究計画の立案と実施、評価等の各段階に、助言をいただき、研究内容の充実に繋げることができた。

特に、食品科学科の商品開発においては、商品コンセプトから加工技術、販売手法などにおいて様々な専門的な助言をいただくことにより、食品づくりのコンテストでの受賞や食品企業における事業化に繋げることができた。

また、生産科学科の馬事コースにおいては、北里大学と連携した乗馬療養の研究といった社会貢献に繋がる研究にも取り組むことができた。

こうした取組は、生徒の資質向上はもとより、企業や団体、大学、研究機関等の施設の見学や施設での実習、研修等とあいまって、教員の資質向上にも繋がっている。

### 5 eコマース

eコマースについては、ヤフー株式会社の支援を受け、商品の撮影技術やホームページに掲載する文章技術などの実務的な知識・技術の習得から具体的な販売活動を実践し、その評価までを学ぶことができた。販売実践にあたっては、「新ひだか町×静内農業高校マルシェ（ネットショップサイト）」として開設、ネットショップ内で本校で生産された加工品や新ひだか町の推奨品などが販売された。

これまで農業高校にて実施してきた対面での販売実習とともに、インターネットを活用した販売実習は、将来的にICTを活用するスキルとして重要なものであり、技術の進展が速いICTを活用する分野においては、引き続き、専門的な支援を受けつつ授業内容を改善する必要がある。

また、食品科学科の商品開発や特産品開発などと連携し、新ひだか町や企業等の支援を受けつつ、今後とも販売実践とその評価を充実した内容とする必要である。

### 6 英語教育の充実と国際交流

英語教育においては、国際交流とICTを活用した授業の充実とともに、7時間目の授業として「英語研究」を設定し、積極的にコミュニケーションを図ろうとする姿勢とともに、適切に伝える力の向上に努めることができた。なお、本校においては、これまでも新ひだか町の姉妹都市であるレキシントンの高校生とのオンライン交流を行っているが、芸術（書道）の授業と連携し、毛筆や墨絵など日本ならではの表現形式を活かした葉書を作成し、それぞれのペンパル（交流相手）に送ることで、英語教育の実践の機会となっている。

さらに、本校においては、日仏両国政府間の連携した取組である「日仏農業教育連携事業」の一環で、フランス・ヴェルジェ高校との交流を実施しているが、本年度、フランス側からインターンシップ生を受入、新ひだか町内の牧場での職業体験や本校への短期留学、町内の小学生との交流など行った。また、

農林水産省の日仏農業育連携フランス訪問プロジェクトに本校生徒3名が選ばれ、リヨン市にて、農業高校訪問やワイナリー・農場見学、ホームステイなどを通じて、日仏両国の生徒同士の交流を深めるとともに、現地の日本食の普及イベント等に参加した。

こうした交流活動は、英語でのコミュニケーション力の向上に資するとともに、日本と相手国の理解を通じ、国際感覚を養う重要な機会となり、今後とも交流の機会の充実に努める必要がある。

## 7 次年度に向けた教育内容の充実

これまで、マイスター・ハイスクールビジョンの6つの項目に沿って、事業を推進してきた。特に、令和5年度は、産業界の関係者と一体となってプロジェクト学習やデュアル派遣実習などに努めてきた。

次年度においても、プロジェクト学習にて、地域の課題解決に取り組む学習活動を充実する重要があるが、定量的評価にて、「将来地域のために貢献したいと考え貢献できた生徒の割合」の状況を踏まえ、生徒が「地域の役に立った」「地域の方に認められた」と自己有用感が高まるよう指導方法を改善する必要がある。

このため、プロジェクト学習において、引き続き専門人材の指導が得られるよう取り組むとともに、企業や関係団体、農業生産者を実際に訪問し、課題や成果を共有したり、共同して研究する機会を設けるなど、連携の機会を増やし、生徒の学習が推進されるよう取り組む。

また、具体的な授業内容の改善について、指定期間の終了後を見据え、引き続き、専門人材より高度な知識・技術の指導をいただく講義・実習等とこれまでにいただいた指導成果を踏まえ、教員自身が行う講義・実習等の機能分担を明確にするとともに、実際の指導場面でも対面方式とオンラインの活用を、その指導内容の重要度や関連する実習、実験等との連携等に配慮し、選択するなどの見直しに取り組む。

さらに、生徒の進路の意識の高まりとともに、進路の幅の広がりを踏まえ、一人ひとりに対応した指導が必要であり、特に高度な知識を求めて進学する生徒には、進学先において必要とされる水準の基礎学力を身に付けることができるよう取り組む必要がある。昨年度から実施している英語、数学の7時間目の授業実施に加え、さらに進学先に応じた個別最適な学びが提供できるよう取り組む。

## 8 地域と産業を持続的にけん引する人材の育成をめざした取組

本校の事業計画では、「地域産業の課題解決の一助を担うとともに、フロンティアスピリッツのもとに、地域と産業の持続的発展をけん引するイノベーターとしてのマイスター育成を図る」としているが、定量的評価において、「将来、地域のために貢献したいと考え行動できた生徒の割合」は目標とする80%を26.3ポイント下回る結果となっている。

本校は、管内唯一の専門校として、新ひだか町はもとより管内の産業界で活躍し得る専門人材を育成する必要がある。このため、北海道の出先機関である日高振興局とも連携し、管内事業者と生徒との交流やワークショップ、販売活動の機会を確保するとともに、農業・食品だけではなく、日高管内の他産業や歴史・風土と観光資源、さらには地域で活躍する人材などを幅広く理解できるよう、講義や視察研修等の充実を図る。

こうした取組と企業等の専門人材による指導等を通じ、日高地域の振興や産業の発展に主体的かつ協働的に取り組む態度を養うことが重要と考えられる。

## 9 終了後を見据えた地域、企業等との関係性の強化

生産科学科馬事コースでは、日本中央競馬会、日本軽種馬協会をはじめとした関係機関、団体等と、生産科学科園芸コースでは、日高農業改良普及センター、JAをはじめとした関係機関、団体等との連携を深め、教育内容の充実に努めている。

特に食品科学科においての企業等との関係においては、外部講師の招へいによる講義や実習、企業訪問等の様々な学習を通じ、将来に向けた人材育成の目標を共有に努めてきているが、引き続き、生徒と企業等の双方にメリットとなることをめざし、関係性の充実に努めている。

また、新ひだか町が中心となり、町内の食品事業者と取り組んでいる特産品開発に、本校も参画し、新たなレシピの開発からパッケージデザイン、さらには試行的な販売活動までの一環した取組を実践している。

さらに、国際交流の分野等では、新ひだか町やロータリークラブなど自治体や地域団体等の支援を受けながら教育活動を行っている。

分野により、関係する企業や団体等は異なるが、教職員一人ひとりが企業等との関係性の維持、強化に努めるとともに、企業等と共有する人材育成の目標に沿った教育内容の充実に努め、地域や企業等に期待され、協力関係を強化していけるよう取り組む。

## 関連資料

### 第1節 マイスター・ハイスクール運営委員会議事録

#### I-1 第1回運営委員会議事録(抄)

1 日 時 令和4年5月31日(火)13:30~15:35

2 場 所 北海道静内農業高等学校 体育館

3 出席者

(1) 運営委員 12名

倉本 博史 委員, 生田 泰 委員, 大野 克之 委員, 西村 和夫 委員,  
河原 秀幸 委員, 松井 克行 委員, 遊佐 繁基 委員, 大塚 浩通 委員,  
瀬尾 英生 委員(渋谷 淳一 氏代理出席), 諏訪 勝巳 委員(萩庭 寿人 氏代理出席),  
佐藤 裕二 委員

※森 順子 委員は所用により欠席

(2) マイスター・ハイスクールCEO(副校長) 桑名 真人 氏

(3) 産業実務家教員 中西 信吾 氏

(4) 北海道教育庁学校教育局高校教育課 3名

岡本 浩一 課長補佐, 川窪 誠 主査, 藤井 隆史 指導主事

(5) 北海道教育長日高教育局 2名

行徳 義朗 局長, 木島 智一 企画総務課総務係長

#### 4 会議次第

- (1) 開会
- (2) 説明
- (3) 協議
- (4) 授業視察・農場視察(農場視察は雨のため中止)
- (5) 閉会

#### 5 指導・助言の内容(意見抜粋)

- 昨年度のアンケートから生徒の学びの意欲や進路に対する考え方が高まった。一方、課題は、定量評価で、将来地域に貢献する考えが若干目標に到達しておらず、解決策としては地域と交流する今年度のプロジェクト学習、デュアル派遣実習が有効である。
- プロジェクト学習では、講師に専門的な知識・経験から課題設定や実践などに助言をもらうことでプロジェクト学習が深まる。また、長期期間中のデュアル派遣実習は生徒に良い学習効果になる。
- プロジェクト学習の発表会は、可能であれば地域の方も見学できればよい。
- 小・中学生との交流で静内農業高校で学んでいる内容を伝えることで静内農業高校の良さをアピールする機会になる。
- 道経連は、食品科学科のプロジェクト学習に年3回以上企業に応援してもらえるよう計画していきたい。デュアル派遣実習では、期待に添えるようにアレンジしていく計画である。
- デュアル派遣実習は社会性を吸収できるよい機会だ。商工会として協力していく。
- マイスター・ハイスクール事業を知ったことで入学者が増えたことは良いことだ。今後のマイスター・ハイスクール事業を継続していくことができるか考える必要がある。
- マイスター・ハイスクール事業を学んだ卒業生に対して企業側の評価の中で地域社会の担い手を育成できていたか把握が必要である。

- 推薦入学で合格した生徒が、大学入学後に授業について行けることが要求される。高校で基礎学力をつけ、さらに学力がつくように英語や、数学に取り組んでいるので静観していきたい。
- FacebookやTwitterの検索をしてみると子どもが色々なことを学習していることが分かった。また、子どもが専門用語を話すことが多く、成長したことを実感できる。
- マイスター・ハイスクール事業のテーマが「発見」から「挑戦」になる。プロジェクト学習に農業改良普及センターが関わることで教育効果を期待したい。
- インタビュー形式のアンケート調査時期は、年度始めと年度末でも良いのではないか。
- マイスター・ハイスクール事業の内容で継続して供給することの難しさや、品質を維持することの大切さなどを、商品開発、商品販売でアドバイスをしていきたい。講師で参加した社員の意思がプラスになるのでマイスター・ハイスクール事業に関わるのが当社も価値がある。
- マイスター・ハイスクール事業の内容で農業改良センターや大学、民間企業などの外部講師の講義で非常に充実した内容になっているので期待する。
- デュアル派遣実習では、地域の軽種馬、生産者や製造メーカーの協力で各種実習が計画され大変有意義である。生徒の学習意欲が高まったことを聞き今後のマイスター・ハイスクール事業に期待する。
- マイスター・ハイスクール事業はお金がかかることが理解出来た。地域のイノベーターとしての人材育成に地元の産業界がどのように関わるか大切である。
- マイスター・ハイスクール事業が終了しても、その環境を維持できるように協力していきたい。
- 学校としては、自走する仕組みを委員の皆様と協議しながら計画していきたい。
- マイスター・ハイスクール事業が終了すると予算が配分されないのだから今から準備する必要がある。
- マイスター・ハイスクール事業が終了しても、現在の教育課程を維持し、財政確保している事例がある。資金を確保した事例として実務家教員、CEDの資金などを市で負担した例や、OBからの寄付、ふるさと納税の活用、製品販売の売上の一部などの例がある。
- 新ひだか町では、農林水産省の補助事業で年間1,000万の予算を今年から計画している。マイスター・ハイスクール事業が終了しても先ほどの色々な事例を組み合わせながら計画をしていきたい。

## I-2 第2回運営委員会議事録(抄)

1 日 時 令和4年10月11日(火)13:30~14:50

2 場 所 北農健保会館 特別会議室(Zoomによるオンライン開催)

3 出席者

(1) 運営委員 12名

大野 克之 委員, 西村 和夫 委員, 倉本 博史 委員, 水野 治 委員,  
河原 秀幸 委員, 松井 克行 委員, 遊佐 繁基 委員, 諏訪 勝巳 委員,  
生田 泰 委員(五十嵐 尚 氏代理出席), 瀬尾 英生 委員(萩庭 寿人 氏代理出席)  
佐藤 裕二 委員, 松原 千尋 委員

※ 森 順子 委員は、所用により欠席

(2) マイスター・ハイスクールCEO(副校長) 桑名 真人 氏

(3) 産業実務家教員 中西 信吾 氏

(4) (株)あしたの寺子屋 嶋本 勇介 氏(静内農業高校担当「伴走者」)所用により欠席

(5) 北海道教育庁学校教育局高校教育課 3名

岡本 浩一 課長補佐, 川窪 誠 主査, 藤井 隆史 指導主事

(6) 北海道教育長日高教育局 1名

大槻 拓磨 次長



#### 4 会議次第

- (1) 開会
- (2) 説明
- (3) 協議
- (4) 閉会

#### 5 指導・助言の内容(意見抜粋)

- 生徒の視野が広がり積極性が見られ変容を感じられ、教師が様々な刺激を受けたことは良い。
- デュアル学習では、夏期休業中の実施を続けて欲しい。今後の事業の自走化は、企業や団体、地域が相互のメリットを生かして教育活動が長く続けられるように取り組んで欲しい。
- 実習の中身が相手に負担のかからないように相互メリットがあるように計画して欲しい。
- 今回のカリキュラムは大変充実した中身になっている。
- 日高振興局では、2回ほど静内農業高校と意見交換をした。地域の農業関係団体の協力を得て日高農業に係る講義や現地見学を行う出前教室のほか、日高産品の販路拡大やブランド力強化に資する取組を検討している。
- 道経連では、ベル食品や雪印メグミルクに依頼し商品開発を強化する授業アレンジをした。今年度デュアル派遣実習を受け入れ事業所から静内農業高校の生徒が内定をもらったことを聞き事業所の人手不足の課題も解決することにつながったと思う。
- マイスター・ハイスクール事業が2年目になり、生徒の成長がうかがえる。
- 教員が情報共有し積極的にマイスター・ハイスクール事業に取り組んでいることが分かりました。
- マイスター・ハイスクール事業の終了後も静内農業高校と関わる必要がある。
- 社員がパワーポイントを使い静内農業高校で講義をやっている姿を見て社員にとっても価値があるものだと感じた。
- マイスター・ハイスクール事業の終了後は、生徒が企業に来てもらい民間企業のイメージをもってもらおう。
- 大学に推薦で入学を希望している生徒がいることが分かった。
- マイスター・ハイスクール事業の中でグローバル的な教育が展開されているので地元で優秀な人材を就職だけに留まらず、全国・海外で活躍する人材育成になると思う。
- マスコミに取材され生徒も教師もモチベーションが上がっている。教師が生徒の良いことを見つけることでさらにモチベーションが上がっている。
- マイスター・ハイスクール事業の3年間でどのような変化があったか生徒にアンケートなどで聞き、生徒自身が何かプラスになったことを理解することで、マイスター・ハイスクール事業後の生徒の人生もプラスになると思う。
- いろんな講師の講演を聴き子どものやる気がでた。担任以外の先生から子どものことを聞く機会があり、色々な関わりで認められたという気持ちで卒業していくと思う。
- 生徒も教師も成長していると聞いて感動した。また、生協で静内農業高校で企画した商品が販売されることは地域にとっても生徒にとっても良いことだ。
- J Aしなずいとしては就労、就農の情報提供や地元企業と連携しながら教育活動を応援したい。
- マイスター・ハイスクール事業がマスコミに取り上げられて地域に浸透しているが、もっと浸透するように努力をしてもらい、マイスター・ハイスクール事業終了後も地域に協力してもらえる土俵づくりが必要である。
- 教師向けのアンケート結果から、こちらが思っている以上に生徒には柔軟な対応力があることが分かった。今後は、学校全体でマイスター・ハイスクール事業をより一層共有する必要がある。
- 新ひだか町もマイスター・ハイスクール事業が地域と連携できるように支援したい。

### I-3 第3回運営委員会議事録(抄)

1 日 時 令和5年1月25日(水)13:30~15:35

2 場 所 北海道静内農業高等学校 体育館

3 出席者

(1) 運営委員 12名

倉本 博史 委員, 生田 泰 委員, 大野 克之 委員, 西村 和夫 委員  
河原 秀幸 委員, 松井 克行 委員, 遊佐 繁基 委員,  
鈴木 一由 委員(オンラインによる参加), 水野 治 委員(オンラインによる参加)  
諏訪 勝巳 委員(オンラインによる参加), 佐藤 裕二 委員  
※森 順子 委員は所用により欠席

(2) マイスター・ハイスクールCEO(副校長) 桑名 真人 氏

(3) 産業実務家教員 中西 信吾 氏

(4) 株式会社あしたの寺子屋 嶋本 勇介 氏(静内農業高校担当「伴走者」)所用により欠席

(5) 北海道教育庁学校教育局高校教育課 2名

岡本 浩一 課長補佐, 藤井 隆史 指導主事

(6) 北海道教育長日高教育局 2名

行徳 義朗 局長

### 4 会議次第

(1) 開会

(2) 報告

ア 生徒から(事業の取組内容と学んだこと、気付きなど。プロジェクト発表)

イ CEOから(定量的評価、定性的評価、次年度の取組の方向性)

(3) 協議

ア 検証・評価(指導・助言)

(4) 閉会

### 5 指導助言の内容(意見抜粋)

○生徒達の雰囲気が高まっていることや、この間の様々な取組を通じて視野が広がってきていることについては、本当によく分かった。

○進路実績として、卒業後の就農、あるいは地域の主要産業への就職者の割合が5割を超える水準になるとか、あるいは、将来、新規参入を目指して、進学又は雇用就農したりしたという点で進捗してきている。

○生徒さんの意欲がかなり高まってきていること、実際に地域の産業への就職、就業に結び付く機運も少しずつできつつあるという点では、今取組を進めている方向については、間違っていない。

○プロジェクト学習の中で、いろいろな経験を重ね、成功、失敗も踏まえて、ある種の成果が自分たちのものとして、自信につながっていけば、地域に貢献したい、貢献していけるんじゃないか、という自信も高まってくるのではないかと思われる。今後、プロジェクト学習の充実を図っていただければと思う。

○昨年11月に道経連の主催で開催いたしました「おにぎりアイデアコンテスト」では、先生から人前に出るのが苦手な生徒が、インタビューに答えているのに一番驚いた、と生徒の成長をうかがうような話を伺うこともできた。

○指定事業終了後を見据え、農業におけるカーボンニュートラルに向けたバイオ炭の実証試験や、学校で作っている商品のブランディングなどを一緒に検討を進めている。

○定量的目標について各項目において年度始めより、年度末の方が数字が上がっているというア

- ンケートの結果になっており各項目の理解度がより深掘りされたのかなと感じる。
- アンケートの集計結果の3番、4番におきましては、年度末の数字が非常に上がっていて、地域に対する問題意識が高まった、また、理解度も上がった結果かなと思います。何とか地域に就職していただける方法等を、今後、商工会も含めて考えていかなくてはと感じたところです。
  - 定性的目標当然、自分自身のよい点、また苦手な点を知ることによって、その辺が出発点になるのかなと思いますので、非常によいアンケートだったなと感じました。
  - 本来であれば我々地元の間人達がやらなければならないことに対して、生徒さんが問題意識をもって様々な活動をしてくれたことは、非常に感謝するとともに我々地元の間人としては、反省もしている。
  - 皆様方の御協力によって、マイスター・ハイスクール事業がうまく実施できている結果だと、非常に感謝しております。
  - 地元への就職にはなかなか結び付かないという問題点がありまして、新ひだかのみならず、日高管内の我々企業も、もっと積極的に事業に参加した方がよいのではないかと感じております。
- 静内農業高校の学生さんのような学生が将来、獣医療や農業を担ってくれるのであれば、北海道は安心である。ことで、本当に質的な評価としては素晴らしい生徒さんを育てていただいておりますということで、非常に感動しておりますし、そういう学生さんを大学側に輩出していただきたい。
- 障がい者の方の乗馬教育、小学生に対する乗馬学習など本当に素晴らしく継続して欲しい。
  - 親同士の会話の中でも、やはり農高の、頑張っているねと、テレビや新聞で取り上げられることも多いですし、それによっていろいろな人と会話できるのは、本当に幸せなことだ。
  - 地元に残ってもらえうような中で、何か誘導していかなくてはならないところなのですが、カリキュラム的には、そこのところはなかなか難しいなと悩んでいるところもありましたので、そこのところを普及センターと協議していただければと思いました。
  - プロジェクトについては長い目で見ると、そういう形にもっていくと、地域とともに解決した中で、地域の方から「すごいね。」と声をかけられたり、地域愛が芽生えてくるのかなと思う。
  - 今後については、指定期間が終了した後も、引き続き当社の方に来ていただいたり、社会で働く雰囲気や会社というイメージを各々がもっていただきたい。
  - 地元への就職のところ、なかなか伸びていないのが気になるので、職業や産業の魅力をもっと発信していかなくてはいけないのかなと感じている。
  - 我々も進化していかなくてはいけない、どういう進化かということ、地域として残ってもらう、人材として受け入れるような環境を作らないといけないと感じていたところです。
- 自立に向けたところで道教委、町や農協が等連携して考えていく必要がある。
  - 新ひだかのために何かしたいということを残している、皆が皆ここに残ることは不可能ですけれども、そういう気持ちを持っている方を大事にしていく、つながっていくということも一つ重要である。

## 第2節 令和4年度第71回北海道高等学校農業教育研究大会第26回全国高等学校農場協会北海道支部大会 シンポジウム記録

1 テーマ 「持続可能な農業の担い手育成と農業高校、地域の役割」

2 パネラー

新ひだか町長	大野 克之 様
しずない農業協同組合副組合長	西村 和夫 様
有限会社あま屋代表取締役	天野 洋海 様

3 コーディネーター

北海道静内農業高等学校副校長  
マイスター・ハイスクールCEO 桑名 真人

4 趣旨説明

昨年度より、本校は文部科学省よりマイスター・ハイスクールの指定を受け、事業を実施しておりますが、生徒は、企業などの産業現場での視察や実習、また、産業現場の第一線から外部講師を招いての講義・講話、実験・実習等を通じ、経済や社会の実際に直接に触れています。こうした取組を通じ、先生方も地域をはじめ外部の多くの方々と交流、語り合うようになっていきます。

さて、シンポジウムのテーマでは、「持続可能性」という長い時間の流れに着目しておりますが、これまでの時間を振り返ると、ずいぶんと経済・社会が様変わりしたことを感じます。これから、生徒が生産活動の一翼を担うようになり、その職業生活を全うする間においても、地域の経済・社会は大きく変容すると考えられます。

10年前には想像できなかったような情報通信技術の経済・社会への浸透、3年前には想定できなかった感染症の制約による経済・社会の変容は、身近な我々の職場、生活のかたちをも大きく変えつつあります。

こうした中で、どのような人材育成に取り組むのかを考えた場合、そのヒントは農業の担い手育成に取り組んできた農業高校のこれまでの教育活動の中にあるのではないかと。例えば、学校農業クラブの活動で取り組まれている意見発表やプロジェクト研究、そして学校農業クラブの運営管理などは、課題に向き合う力、協調する力など、どんな時代の変化にあっても必要となるヒトの力を涵養する教育ではないかと。

加えて、「学校農場」という農業高校ならではの教育環境において、例えば、静内農業高校では、乳牛の飼料の栽培、生乳の生産から乳製品加工、さらには販売、eコマースを学習する。サプライチェーンを肌で感じ、商品の開発と販売を通じて、付加価値向上の取組を実感する。こうした教育環境を地域と協力して、これまで以上に活かしていくことが重要と考えております。

今、リモートの環境が日常になりつつあることは、北海道の弱点であった経済立地の悪さや人口減少地域の利便性の課題を大きく改善していくように思います。これからの農村に、人口を呼び込む、移住・定住、交流人口で賑わう農村の姿を期待しています。

そうした時代の変化の中で、農業を担う若者の成長にどう向き合っていくべきなのか、農業高校、地域がどんな役割を果たしていけるのか、皆さまとともに考えていきたいと思っております。

### <シンポジウム記録>

#### 1 自己紹介／これまでの地域の変化で感じたこと

桑名 本日の司会を進行します、静内農業高校の桑名です。会場の皆様、お手元の資料の最後のページにアンケート調査の要領を記載しておりますので、要領に従って、お答え頂きたいと思っております。はじめに、問いの1番につきまして、練習も兼ね、QRコードを読み取って頂き、回答をお願いしたいと思っております。回答結果については、入力次第、皆様の想いがグラフに反映されるようになっておりますので、まずは、問いの1番の読み取りをお願いします。本日のシンポジウムの趣旨につきましては、お手元の資料の2ページに記載しております。時間に限りがありますので、早速パネラーの皆様から、お話を伺って参りたいと思っております。はじめに、パネラーの皆様から自己紹介を兼ねて、これまでの歩み、その過程での地域の変化、その中で感じたこと、今日に繋がるエピソードなど、お話頂ければと思います。はじめに、新ひだか町長大野様、よろしくお願いいたします。大野様におかれましては、長くふるさとを離れておりましたが、定年間近に、お戻りになっておられます。ふるさとの変化、ふるさとを離れていたときのふるさとへの想いなども含めて、お話頂ければと思います。大野様、よろしくお願いいたします。



大野 大野でございます。よろしくお願いいたします。改めまして、私は本町出身で、高校は静内高校を卒業しております。当時の静内高校は普通科の他に、実業科というものがあり、酪農、畜産、農業、林業、生活科というクラスがあり、合計で9クラスぐらいあったと思っております。その他に、定時制や季節制もあり、非常に規模の大きい高校でした。

私は、大学を受験していませんし、就職活動もほとんどしていませんでした。そういった中で、高校時代、音楽活動に親しみ、それを経験していくうちに大学受験や就職もどうしようかなと考えておりました。その後1年遅れで、北海道職員として、採用されています。ですので、高校卒業後の1年間は、アルバイトなどをしながら、本町におりました。しかし、ある人との出会いによって、北海道職員の試験を受験し、北海道の職員となることができました。北海道職員になってからは、私は、サラリーマンの息子ですが、配属は農業分野になりました。その配属先で北海道庁の職員として、40年余り、農業分野の仕事に携わりました。50代ぐらいになりましたから、北海道競馬の再建を行うため、北海道競馬の仕事に携わりました。その中で、農業全般を見て簡単に申し上げると、昔は、軽種馬以外のほとんどのものは、政府の指示価格の中で、農業者の方にお金落ちていたという時代でありました。それが、だんだんと世の中が変わり、市場の中で、価格が決められるようになりました。農業者の中においても、教育などを充実させながら自分の力で稼ぐことが必要な時代に変化してきました。それに加え今は、国際化ということで、海外との出入りがあります。あるいは、海外に目を向けなければならないということで、非常に難しい時代になってきています。しかしその一方で、農業を行っていく中で、チャンスも生まれている時代になったと、今までの40年間を振り返り考えております。また後ほど改めてお話をさせて頂きたいと思っております。本日はよろしくお願ひいたします。



桑名 大野様ありがとうございました。時代の変化があつて、難しい時代ということがありましたけども、一方でチャンスがある時代になっていくというような、30年40年の大きな時間の流れの中で、農業を見て農村を見てのお話を頂きました。続きまして、JAしずない副組合長西村様、よろしくお願ひします。西村様におかれましては、本校の前身となる静内高校を卒業されています。このシンポジウムにあたり、事前にインタビューさせて頂いた中で、高校の先生、そして学校農業クラブ活動が大いに人生に影響したことを伺っております。それでは、西村様よろしくお願ひいたします。

西村 はじめまして、西村です。先ほど大野町長が、静内高校出身と言っておりましたが、私も静内高校出身です。先ほど大野町長が説明された9クラスの中の酪農畜産科というクラスを卒業しています。当時は実習場まで、お弁当を持って学校の先生が運転するバスに乗り込み、現在の静内農業高校にある実習棟に1週間に1回、恐らく毎週月曜日に実習に出かけていた3年間でした。他の普通科に在籍する生徒から見ると、変な話ですが、同じ作業服を着てバスに乗り込んでいることから、囚人がバスに乗り込んでいくという風に見られていたのではないかと思います。当時私は、静内高校のバドミントン部で主将をしており、運動一本で、1、2年から3年生の国体予選が終わるまでは、部活に一生懸命取り組んでいました。高校時代の私の担任は普通教科を担当する先生であったため、クラスの中ではなかなか農業に触れることはありませんでした。しかし専門教科の農業では、酪農学園大学から赴任した若い先生が農業クラブ活動を活発に行っており、それに刺激され私も2年生の時に農業クラブの会長に立候補しました。それから、農業クラブの意見発表や活動発表などで石狩や当別の大会に出場したという記憶があります。当時の活動発表は模造紙やスライドを用いながら発表をした時代だったと思います。専攻班は、加工実習班や軽種馬班、酪農班などがあり、農業系の部活もありましたが、実習場が遠いこともあり、思うような活動が当時ではできませんでした。

そして3年生となり、卒業が間近に迫り、進路について考えたとき、私の家業は軽種馬産業、いわゆる競走馬の生産牧場でしたので、親の跡を継ぐ、もしくは進学を考えていました。しかし親の経済問題や家の労働力問題の2つの悩みがあり、なかなか自分では決断できなかったのですが、学校の先生が両親を説得してくれたこともあり、進学することができました。その当時は、お金の余裕もなく、現在のように銀行振り込みもなかったため、毎月、緑の現金封筒が寮に届くのを楽しみにしていた時代でした。また、全国から集まった仲間たちにも様々な影響を受けた時代でもあり、大学では農業ゼミナールという当時のサークルでゼミ委員長を務め、全国大会にも参加する中でもいろいろな人との出会いがありました。現在私は、農業協同組合の副組合長として常勤で勤めておりますが、やはり今までの活動の中で培ってきたことが人間形成に繋がったと感じています。当然学生の時、理論武装をしたり論破をしたり、その中で、自分の考え方が影響されたことがありましたが、後に卒業し地元に戻った時に、4Hクラブに所属したり、軽種馬青年部、農協青年部という青年部活動に繋がったと考えております。社会人となり結婚し、大人になった今、今度は地域や町に対する自分の役割ができたと思います。そういう部分でいくと、一番最初の原点は、やはり農業高校の農業クラブ活動で得た自分の意志の主張や活動であったと考えています。そういう意味で、私は自分の子供に対しても、一流であろうが、三流であろうがどこでもいいため、やはり学業としても、もう一つ上を目指すようにと伝えていました。それもやはり私は三人の子供がいますが、みんなそれぞれ学識経験を経て、今では社会人として立派に働いております。また改めてお話をさせていただきます。



桑名 ありがとうございます。学校農業クラブの活動、先生の後押しが原点になって、のちのちの人生の地域での役割というものにも繋がって、ということのお話ありがとうございます。

それでは次に、新ひだか町にて飲食店を経営し、地域の皆様に愛される店づくりをしており、特に日高昆布をはじめとした地域の食材を生かした創作料理で日高地方を訪れる方々にも魅力ある店づくりをされています。天野様よろしくお願いたします。

天野 天野でございます。よろしくお願いたします。地域に愛されているかどうかはわかりませんが、地域の食材を愛している事は間違いありません。地域の食材をいかに世界に発信していくのか、伝えていくのかをテーマに私のお店である「あま屋」という料理屋を開いております。

私は中学を卒業すると同時に、新ひだか町から出て、札幌にいました。中学校時代から都会に憧れており、都会に行きいろいろな刺激を受けたいという思いで札幌の高校に進学し、大学に進み、就職して、ふと気が付いた時に田舎に帰ろうと思いました。田舎に帰ろうと思ったきっかけというのは、実家がマルテンストアーというスーパーをやっており、その家業を継ぐためでした。帰ってきた際に一番最初に思ったことは、「田舎に帰ってきたらつまらない。」ということです。しかし、つまらないのであれば、楽しくする仕組みを自分で作りだせばいいんだと気が付いてからは、この新ひだか町がとても好きになりました。ここでできないことなんて何もありません。しかし、「田舎でできないことってなにかありますか？」と言われると、劇場もなく、AKBのような芸能人、遊園地もないことからそのような与えられなければならないことは田舎では楽しむことができません。ですが、自分たちで作り出す楽しさはその何十倍も何百倍も楽しいものです。地域のイベントで1,000人ぐらい集まるイベントを自分たちで作りあげたり、それを地域の人と協力して行うことができるのが地域の強みですし、町といった行政との繋がりも密接にできます。それが、田舎の強みです。田舎の強みをいかに活かすのかをテーマにこの18年ぐらい、「お料理あま屋」を作ってきました。そこで、外から見た地域の魅力を料理で表現することをやってきました。本当は皆さんにも、スライドでの料理の紹介や実際に料理をお出ししたいくらいです。

私は地域をデフォルメして伝えるという活動も行っています。昨日、実際に先生方でお店にきていただいた方もいらっしゃいますが、私のお店では料理の一番最初に昆布のお出汁をだしています。このように昆布のお出汁を料理の最初に出すお店は日高にはここしかありません。地域の皆さんは、以外にも日高の強みに気が付いていない方が多いです。それを発見していくことに楽しみがあります。後ほど地域の強みを生かすこと、そして、子供たちが地域で活躍するためには何が必要なのかを話しができればと思います。本日はよろしくお願いたします。

桑名 ありがとうございます。田舎を一度出て、だけでもまた帰ろうというところ、そして、地域にいたら与えられるものを楽しむことはできないけれども、自主性をもって自分で作っていくということのできる地域の強み、それから行政との連携なども密接にできる強みなど、地域ならではの話をいただきました。ありがとうございます。

続きまして、これからの時代、ポストコロナやDXといったこれまでと大いに異なる時代を生きていくこととなりますが、そうした変化の中で、どのような展望をもって、どんな人材が必要なのかをお聞きしたいと思います。はじめに西村様よろしくお願いたします。

## 2 これまでと大きく異なる時代を生き抜くための必要な人材育成の方向

西村 これから静内農業高校の教育振興会の会長という立場でお話したいと思います。静内農業高校は現在、文部科学省のマイスター・ハイスクール事業に指定されていますが、その以前から軽種馬のセリでの2,500万での売却を筆頭に、各種報道機関で大きく取り上げられ、全国各地に発信されています。これは学校だけでなく生徒自身への影響もすごく大きかったと思います。

農協としての考え方としますと、平成27年から今まで、大体8年間で新規就農された方は、27組41名となっています。コロナ禍の前は、新規就農に係わる呼び込みをしてもなかなか難しいものがありました。しかしコロナ禍となり、生活が制限される中で人生について考え、新規就農について興味を持ってくださる方も増えてきています。新規就農される方は30代から40代が多いですが、ちょうど人生の分岐点という形で自分が今までに就いてきた消防士や救命士、医療関係といった職業について立ち止まり、振り返ったときに、農業について見直し、考える部分があったためです。もう一つはコロナ禍で医療関係のことやテレワークのことを考えると都会が必ずしも安全ではないことを、地方は再確認できたのではないかと考えています。地方でも先ほど天野さんが言ったように、なんでもできるじゃないか、では生きていくために、どの環境がいいだろうかという行動が、新規就農の方にも増え始めてきたと思います。

次にマイスター・ハイスクール事業の話に移らせてさせていただきます。この事業ではやはり高校生が一流の講師により、様々な講演あるいは、実習をさせてもらえることで、子供たちの考え方がどんどん変わっていきます。マイスター・ハイスクール事業の中では、地域のイノベーター、いわゆる単なる人材ではなく、一歩進んだ、それぞれの高等な技術や考え方や講演を聞いた知識の中で地域に還元をする人材、あるいは、またもっと一歩前へと前進することのできる人材を目指しています。以前、農業クラブの実績発表大会時に審査員をさせていただきましたが、その時に、各高校の生徒さんたちのいろいろな発表を見ると、地域の問題点をどう解決するかなどの発表も多く、私の時代には全くなかった考え方でした。

このように、生徒から逆に教えられたこともあり、地域にどう還元していくかということは勉強になりま

した。私たちの時代には、情報活用という知識があまり備わっていなかったことを考えると、今の子供たちはインターネットを活用することで様々な情報を収集できることはとても恵まれていることだと思います。話は戻りますが、マイスター・ハイスクール事業では実践的な学習や様々な人との関わりのある環境の中で、生徒は人間としても一つ大きくなっているのではないかと感じます。そういう意味では、高校生が単なる人材ではなく、やはり社会人としても一つ、選挙権もその通りなんです、世の中の見方ができるように学校教育の中でも機会を増やしていくことが必要ではないかと考えています。また、ご存じな方もいると思いますが、就職後の離職率が50%もあり、二人に一人が離職をしている現状があります。私も静内農業高校や静内高校に依頼され、模擬面接を行っていますが、その仕事や役割のイメージが実際に職場にいったときのイメージと異なっていたことがありました。例えば介護士という職業を選択する際、インターンシップで一度経験しただけで就職を決めてしまうというケースがあります。しかし、そうではなく、きちんと自分の知識や経験をも一つ上にあげて、それからその職業について、もっと突き詰めて、自分の生涯の職業について考えることができれば、入社後に思うようにいかなかった、イメージと違ったなどということを防げるのではないかと思います。18歳という多感な時期に、自分の将来の人生や職業を考えることはなかなか難しいと思いますが、学校教育や先生方の努力ある指導の中で、培われていくことができると思います。そういう意味では、先生方の役割として、コロナ禍であろうがなかろうが、今の時代よりも一歩進んだ指導が必要だと思います。

桑名 ありがとうございます。就職後の将来の先までを見て、社会人として、世の中を見ていけるようになる、知識をも一つ上にあげていくために先生方も教育を行い、離職も少なくなるようなところも目指していかなければならないなというお話をいただきました。続きまして、大野様よろしくお祈りします。

大野 私は、人として何が一番重要かと考えるときに、生きる力が備わっていないとだめだと思っています。生きる力とは漠然としてますけど、その根幹となるのは好奇心だと考えています。その好奇心を高校時代にいかに持ってもらうかが一番重要だと思います。好奇心を持つということは、一定の自分の考えを持たなければ、真の好奇心は持てないと思っています。ですから、そういう意味でいうと、好奇心を持つということは、それなりに子供たちが一定の自分の考えを持つということなので、少しレベルアップできると思います。またその好奇心を持って、何をどうしよう、これはどうしてなんだという時に、周りとのディスカッションができたり、今の時代普及しているスマートフォン等を使用して探求心を持って調べ物を行うことができます。これはいずれ、ディスカッションにおいても探求心の追求においても絶対に、子供たちの経験値を上げることに繋がると思います。これは自分ひとりではできないものなので、当然協調性というものも必要になってきます。これは真の経験を積み重ねるうちに、人として生きる力が備わっていくと思います。その生きる力というのは、生活していくという力もありますが、世の中に対してどのように自分が発信できるか、自分は何のためにこの仕事をしているのかといった心構えをもって生きていくということが自然と身に付くと思っています。そういう意味でも、高校生活3年間で、ぜひとも好奇心を持ってもらえるような子供たちを育ててほしいと思っています。

桑名 ありがとうございます。生きる力というものを踏まえながら好奇心を持って生活をしていくことが大切だということをお話いただきました。またその中でディスカッションや調べる力などまさに学校農業クラブ活動で行っているプロジェクト活動の研究が当てはまると思いました。つづきまして天野様、今まで、町外の世界を見て、そして、外部との繋がりを持つというなかで、様々なご経験をされたかと思えます。様々な方とどのようにコミュニケーションをとっていたかなどご説明いただければと思います。それではよろしくお祈りします。

天野 私がもし従業員を採用するのであればどのような人と一緒に働きたいかをお話しさせていただきます。皆さんや子供である生徒たちも思っているかもしれませんが、未来の立派な大人が今の子供である生徒たちだと私は考えております。立派な生徒や立派な子供を作る必要は全くないと考えています。立派な大人を作っていくというその意識をいかに持てるかが大事だと思います。私が大事だと思っているのは、まず最初に基礎学力です。例えば、足し算、掛け算、割り算ができない、漢字が読めなかった場合、私のように料理屋で働いたとき、お会計をすることができません。お客様が例えば島根県から来た時に、島根県がわからなければ会話をすることができません。基礎学力がなければそのスタートラインにも立てていないのです。基礎学力は非常に大事なことでと私自身、接客業をしていて感じる部分があります。また、料理を作る際や食品科学科などの実習で、割合や比率を計算することがあると思います。しかし、基礎学力が身に付いていなければ、レシピを作るときに足し算ができない、鍋に入れる水の容量がわからないといったことが生じ、作業効率が全く変わってしまいます。

大野町長もお話されていましたが、ではどうしたらそれができるのかと考えたときに、基礎学力が身に付くと、考える力ができる、判断できる、自分で決められる。それができるとチャレンジできるようになります。チャレンジできる大人を作る。そこが一番大事なポイントだと思っています。現在、岸田内閣はスタートアップ企業を応援するとしています。ですので、日本はこれから、スタートアップできる人材を育成して



いかなければなりません。だからこそ考えることができる、判断することができる、自分で決めることができる、チャレンジすることができる。こういった人材が世の中で必要になると私は強く思っています。

桑名 ありがとうございます。未来の立派な大人をつくるということに関して、詳しく分解してお話を伺うことができました。

ここで、今までのお話なども参考にしていただきながら、アンケートの入力作業をしていただきたいと思います。資料の一番裏のページのアンケートの2とアンケートの3を続けて、皆さんの思いを入力していただければと思います。入力後の結果は、はじめにアンケート2の方から画面のほうに表示させていただき、皆さんと共有したいと思います。なお、アンケートの2の方は、ただ今お話しがあった教科ごとの基礎的な知識や、意見発表を通じた自己の考えの明確化、将来の目標の具体化、未来を切り開く力、プロジェクト学習を通じた課題解決の力などといった選択肢を用意させていただいております。

また問3では、どこで生徒の気持ちが入るか、どこでやる気スイッチが入るかということについて、授業なのか実習なのか、農業クラブなのかといったシーン別において、選択肢をご用意しております。

生徒にどのような力を付けるべきかというアンケートの集計結果が出てきております。多かったのはプロジェクト学習でした。またそれと同じくらいの結果となったのが、教科や実習を通しての基礎的な知識や技能でした。これについては後ほど再度まとめさせていただきます。

続いて問3のアンケート結果のグラフをご覧ください。選択が多かったものとしては、実習のように体を動かす過程の中に学びのスイッチがあるという結果でした。続いて農業クラブ活動や農業クラブの3大行事などでの経験が生徒の世界観を変える要因となっていることがわかりました。

先ほど西村副組合長がお話されたとおり実体験が大切であることがわかりました。ただ今説明したアンケート結果も頭の隅に置いていただきながら、まとめに入らせていただきます。

これから農業高校が地域の中で、どういう役割を担っていくべきか、また、地域はどのように農業高校を応援、支援していくかということも踏まえてのお話をいただければと思います。それでは天野社長よろしく申し上げます。



### 3 農業高校の役割、地域の応援

天野 アンケート結果を見まして、私がこれから農業高校が地域にとってどうなっていくべきなのかを考えたときに、やはりもっと地域の中に入りこんで、地域の人たちと交流していくことが大切だと思います。なぜかという家や学校だけの活動だと、お父さんや母さん、学校の先生としか交流することができず、世の中の人と触れ合う機会が少ないと考えたからです。

最近、静内農業高校はよくお店に来てくれます。子供たちが新商品も持って来て、「これ、食べてください。これどうですか?」と質問をします。そうすると私は、単純にこれはもっとこうした方がいいですとか、見た目が悪いからこう作った方がいい、この味はこう改良したらいいよ。などと具体的に伝えてあげます。また、この商品は自分以外の外の人から見たらどう思われるのか考えてみよう、コンテストに応募するのであれば、だれがこれを見るのか、だれがこれを食べるのかも意識して文書を書くこと、テーマやコンセプトは、自分たちだけがイメージするコンセプトではなく、そのコンセプトを誰かが読んだときに、「おおいね!」と思ってもらえるような考え方にすることなどをアドバイスしました。そのような関わりを持った時に、その子供たちがとてもキラキラ輝いて、「ああ良いですね、やってみます。」と言い、一週間後に改良した商品を持ってきました。その商品はこの前の商品と雲泥の差で、三倍ぐらい美味しくなり、見た目もよくなりました。このように地域と子供たちが繋がったときに起こるハレーションによって子供たちが何倍もの力を発揮できることがあります。だから、地域との繋がりはすごく大事だと思っています。先ほど私は、地域で何ができるのかとお伝えしましたが、いい大人を作ろうといったときに地域は、子供たちがチャレンジできる環境を作ってあげることが大切だと思います。未来を変えることができるのは私達ではなく、子供たちなのです。50年後の未来、私達はほとんど死んでいてこの世界にはいないと思います。ですから、子供たちが未来を変えられるように地域が子供たちを支援していきたいです。私は、地域を変えるのは教育しかないと思っています。今回このような良い機会をいただきましたので、私としても、農業高校をしっかりと応援していきたいと思っておりますので、今後ともよろしく申し上げます。



桑名 ありがとうございます。実際に商品開発の部分でいろいろとご支援をいただいている中で、どのように生徒と交流をしているのかをご紹介いただきました。そして、チャレンジできる環境を地域でも作りながら未来に向けて子供たちを教育していくことが、地域振興に繋がるという熱いお言葉もいただきました。続きまして西村様、先ほど教育振興会においてもご支援いただいている内容をお話いただきましたが、そのご支援、ご協力していただいている内容も含めて、これから将来に向けて、農業高校はどのような役割を担って



いくべきか、そしてまた、地域をどう応援していくべきかのお話をよろしくお願いします。

西村 私は先ほどもお伝えしましたが、常勤で農協におります。私が常にJAの職員に伝えているのは、組合員の農家の皆様に正確な情報を提供することと、新たな発想を持つということです。農家の皆様は、天候や気候に左右されることが多々あります。そのような環境の中で、どう経営していくかという発想やアイデアを実際に行き届けていくことは限界があります。そのこともあり、農協の職員には新たなアイデアを提供できるレベルまで成長して欲しいと常々感じています。それは野菜でも酪農でも、軽種馬でも同じ事です。私は高校の時に、家業は軽種馬生産でしたが、牛の鑑定選手として道南地区大会まで出場しました。その当時は、学校の先生と一緒に黒沢農場さんや宇都宮農場さんまで研修に行った記憶があります。そこでは、「お前ら、おにぎりだけ持ってこい。そこのドライブインでラーメンを食べさせてもらったら、農場に行き、土をけってみろ。そしたら堆肥が出てきて、どれぐらい堆肥をいれたかわかる。」そういった教えられ方をしてきました。それがどういうわけか、社会人になってすごく役にたっています。私は、軽種馬の指導農業師ですが、酪農のことについて素人な言い方をしません。酪農家と同じレベルでもの話をします。これは高校の時に培った知識があるからだだと思います。そういう意味で言うと、高校のときには、やはり進学にしろ就職にしろ、社会人になるための準備や心構えを身に付けさせるためにも様々な経験であったり情報に触れさせてあげることが大切だと思います。

先ほどパネラーの方も述べていましたが、やはり知識の量がなければ、発想は絶対に生まれてこないのです。ですから、知識の吸収力が無限大の高校時代にどれだけの知識を与えられるかが重要になってきます。私は高校時代での部活動や農業クラブでの経験を通じ、これは訓練なのか、慣れなのか、度胸なのかを判断する術を身に付けました。今思い返せば、農業クラブの発表で石狩に行ったときに緊張してしまい、暗記ができず発表できなくなってしまったことがありました。その時に先生から「お前、外走ってシャキッとしてこい。」と真冬の石狩当別で言われた記憶があります。しかしそのような大きな経験をさせてもらったことで、度胸というものがだんだんと身に付き、今のこの立場になっても生きています。やはりこのような経験の中で身に付いたものは、絶対に将来に役立つと思います。

また学校で行っている食育や出前講座といった生徒が学んだことを逆に教える立場として外部と交流する経験は、生徒が成長するうえで必要なことだと思います。学生時代の経験は社会人になったときに応用することができるのです。

私は生徒が農協に応募し、面接をするときに必ず学業の他に何かサークル活動等をやっていたかを聞き、そこを重要視しています。現在、マイスター・ハイスクール事業に取り組んでいますが、その活動を通じ、高校生たちはやはり地域で育てていかなければならないと感じます。しかし、この環境を作るためには、お金であったり、地域や産業関係者からの協力が必要です。また高校生が地域に残るためには、子供たちが働きたいという職場作りを地域の産業全体で行っていかねばなりません。これは私自身も意識し、他の職業の方にも発言しているところでもあります。人が来ないのではなく、人に来てもらえる地域や職場作りを行うことが必要です。地域の人材作りも大切ですが、その受け皿となる側も努力していかなければならないとマイスター・ハイスクール事業を通して感じました。終わります。



桑名 ありがとうございます。制度的には、本当に学校の6年とか3年、3年とか4年など不連続ではありますが、将来社会人として立派な地域の支え木となっていくために地域としても生徒を育てていかなければならないこと、また、高校生活での経験が、将来に応用できるというお話もいただきました。そして、地域の受け皿、地域産業の受け皿ということについてもお話いただきました。これからもよろしく申し上げます。続きまして、大野様よろしくお願ひいたします。

大野 私が今までの人生経験の中で、一番この野郎と思った出来事を一つ皆さんにお知らせします。確か、40代後半だったと思います。現在、競馬の世界はすごく順調ですが、その当時は北海道競馬という地方競馬は赤字続きでした。累積赤字も200億円以上で、毎年20億円ぐらいの赤字を出しながら行っていた事業でしたが、当時の知事から突然やめなさいという風に言われました。やめなさいと言われたときは、私もまだ偉くなく、私の上司にあたる方と一緒に聞いたことを覚えています、その言葉を聞いたときに思ったのは、私はこの新ひだか町で生まれ、3歳か4歳の時に、管内の平取町というところに、父親の転勤で行き、小学校の大部分を過ごしてまた、新ひだか町に戻ってきた時のことです。平取町に行ったときに、隣の家で鶏や豚、馬の飼育や、ジャガイモ等を作っているおじいちゃんとおばあちゃんがいました。私は子供の頃、その家の馬小屋に行き、そこで飼われている馬に餌をあげたり遊んでいました。そのこともあり、やめなさいと言われた時に、ふとあの頃のおじいちゃんおばあちゃんのことを思い出したのです。地域には、あのようなおじいちゃんやおばあちゃんが生きており、競馬をやめるということはその人たちの生活にもかかわると思い、絶対にやめるべきではないと感じたのです。その後の猶予期間の中で経営はだんだんと改善していき、今で

はすごく成績が良くなり、当時では考えられないような時代になっています。この時にチャレンジできたのも、やはりあの子供時代の記憶があったからだと思います。私は、町長という職に就くために40年勤めていた道庁を辞めてここに来ました。その時にもやはり、子供時代のこの町の姿ですとか、住んでいる人の姿が思い浮かびました。そういう意味で、現在、町長という職で様々なことにチャレンジしていますが、やはり子供時代から高校時代までをどう地域で育てていくかが重要なことだと思います。先ほど西村副組合長からお話がありましたが、昨年からマイスター・ハイスクール事業に取り組んでいます。これは、全道各地の様々な企業や団体の方が講師として授業や実習を行うことで、子供たちに刺激を与え、子供たちがあらゆることにチャレンジできるような仕組みを作る事業となっております。静内農業高校の先生方も一生懸命に取り組んでおり、現在2年目となり、来年で事業最終年度の3年目となります。現在はある程度、国からの補助をいただきながら運営していますが、事業終了後の4年目以降のことも考えていかなければならなりません。現在は全道各地から講師の方々が来ていますが、今後高校だけの運営になると難しい部分も出てくるかと思えます。これから4年、5年先の時代には、天野さんのような町の産業を司ってる方々と高校とがどうタイアップしていくかが一番大切だと思います。

町によっては高校が一つもないところもありますが、新ひだか町はありがたいことに二つの高校があります。その恵まれた環境の中で、どう二つの高校を維持していくかが大切です。特に静内農業高校は地域の産業に密接に繋がっている部分がありますので、町としても町内の事業者の方々と農業高校が支援しあえるような環境を築いていきたいと思っております。



桑名 ありがとうございます。子供時代にみた地域の姿が大野様の人生に繋がってきていること。そしてまた、我々が将来を見ていくときに、我々の地域の今の姿を大事にしていかなければならないことも含めてお話いただきました。

ここで、アンケートの問いの4番をご覧ください。人材育成や農村における就農の部分重要視している結果が出ておりますが、前段の部分とどのような変化があるかをご説明させていただきます。前段の部分では、職業選択の自由や地域産業の起点となる就農などを目指す意見が多かったのですが、最終的な段階では農村における就農の部分も同じくらい重要視するべきだという結果になりました。

このような結果や本日シンポジウムでいただいたお話を踏まえながら、私達はこれからどうしていくべきなのかを考えていかなければなりません。皆様、是非帰りの道すがらでもかまいませんのでシンポジウムのこと思い出していただき、これから地域と高校との関わりをどうしていくか、地域の将来に向けた人材育成について考えていただければと思います。

本日はシンポジウムという形態であったため皆様全員と双方向に意見交換を行いたかったのですが、難しい部分がありました。ですので、アンケートの問いの5番の部分に皆様の思いを記述していただき、共有することで、今後に向けた皆様の財産にできたらと思います。よろしく申し上げます。それでは本日のシンポジウムを終了させていただきたいと思っております。

パネラーの皆様からいただきました本日のお話は、今後大切にしていかなければならないことばかりでした。3名のパネラーの皆様方、本日は大変貴重なお話ありがとうございました。3名のパネラーの皆様が退席されますので、感謝を込めて拍手でお送りさせていただきたいと思っております。本日はありがとうございました。



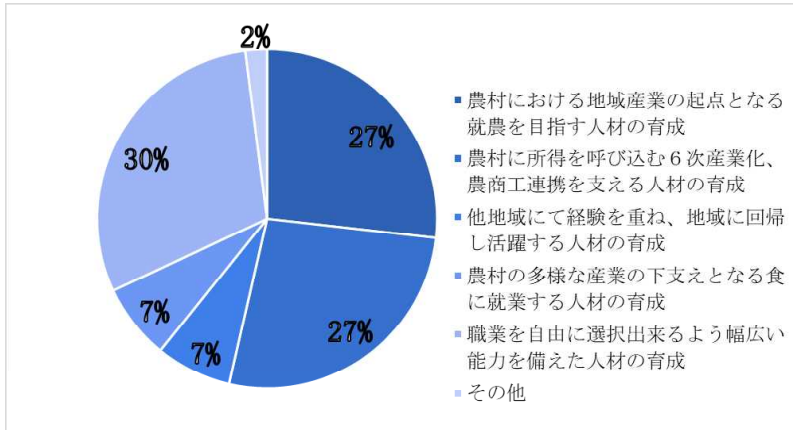
(右) 桑名真人CEO



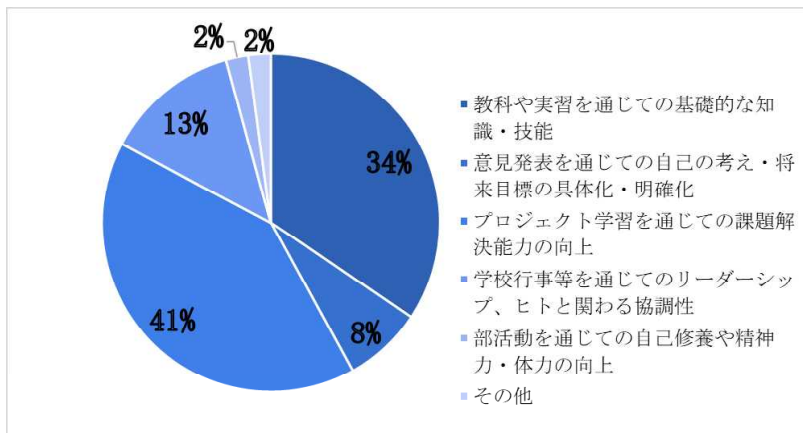
(左) 大野克之様 (中) 西村和夫様 (右) 天野洋海様

#### 4 シンポジウム参加者アンケート結果

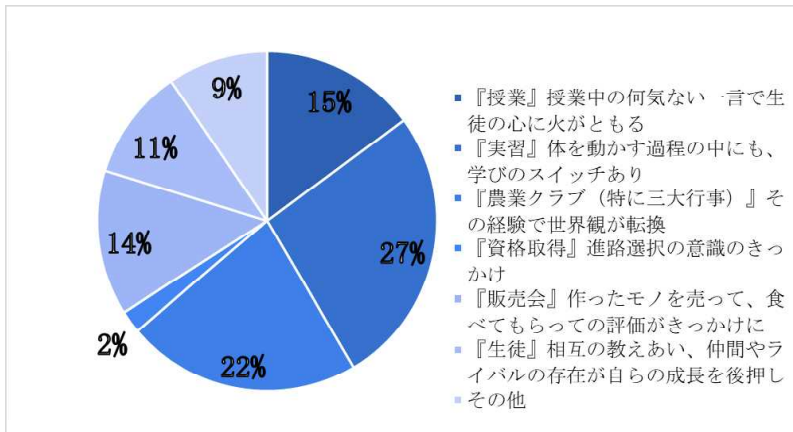
アンケート1 農業高校ではどのような人材育成が重要だと思いますか？(シンポジウム開始時)



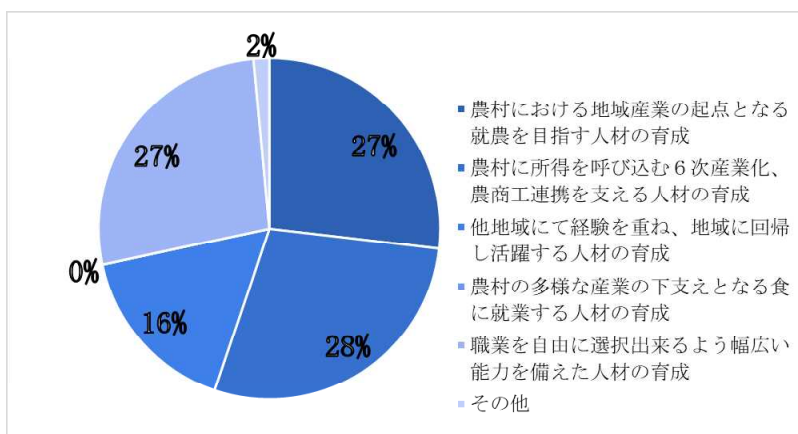
アンケート2 農業高校でどのような力をつけるべきか？



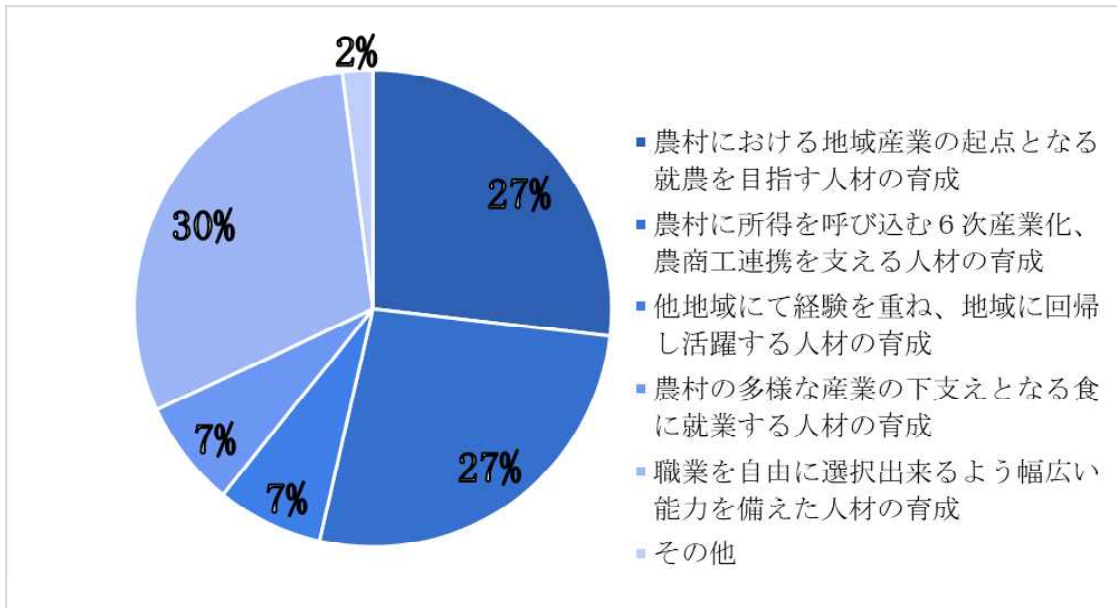
アンケート3 生徒のやる気スイッチがどのような場面に入るか？



アンケート4 農業高校ではどのような人材育成が重要だと思いますか？(シンポジウム終了時)



(再掲) アンケート1 農業高校ではどのような人材育成が重要だと思いますか？(シンポジウム開始時)



アンケート5 農業高校にて、30年後、50年後の将来を担う生徒にどのように向き合っていきたいか？(自由記述)

- ・ 生徒の可能性を少しでも広げられるように向き合っていきたい。
- ・ 時代の変化を的確に捉え、常に地域と共に学びを深める事に向き合っていきたい。
- ・ 将来に活かせる力を養っていけるように向き合いたい。
- ・ 「不易流行」物事の本質を見失わず、加速度的に変化する社会に柔軟に楽しく対応できる豊かな人間性を育てる。
- ・ 世界で活躍できる人材養成
- ・ 粘り強く対話(コミュニケーション)を重ね、信頼関係を構築し、共感的に寄り添い、一步を踏み出す後押しをしながら支えていく。
- ・ 農業を通じて生き生きとした人生を送るための教育活動を継続していくこと。
- ・ しなやかな心と時代を読む先見性を育てていきたい。
- ・ 地域での生き方を考えさせていく。
- ・ 生きる力、チャレンジする力を身に付けていかせたい。
- ・ 生徒1人1人が持っている可能性を伸ばせるような指導していききたい。
- ・ 国民の食糧を安定して提供できるように、農業関連産業人の育成。
- ・ 時代の変化に対応できる農業経営を担える柔軟な発想力と理論的な思考力を兼ね備えた人材の育成。
- ・ 「地域」とどのように繋がりを持って教育に当たれるかが大切になると感じました。
- ・ 先生の話にあったように、ちゃんとした子供ではなく、ちゃんとした大人になれるように導けるように接していききたいと思います。
- ・ 基礎学力を身につけて、好奇心をもち、将来の社会で力強く生きる力を育てるにはどうすれば良いのか考えながら教育にあたりたい。
- ・ 高校として、地域に根ざした活動を生徒と共に取り組んでいきたい。
- ・ 高校生活で得た知識や技術などを活用し、自分の考えを持ち、社会に貢献出来る人材育成のため、著しい時代の変化に対応できるようにしたいと考える。
- ・ 「立派な大人」を育てるための関わりを意識しながら、地域社会に必要とされる人材育成を目指したい。
- ・ 天野様からの話にあった、判断できる、チャレンジできる、考えることができる、自分で決めることができる生徒の育成は今後も必須であると思う。私たちはそのような環境づくりをし、生徒の可能性を伸ばすことのできるよう向き合っていきたい。
- ・ 基礎学力の定着が挑戦する力につながり、挑戦が他の人をも動かす。他に影響を与える話し方や立ち振る舞いを大切に夢を実現する生徒へ指導したいと考えます。
- ・ プロ意識をもって、日本の変わりゆく産業構造に自ら明確な視点を持ち日本の世代を越えた持続可能な人材

の育成を目指して向き合う。

- ・ これからの時代を生き抜く子どもたちには、基礎・基本的な知識をしっかりと身に付けさせた上で、地域と連携した実践的な体験活動を通して、思考力、判断力、表現力を育てるとともに協働して課題を解決する力を育成することが重要であることから、幅広い 企業・団体等を活用した取組の工夫を図り、生徒が自分たちの考えを発信できる機会を多くつくっていききたい。
  - ・ 教員も時代に合わせて進化しながら成長の後押しができるように向き合いたい。
  - ・ 令和3年度から50年後に向けては、農業高校だけでは限界があるので地域の教育力もお借りして、普通高校ではできない農業の魅力を発進することを教えていく必要がある。また農業後継者には、地域でも小さなうちから農業の魅力発信などを企画してこれ以上後継者不足とにならないよう早い段階でのアクションが必要ではないか。50年後なのでこの間地球環境もどのくらい変化しているかわからないが、今ある作物もいくつか栽培出来ないものもあるかもしれないが、生徒には50年後どんな作物を栽培したいのか、品種改良が必要で、今ある作物は姿を消している可能性があるものがあるかもしれないことを考えながら、将来の食や食べ物について考えたり、興味を持ってくれたら良いと思う。
  - ・ 常に新しくなる農業に対応できるよう自身の知識技術アップに努め新しい情報を生徒に還元出来るようにそして先を見据える力を見つけるよう指導していききたい。
  - ・ 最終的に地元に戻り、貢献する生徒を育てたいと考えています。その為に生徒達に真剣に正面から向き合い指導し、農業に関する理解を高めさせたいと思います。
  - ・ 何事にも諦めない、失敗してもまた立ち上がって次に進める力を身につけた生徒を送り出していききたい。そのために、自身も同じ姿勢で生徒の成長を第一に考え、どんな行動が正しいのか考えながら生徒と向き合っていく。
  - ・ 今の生徒は自分の考えに対する自信が持てない状態。周囲の環境やが混乱して自分の軸をどこに置いたらいいのか定まらない。自分の経験の中からそれを見つけられるようなバックアップをするのが教員の役割と、考えている。
  - ・ 農業後継者であれば、地域農業を支える存在に。農家でなければ農業高校の経験を活かし地域に貢献できる存在になってくれるよう向き合います。
  - ・ 今回のシンポジウムでは、業種が違う三人のパネラーからの意見がとても参考になりました。今後、農業高校として地域が求める人材育成に努められるよう創意工夫して行きたいと考えています。
  - ・ 時代に応じた対応力をつけられるように、さまざまなことにチャレンジさせたい。
  - ・ 静内農業高校の職員の皆様、当番校業務お疲れさまでした。
- 教科「農業」は他の教科と比べても、課題解決型の授業や実学的な学びを早くから実践してきていると思います。基礎基本の習得をした上でようやく思考・判断ができると私は考えているので、まずは基本を学び、その上で思考判断、そして他者との協働と広がるものと思います。つまり身につけた知識等をどう使えるかまで学ぶことが「農業」以外でも大切で、それができれば変化の早い時代でも対応できる生徒を育成できるのではないかと考えています。
- ・ 働く喜びを通じて自ら思考する態度を養い、豊かな創造性と実践力を身につけ、新しい時代の農業に対処できる人材の育成に努めていききたい。
  - ・ 様々な経験を高校時代にする事で（させてあげられる場を作ることで）、一つの目標に向かっていく姿勢、やり遂げた充実感を感じ、その経験が糧となって大人になっても探究心を持ち、様々な課題を解決できるような生徒を育みたい。そのために、教員はたくさんの知識をつけ、経験値を上げることが必要であると考えます。また教員が生徒以上に「面白い」ことも大切であると考えます。

### 第3節 農業クラブ活動関連資料

#### 1 大会結果

- (1) 南北海道学校農業クラブ連盟意見発表大会（とわの森）  
（令和4年6月30日（木）～7月1日（金））
  - ア 分野Ⅰ類 優秀賞 生産科学科 3年 今泉 萌  
タイトル：勝てる競走馬育成を目指して～私と奏叶（かなと）の約束事～
  - イ 分野Ⅱ類 優秀賞 食品科学科 3年 有澤 悠斗  
タイトル：日高で歩むパン職人を目指して～地域食材にこだわった私の思い～
  - ウ 分野Ⅲ類 優秀賞 生産科学科 3年 米澤 望海  
タイトル：地域でつくる馬産地日高の新たな未来
- (2) 日本学校農業クラブ北海道連盟第42回全道意見発表大会（真狩）  
（令和4年8月25日（木）～8月26日（金））
  - ア 分野Ⅲ類 優秀賞 生産科学科 3年 米澤 望海  
タイトル：地域でつくる馬産地日高の新たな未来
- (3) 第73回日本学校農業クラブ全国大会令和4年北陸大会（北陸3県）  
（令和4年10月25日（火）～10月26日（木））
  - ア プロジェクト発表会 分野Ⅲ類 優秀賞 生産科学科 馬利用研究班  
タイトル：馬の魅力を伝える～活気あるホースタウンを目指して～
  - イ 農業鑑定競技 分野「農業」 優秀賞 生産科学科 1年 小清水陽人
- (4) 南北海道学校農業クラブ連盟第40回実績発表大会（当別）  
（令和5年1月17日（火）～1月18日（水））
  - ア 分野Ⅰ類 優秀賞 生産科学科 草花研究班  
タイトル：デルフィニウムの切り花品質の調査・研究  
～赤色LEDランプがデルフィニウムに与える影響～
  - イ 分野Ⅱ類 最優秀賞 食品科学科 肉加工研究班  
タイトル：新ひだか町産和牛「こぶ黒」を活用した特産品の創出
  - ウ 分野Ⅲ類 優秀賞 生産科学科 馬利用研究班  
タイトル：活気あるホースタウンを目指して  
～馬を利用した教育プログラムの実践～
  - エ クラブ発表 最優秀賞 農業クラブ執行部  
タイトル：農業の未来を創る地域イノベーターを目指して  
～クラブ員を覚醒させる3創戦略～

#### 2 コンテスト関係

- (1) 令和4年度北海道産業教育意見・体験発表大会  
最優秀賞 米澤 望海（生3）
- (2) ハイスクールパティシエロワイヤル2022  
審査員特別賞 佐藤 愛菜（食3）、竹内 琴音（食3）
- (3) ザ・地産地消費の光料理コンテスト（10分でできる副菜部門）  
優秀賞 乳加工研究班A（食2）
- (4) 第10回高校生チャレンジグルメコンテスト  
大賞（北海道知事賞） 畜産加工研究班（食3）
- (5) 札幌学院大学 高校生ビジネスプランコンテスト  
優秀賞 畜産加工研究班（食3）  
奨励賞 乳加工研究班A（食2）
- (6) 米粉スイーツレシピコンテスト  
特別賞 山田 美槻（食1）
- (7) 第1回みんなの牛肉料理甲子園in2022  
準優勝 遠藤 愛歩（食1）、渡部 めい（食1）
- (8) おにぎりアイデアコンテスト2022  
大賞 阿部沙稀（食3） 山田妃奈柚（食3）  
農政事務所賞 梅木優歌（食2） 松本結愛（食2）
- (9) 探究チャレンジ胆振・日高  
最優秀賞 生産科学科 馬利用研究班
- (10) 北海道地学協働アワード2022  
準グランプリ 食品科学科 畜産加工研究班
- (11) デザセン2022 探求型学習の成果発表全国大会  
審査員特別賞 食品科学科 肉加工研究班

第4節 令和5年度入学生教育課程表

IV-1 全日制課程食品科学科

A 表

教育局 日高

北海道静内農業高等学校 全日制課程

学科 食品科学科

第1学年の  
学級数 1

教科	科目・標準単位数	学年 類型	1 年	2 年	3 年	計
国語	現代の国語	2	2			2
	言語文化	2		2		2
	国語表現	4			4	4
地理 歴史	地理総合	2		2		2
	歴史総合	2			2	2
公民	公民	2	2			2
	政治・経済	2			2	0~2
数学	数学Ⅰ	3	3			3
	数学Ⅱ	4		2	2	4
	数学A	2			2	0~2
	○応用数学	0~2	0~1	0~1		0~2
	○数学研究	0~1			0~1	0~1
理科	科学と人間生活	2			2	2
	化学基礎	2	2			2
	生物基礎	2		2		2
保健 体育	体育	7~8	3	3	2	8
	保健	2	1	1		2
芸術	書道Ⅰ	2	2		4	2
外国語	英語コミュニケーションⅠ	3	3			3
	英語コミュニケーションⅡ	4		2	2	4
	論理・表現Ⅰ	2			2	0~2
	○応用英語	0~2	0~1	0~1		0~2
	○英語研究	0~1			0~1	0~1
家庭 理数	家庭総合	4	2	2		4
	理数探究	2~5			2	0~2
農業	農業と環境	2~6	4			4
	課題研究	2~6		2	2	4
	総合実習	2~8	3	3	1	7
	農業と情報	2~6	2			2
	畜産	2~10			2	0~2
	食品製造	2~8		2		2
	食品化学	2~8		2	2	4
	食品微生物	2~6			2	2
	食品流通	2~6		2	2	4
	地域資源活用	2~8			2	0~2
	○商品開発Ⅰ	2		2		2
	○商品開発Ⅱ	2			2	2
○デュアル派遣実習	6		0~1	4~5	0~6	
○産業社会	○産業社会と人間	3	1	1	1	3
各学科に共通する各教科・科目の計			20~22	16~18	14~20	50~60
主として専門学科において開設される各教科・科目の計			9	13~14	11~16	33~39
学校設定教科に関する科目の計			1	1	1	3
総合的な探究の時間 (総合的な探究の時間)			3~6	0	0	0
合 計			30~32	30~33	30~33	90~98
特別 活動	ホームルーム活動		1	1	1	3

IV-2 全日制課程生産科学科

A 表

教育局 日高

北海道静内農業高等学校 全日制課程

学科 生産科学科

第1学年の学級数 1

教科	科目・標準単位数	学年 類型	1 年		2 年		3 年		計	
					園芸コース	馬事コース	園芸コース	馬事コース	園芸コース	馬事コース
国語	現代の国語	2	2						2	2
	言語文化	2		2	2				2	2
	国語表現	4				4	4		4	4
地理 歴史	地理総合	2		2	2				2	2
	歴史総合	2				2	2		2	2
公民	公民	2	2						2	2
	政治・経済	2				2	2		0~2	0~2
数学	数学Ⅰ	3	3						3	3
	数学Ⅱ	4		2	2	2	2		4	4
	数学A	2				2	2		0~2	0~2
	○応用数学	0~2	0~1	0~1	0~1				0~2	0~2
	○数学研究	0~2				0~1	0~1		0~1	0~1
理科	科学と人間生活	2				2	2		2	2
	化学基礎	2	2						2	2
	生物基礎	2		2	2				2	2
保健 体育	体育	7~8	3	3	3	2	2		8	8
	保健	2	1	1	1				2	2
芸術	書道Ⅰ	2	2						2	2
外国語	英語コミュニケーションⅠ	3	3						3	3
	英語コミュニケーションⅡ	4		2	2	2	2		4	4
	論理・表現Ⅰ	2				2	2		0~2	0~2
	○応用英語	0~2	0~1	0~1	0~1				0~2	0~2
	○英語研究	0~2				0~1	0~1		0~1	0~1
家庭 理数	家庭総合	4	2	2	2				4	4
	理数探究	2~5				2	2		0~2	0~2
農業	農業と環境	2~6	4						4	4
	課題研究	2~6		2	2	2	2		4	4
	総合実習	2~8	3	3	3	1	1		7	7
	農業と情報	2~6	2						2	2
	作物	2~8		2					2	
	野菜	2~8		3		3			6	
	果樹	2~8				2	2		0~2	0~2
	草花	2~8		3		3			6	
	農業経営	2~6				2	2		2	2
	地域資源活用	2~8				2	2		0~2	0~2
	○馬学	7			4		3			7
	○馬利用学	7			4		3			7
○デュアル派遣実習	4		0~1	0~1	4~5	4~5		0~6	0~6	
○産業社会と人間	3	1	1	1	1	1	1	3	3	
各学科に共通する各教科・科目の計			20~22	16~18	16~18	14~20	14~20		50~60	50~60
主として専門学科において開設される各教科・科目の計			9	13~14	13~14	11~16	11~16		33~39	33~39
学校設定教科に関する科目の計			1	1	1	1	1		3	3
総合的な探究の時間 (総合的な探究の時間)			3~6	0	0	0	0		0	0
合計			30~32	30~33	30~33	30~33	30~33		90~98	90~98
特別活動	ホームルーム活動		1	1	1	1	1		3	3



第5節 令和5年度学年別教育課程表

V-1 全日制課程食品科学科

学級数	1年	1
	2年	1
	3年	1

B 表

教育局	日高
-----	----

北海道静内農業高等学校	全日制課程
-------------	-------

学科	食品科学科
----	-------

教科	学年		1 年		2 年		学年		3 年	
	科目・標準単位数	類型					科目・標準単位数	類型		
国語	現代の国語	2	2				国語総合	4		
	言語文化	2		2			国語表現	3	3	
地理 歴史	地理総合	2		2			世界史A	2		
	公民						現代社会	2	2	
公民	公 共	2	2				政治・経済	2	2	
	政治・経済	2							2	2
数 学	数 学 I	3	3				数 学 I	3		
	数 学 II	4		2			数 学 II	4		
	数 学 A	2					数 学 A	2	2	
	○応用数学	0~2	0~1	0~1			○数学研究		0~1	
理 科	化学基礎	2	2				化学基礎	2		
	生物基礎	2		2			生物基礎	2	2	
	地 学	4					地 学	4		
							理科課題研究	1	2	
保 健 体 育	体 育	7~8	3	3			体 育	7~8	3	
	保 健	2	1	1			保 健	2		
芸術	書 道 I	2	2				書 道 I	2		
外 国 語	英語コミュニケーションI	3	3				コミュニケーション英語基礎	2		
	英語コミュニケーションII	4		2			コミュニケーション英語I	3	2	
	○応用英語	0~2	0~1	0~1			英語会話	2		
							○英語研究	0~1	0~1	
家 庭	家庭基礎	2					家庭基礎	2		
	家庭総合	4	2	2			家庭総合	4		
農 業	農業と環境	2~6	4				課題研究	2~6	3	
	課題研究	2~6		2			総合実習	4~8	1	
	総合実習	2~8	3	3			食品化学	4~8	2	
	農業と情報	2~6	2				微生物利用	2~4	2	
	食品製造	2~8		2			食品流通	4~6	2	
	食品化学	2~8		2			○作物	2	2	
	食品流通	2~6		2			○畜産科学	2	2	
	○商品開発I	2		2			○商品開発II	2	2	
	○デュアル派遣実習	6		0~1			○デュアル派遣実習	5	4~5	
○産業社会と人間	3	1	1							
各学科に共通する各教科・科目の計			20~22	16~18	各学科に共通する各教科・科目の計			14~18		
主として専門学科において開設される各教科・科目の計			9	13~14	主として専門学科において開設される各教科・科目の計			14~17		
学校設定教科に関する科目の計			1	1	学校設定教科に関する科目の計			0		
総合的な探究の時間 (総合的な探究の時間)		3~6	0	0	総合的な探究の時間 (総合的な探究の時間)		3~6	0		
合 計			30~32	30~33	合 計			30~33		
特別 活動	ホームルーム活動		1	1	特別 活動	ホームルーム活動		1		

V-2 全日制課程生産科学科

B 表

教育局	日高
-----	----

北海道静内農業高等学校	全日制課程
-------------	-------

学科	生産科学科
----	-------

学級数	第1学年	1
	第2学年	1
	第3学年	1

教科	学年		1 年		2 年		学年		3 年	
	科目・標準単位数	類型			園芸コース	馬事コース	科目・標準単位数	類型	園芸コース	馬事コース
国語	現代の国語	2	2				国語総合	4		
	言語文化	2		2	2		国語表現	3	3	3
地理歴史	地理総合	2		2	2		世界史A	2		
公民	公共	2	2				現代社会	2	2	2
	政治・経済	2					政治・経済	2	2	2
数学	数学Ⅰ	3	3				数学Ⅰ	3		
	数学Ⅱ	4		2	2		数学Ⅱ	4		
	数学A	2					数学A	2	2	2
	○応用数学	0~2	0~1	0~1	0~1		○数学研究	0~1	0~1	0~1
理科	化学基礎	2	2				化学基礎	2		
	生物基礎	2		2	2		生物基礎	2	2	2
							理科課題研究	1	2	2
保健体育	体育	7~8	3	3	3		体育	7~8	3	3
	保健	2	1	1	1		保健	2		
芸術	書道Ⅰ	2	2				書道Ⅰ	2		
外国語	英語コミュニケーションⅠ	3	3				コミュニケーション英語基礎	2		
	英語コミュニケーションⅡ	4		2	2		コミュニケーション英語Ⅰ	3	2	2
	○応用英語	0~2	0~1	0~1	0~1		英語会話	2		
							○英語研究	0~1	0~1	0~1
家庭	家庭総合	4	2	2	2	家庭総合	4			
農業	農業と環境	2~6	4				課題研究	2~6	3	3
	課題研究	2~6		2	2		総合実習	4~8	1	1
	総合実習	2~8	3	3	3		作物	4~8	2	
	農業と情報	2~6	2				野菜	4~8	2	
	作物	2~8		2			草花	4~8	2	
	野菜	2~8		3			農業経済	4~6	2	2
	草花	2~8		3			○栽培と環境	2	2	2
	○馬学	7			4		○馬学	6		3
	○馬利用学	7			4		○馬利用学	6		3
							○デュアル派遣実習	4	4	4
産業社会	○産業社会と人間	3	1	1	1					
各学科に共通する各教科・科目の計			20~22	16~18	16~18	各学科に共通する各教科・科目の計			16~18	16~18
主として専門学科において開設される各教科・科目の計			9	13	13	主として専門学科において開設される各教科・科目の計			14~16	14~16
学校設定教科に関する科目の計			1	1	1	学校設定教科に関する科目の計			0	0
総合的な探究の時間		3~6	0	0	0	総合的な探究の時間		3~6	0	0
( )						( )				
合計			30~32	30~32	30~32	合計			30~32	30~32
特別活動	ホームルーム活動		1	1	1	特別活動	ホームルーム活動		1	1

# マイスター・ハイスクールだより

北海道教育庁学校教育局高校教育課  
[令和4年度第1号] R4.7.15発行

～文部科学省「マイスター・ハイスクール事業」(北海道静内農業高等学校)～

## 令和4年度 第1回運営委員会を開催

5月31日(火)、静内農業高校を会場に、令和4年度第1回運営委員会を開催しました。

開会に当たり、委員長の犬野町長から「2年目となる今年度が一番重要だと思っていますので、皆様方からの助言をいただきながら、有意義な会議にしていきたい」と挨拶がありました。

委員会においては、桑名副校長から今年度の事業概要の説明があり、伴走者の嶋本さんから、事業終了後の自走に向けて、他県の取組などの情報提供がありました。



## 桑名副校長 (マイスター・ハイスクールCEO) による説明

「マイスター・ハイスクールビジョン(専門高校における人材育成計画の概要)」は、昨年度第1回運営委員会において承認されており、これに基づいて本年度も各事業を計画しています。

今年度の事業概要図、マイスター・ハイスクールCEO及び産業実務家教員の配置、今年度の事業計画、重点事項、教育課程や評価方法の改善を図った点は、次のとおりです。

### ＜マイスター・ハイスクールCEO 及び産業実務家教員の配置＞

マイスター・ハイスクールCEO	今年度から副校長として着任(常勤)
産業実務家教員	今年度、特別免許状を授与し、生産科学科馬事コースの授業を担当。獣医師。(週30時間勤務)

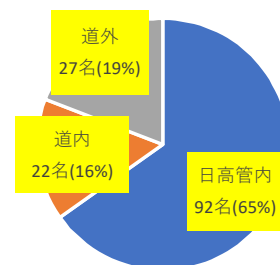
### ＜今年度の事業概要図＞



### ＜2年目の事業計画＞ テーマ『挑戦』

- 1 専門的知識・技能を有する職業人材を活用した講義及び実践的研修
- 2 研修(ICT、IoT を活用している農業施設及び農業機械を实地視察、研修)
- 3 施設見学及び実習など施設・設備の共同利用(産業界、農業関連施設、大学等)
- 4 馬の仕事に必要な技術・資質が分かる達成表(『ホースマン・レベルアップ・チャート』)の作成
- 5 「うまキッズ探検隊(仮称)」を企画し、子どもに馬の魅力を伝えるイベントを実施
- 6 産業界等と連携した食品に関する新たな商品開発・販売の基礎研究
- 7 遠隔システムを活用した海外の学校との交流
- 8 キャリア・パスポートの活用(指定期間において継続して活用)
- 9 教育課程の変更及び指導内容等の改善・充実

### ＜生徒の出身地別在籍状況＞



### ＜今年度の重点事項＞

プロジェクト学習の充実	デュアル派遣実習の充実
<ul style="list-style-type: none"> <li>●年3回、助言を受けられる機会の構築                     <ul style="list-style-type: none"> <li>・年間計画の作成や実験、商品の企画の段階</li> <li>・取組状況や調査、実験、試作など、中間の段階(9月頃)</li> <li>・まとめや評価の段階(11月頃)</li> </ul> </li> <li>●学科共通テーマを設定                     <ul style="list-style-type: none"> <li>食品科学科…地域資源を活用した商品開発</li> <li>生産科学科(園芸コース)…地域の基幹作物の収益性向上に関する研究</li> <li>生産科学科(馬事コース)…競走馬の生産、乗馬療育の研究</li> </ul> </li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>●ガイダンス機能の充実(科目選択オリエンテーションの他に、担任や学科長との面談の実施)</li> <li>●目標設定、振り返りの充実</li> <li>●受入先との連携による生徒の成長を促す指導の充実(生徒の取組状況や適性の診断、就職に向けた改善点の把握)</li> </ul>

## <教育課程の改善>

学科	改善・充実した内容	理由
学科共通	「英語研究」、「数学研究」の設定 (2、3年・各1単位・希望者が履修)	獣医師志望者や4年制大学志望者に対する学習の強化を図るため
食品 科学科	「商品開発Ⅰ」(2年)2単位の設定 「商品開発Ⅱ」(3年)2単位の設定	「食品製造」「食品化学」「食品流通」「微生物利用」で学んだ知識を活用し、生徒の創造力、実践力等を高めるため
	デュアル派遣実習(2年)1単位の設定 (3年)4単位から5単位の増単	長期休業を活用した企業実習を実施するため
生産 科学科	履修の順序や単位数の調整	年次進行に伴い、発展的な内容となるよう再編するため

## <評価方法の改善>

項目	内容
アンケート調査(生徒)	定量的目標及び定性的目標の評価・・・4段階で評価 【追加】自由記述(自己の変化として感じる部分の聞き取り)
アンケート調査(運営委員)	事業の内容、教育と指導、全体に関わる項目・・・4段階で評価
【追加】インタビュー調査(生徒)	本事業が、進路選択にどのように影響したか、直接聞き取り
【追加】アンケート調査(教職員)	生徒の変容の様子や、先生方自身のものの見方や考え方の変化についての項目

## 運営委員からの指導・助言

- 昨年度の事業評価で出された課題を踏まえ、取組の充実が図られているので、しっかりと実施してほしいと思います。
- 小中学生との交流は、農業高校生が学んでいる内容を知ってもらう、よい機会になるため、取組の充実を図ってほしいと思います。
- 発表の機会を町民に周知することは大事だと思います。
- 長期休業中のデュアル派遣実習の実施は、社会性を吸収できるよい機会だと感じています。
- 入学者数が増えたことにより、移動経費の負担が大きくなっているのが課題です。どのように継続していくのか、あと2年で考えていく必要があると思います。
- 内容が充実しすぎているのではないかと思いますので、詰め込みにならないようにしていただければと思います。
- 評価方法について、実際に卒業生が就職した企業からの評価についても、検討する余地があるのではないかと思います。
- 大学に進学した場合に授業についていけなくなるよう、高校で最低限の学力を身に付けておく必要があると思います。
- マイスター・ハイスクール事業を通じて、仕事や職について、いろいろと考えるきっかけになってくれればと思います。
- 民間企業にも、社会貢献が当たり前求められる時代です。本事業への協力が社会貢献につながると考えますので、積極的に取り組んでいきたいと思っています。
- 現在は、事業の名の下に金銭的な支援がありますが、事業終了後、「この環境が続くのか。」「将来、どうなるのか。」が大変心配です。次に入学してくる1年生が同じような環境で教育が受けられるよう、維持してもらいたいと感じました。
- 資金が途絶えて事業を縮小しなければならないとなった場合、本事業の取組を見て入学してくる生徒にとってはダメージとなるため、今から準備をしていく必要があると思います。

## 事業終了後の自走に向けた情報提供

事業終了後の自走に向けて、本事業に係る「PDCAサイクル構築のための調査研究」を受託し、本校の伴走者となっている株式会社あしたの寺子屋 代表取締役 嶋本 勇介 氏から、様々な施策の組合せで財源確保している事例について、紹介していただきました。

本校として、継続事業を検討するとともに、どのような職業人材育成システムを構築するかが、今後の検討課題となります。

### <紹介された事例>

- 1 都道府県・市町村での財源化
- 2 国の制度を活用した資金調達  
(過疎債、地域おこし協力隊・集落支援員)
- 3 地元の個人・企業からの資金調達
- 4 関係人口・企業からの資金調達  
(企業版ふるさと納税、ガバメントクラウドファンディング)
- 5 製品販売による資金調達

# マイスター・ハイスクールだより

北海道教育庁学校教育局高校教育課  
[令和4年度第2号] R5.1.13発行

～文部科学省「マイスター・ハイスクール事業」(北海道静内農業高等学校)～

## 令和4年度 第2回運営委員会を開催

10月11日(火)、令和4年度第2回運営委員会をオンラインで開催しました。委員会では、桑名副校長(マイスター・ハイスクールCEO)から、今年度の中間事業報告や教職員に対して実施したアンケート調査の結果について説明が行われ、運営委員から指導・助言をいただきました。

### 桑名副校長(マイスター・ハイスクールCEO)からの中間事業報告

#### <今年度の事業実施状況について>

今年度は、122の事業を計画しています。一部新型コロナウイルス感染症の影響により、中止になった事業があるものの、今後もオンラインの活用など、工夫しながら事業を進めていく予定です。

事業数	計画	実施	未実施	中止	実施率
食品科学科	36	12	23	1	34%
生産科学科 馬事コース	25	10	15	0	40%
生産科学科 園芸コース	30	21	9	0	70%
学科共通	17	11	6	0	65%
eコマース	17	11	6	0	65%
英語学習	9	5	4	0	56%
講演	5	3	2	0	60%
合計	122	62	59	1	51%

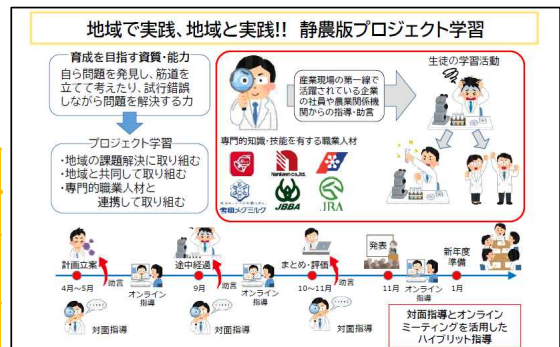
※実施率=実施数÷(計画数-中止数)×100で計算



#### <特徴的な取組1> プロジェクト学習の充実

科目「課題研究」等で行っているプロジェクト学習では、全ての班が企業等と連携し、「計画」、「中間」、「まとめ」の年3回、連携先から指導・助言を受け、地域課題の解決に向けた取組を進めています。

学科(コース)	連携企業・団体
食品科学科	南華園、ベル食品、雪印メグミルク
生産科学科 (馬事コース)	JRA日高育成牧場、JBBA静内種馬場、北里大学
生産科学科 (園芸コース)	北海道立総合研究機構(中央農業試験場、花・野菜・技術センター)、日高農業改良普及センター



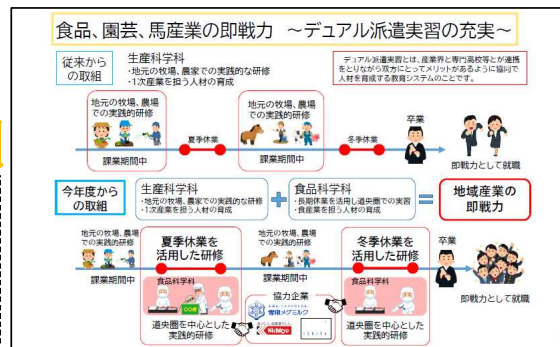
#### <特徴的な取組2> デュアル派遣実習の充実

食品科学科の学校設定科目「デュアル派遣実習」では、夏季休業期間中の実習を計画し、4社で実施しました。

受入先	石屋製菓、雪印メグミルク、日糧製パン、テイエイ
-----	-------------------------

##### ☆生徒の感想☆

- ・食品製造の実習にて、何となく行っていた白衣の埃除去や手指の消毒の必要性を改めて実感することができました。
- ・初めて、プロの削蹄師の仕事を見て、1頭にかかる時間が短く、素早い作業に衝撃を受けました。



#### <特徴的な取組3> フランスからの留学生受入

英語教育充実のため、6月27日から7月3日の1週間、フランスからの留学生2名を受け入れ、数学や馬学、学校行事など様々な交流活動を実施しました。



#### <特徴的な取組4> オンラインによる講演事業

スマート農業の学習内容を深めるため、本校、津別町の農家、NTTドコモ東北支社の3か所をオンラインでつないだ講演事業を実施しました。



## <教職員アンケートの結果> (令和4年9月実施)

○「マイスター・ハイスクールビジョン」に関して

- 4・・・十分取り組まれている (成果が十分上がっている) 3・・・取り組まれている (成果が上がっている)  
 2・・・取り組まれているが不十分である (わずかに成果が上がっている) 1・・・取り組まれていない (成果が上がっていない)

○教師自身のものの見方や考え方の変化について

- 4・・・大いに向上した 3・・・ある程度向上した  
 2・・・わずかに向上した 1・・・向上していない

項目	取組状況 評価平均	達成状況 評価平均
高度熟練技能者による指導や企業等と連携した商品開発や軽種馬生産など、地域や産業界と連携した実践的・体験的な学習活動の推進及び学校設定科目の設定	3.5	3.0
プロジェクト学習を中核とした教科等横断的な地域課題探究型の学習活動の推進	3.0	2.7
デュアルシステムを活用した地域の企業等と連携したキャリア教育の充実	3.3	3.1
地域や小・中学校と連携した教育活動など、異年齢集団による活動の推進	2.8	2.4
オンライン授業や実験施設を利用した高度な実験・実習など大学等との連携・協働	3.2	3.0
農業経営のグローバル化等に対応するためのeコマースの活用や英語教育の充実	3.3	3.1

項目	評価平均
使命感や責任感・倫理観	2.9
教育的愛情	2.8
総合的人間力	2.7
教職に対する強い情熱・人権意識	2.8
主体的に学び続ける姿勢	3.1
子ども理解力	2.6
教科等や教職に関する専門的な知識・技能	3.0
授業力	2.4
生徒指導・進路指導力	2.5
学級経営力	2.3
新たな教育課題への対応	2.6
学校作りを担う一員としての自覚と協調性	2.7
組織的、協働的な課題対応・解決能力	2.7
地域等との連携・協働力	2.8
人材育成に貢献する力	2.4

### 運営委員からの指導・助言

- 食品科学科のデュアル派遣実習について、地元で体験できる企業の数が少ない中、夏季休業を活用し、大手企業で連続した日程で実施することができ、内容が深まってよかったと思います。
- デュアル派遣実習を受け入れた企業に就職が決まった生徒もいるということで、道内の一次産業の若手人材が不足している中、企業側の課題解決にも素晴らしいつながりができたと思います。
- 教職員へのアンケート結果から、先生方が生徒の気持ちの変化や成長を感じていると同時に、先生自身の向上心が高まったと感じていることが分かりました。
- 地元の普及センターが、この事業が終わっても、通常業務として学校と関わっていきけるような関係の構築について、相談しておく必要があると思いました。
- 民間企業が外部講師を引き受けることは、社員教育の一貫として考えると、自分の仕事をきちんと説明するよい機会であると考えますので、社会貢献という意味でも、次年度以降も何らかの形で継続できる形を模索していきたいと思います。
- 獣医学部への進学について、卒業時に国家試験に合格することが目標となるため、現在取り組んでいる数学や英語などの学力向上への取組を継続させ、実力をつけて生徒を受験させてほしいと思います。
- マスコミに取材された様子が、SNSなどで閲覧できたり、拡散されたりすることが、生徒のモチベーションの向上につながっていると感じますので、学校として様々な取組が効果的に行われていると思いました。
- 生徒自身の3年の変化などをアンケート調査することで、事業後につながる何かきっかけが見えるのではないかと感じています。
- 子どもの話をしてくれる先生が多く、温かい先生が多いという印象です。本校を卒業した生徒たちは、先生との思い出がたくさんあると思いますし、関わったことで認められたという気持ちをもっている生徒が多いのではないかと思います。
- 本事業を通じて、生徒も先生も成長していると感じています。就農や就労がしやすい環境をつくっていくのは、私たちの仕事だと考えています。
- 先生方のアンケートからは、事業を進めるうちに、生徒たちが変化に柔軟に対応し、自主的に行動することが増えてきているように思います。こうした生徒の動きを先生方が共有することで、より充実した取組につながると思います。

## 中間成果発表会に参加しました

11月7日(月)、港区立産業振興センター(東京都)で、中間成果発表会が行われました。

指定を受けた15校(令和3年度12校、令和4年度3校)が、これまでの取組内容や今後の課題について発表し、企画評価委員から講評をいただきました。

また、発表会終了後は、参加者がテーマ毎に分かれて協議や意見交換を行い、本事業についての理解を深めました。なお、参加校の発表資料は、文部科学省のHPIに掲載されています。(R5.1.13現在)

<企画評価委員による講評> ([https://www.mext.go.jp/a\\_menu/shotou/shinkou/shinko/1421853\\_00007.htm](https://www.mext.go.jp/a_menu/shotou/shinkou/shinko/1421853_00007.htm))

- 具体的でわかりやすい発表でした。最終的な出口が、就職・就農につながり、企業とのミスマッチが起こらないような形で、これからも取組を継続させてほしいと思います。
- マイスター・ハイスクールCEOが、副校長として常勤でおられるというのは、他校と比べて、コミットされている印象を受けました。

# マイスター・ハイスクールだより

北海道教育庁学校教育局高校教育課  
[令和4年度第3号] R5.2.28発行

～文部科学省「マイスター・ハイスクール事業」(北海道静内農業高等学校)～

## 令和4年度 第3回運営委員会を開催

1月25日(水)、令和4年度第3回運営委員会を、静内農業高校で開催しました(参集とオンラインによるハイブリッド開催)。委員会では、生徒からの事業報告とプロジェクト学習の取組について、桑名副校長(マイスター・ハイスクールCEO)から、今年度の事業評価について、それぞれ報告があり、運営委員から指導・助言をいただきました。

### 生徒からの報告

マイスター・ハイスクールの事業で取り組んだ内容や、プロジェクト学習の取組について報告がありました。

学科(コース)	今年度の主な取組
生産科学科 (馬事コース)	・競走馬の育成や利用と調教 ・繁殖牝馬の管理と栄養 ・乗馬療育 など
生産科学科 (園芸コース)	・地域の園芸生産の特色や課題 ・GAPによる農産物の付加価値向上 ・新規就農 など
食品科学科	・外部連携による新商品の開発 リコッタ、ゴーダチーズ、タルト、 レトルトカレー、焼き肉のタレ など
全学科	・地域や農業の魅力発見と発信 ・ネット販売の実践 ・留学生の受け入れ など

#### 【プロジェクト発表】

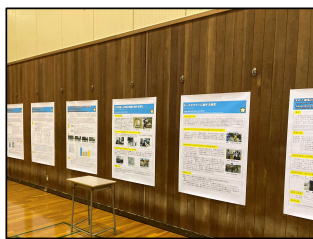
「活気あるホースタウンを目指して」  
～馬を利用した教育プログラムの実践～

日本一の馬産地の次代を担う子どもたちに馬の魅力を伝えたいと考え、3Dプリンタを活用して安定感のある籠(あぶみ)を製作し、より安全に乗馬が行えるような取組や、小学生に対して、スライドや模型を使いながら馬の特性について説明する出前授業を実施した。

小学生からは、「とても乗りやすい」「馬についてたくさん知ることができた」と高評価だった。こうした活動の様子は、様々なメディアに取り上げられ、地域のみならず全国に向けて発信することができた。



生徒による報告の様子



会場に掲示された  
プロジェクト学習の取組



取組を報告する生徒



3Dプリンタで製作した籠

### CEOからの報告

学校長から、定量的目標及び定性的目標に対するアンケートの結果を基に、本事業を通じて、生徒がどのように変容したかなどについて報告があり、次年度の取組の方向性が示されました。

【評価方法】全校生徒を対象にアンケートを実施し、(4：大いにはまる(思う)、3：あてはまる(思う)、2：あまりあてはまらない(思わない)、1：まったくあてはまらない(思わない))の4つの選択肢から回答。そのうち、4又は3の回答を肯定的な評価として捉え、その割合の変化で達成度や習得度を測定。(年度始は6月、年度末は12月に実施)

#### <「定性的目標」に対する評価>

	項目	年度始	年度末	増減
【自己認識】	自分を客観視する力、自分に対する自信ややり抜く力	72.2%	78.5%	+6.3P
【意欲】	物事に対して意欲的に取り組める力	76.0%	81.9%	+5.9P
【忍耐力】	根気強く物事にあたる力	64.3%	71.8%	+7.5P
【自制心】	自分自身の感情や欲望などをうまくコントロールする力	69.5%	77.4%	+7.9P
【メタ認知 ストラテジー】	自分が今置かれている状況や理解度を把握する力	74.0%	80.6%	+6.6P
【社会性】	リーダーシップがとれ、他者とのコミュニケーションがとれる力	62.6%	68.3%	+5.7P
【回復力と 対処能力】	問題が起こった時にすぐに立ち直れる、またそれに対応できる力	66.6%	72.0%	+5.4P
【創造性】	ものを作ったり、工夫したりする力	61.7%	67.3%	+5.6P

## <「定量的目標」に対する評価>

項目	目標値	年度始	年度末	増減
ア 地域に魅力を感じ、愛着をもった生徒の割合	在籍者の80%以上	64.9%	72.1%	+ 7.2P
イ 地域の課題を発見し、解決に向けて多面的・論理的に考え、行動できた生徒の割合	在籍者の80%以上	59.2%	67.5%	+ 8.3P
ウ 将来、地域のために貢献したいと考え、行動できた生徒の割合	在籍者の80%以上	40.8%	53.7%	+ 12.9P
エ 様々な産業人との交流を通し、自身の進路について考えることができた生徒の割合	在籍者の80%以上	62.8%	76.2%	+ 13.4P
オ 自身が目指す進路に関連した資格取得を積極的に行えた生徒の割合	在籍者の80%以上	80.4%	82.5%	+ 2.1P
カ ITやICT、IoTの役割を理解し、活用することができる生徒の割合	在籍者の80%以上	79.3%	82.8%	+ 3.5P
キ 卒業後、即就農及び地域の主要産業への就職者の割合	卒業生の50%以上	55.3% (過去3年平均)	54.1%	- 1.2P
ク 卒業後、就農及び地域の技術者を目的とした進学者の割合	卒業生の40%以上	18.4% (過去3年平均)	31.3%	+ 13.1P
ケ 英語で日常的なコミュニケーションができるようになった人の割合	卒業生の30%以上	42.0%	50.4%	+ 8.4P
コ 在学中に海外の人と交流した人数	卒業生の50%以上	72.5%	92.5%	+ 20.0P
サ 将来的な新規参入を目指して進学または雇的就農した人数	3人以上(3年間累計)	0人	2人	+ 2人

## <次年度の取組の方向性>

- ・ 2年間の成果を踏まえた教育課程全般の充実と改善による、産業界と連携した人材育成プログラムの構築
- ・ 「プロジェクト学習」の充実など、地域の課題解決に取り組む学習活動の充実
- ・ 専門的職業人材に依頼する授業内容と教員が行うべき授業の機能分担の明確化
- ・ 外部講師による授業の実施方法の検討（対面とオンラインの効果的な活用）
- ・ 生徒の進学先に応じた個別最適な学びの提供に向けた校内協議の実施
- ・ 指定期間終了後を見据えた振興局や企業、経済団体等との連携のあり方の検討



運営委員会で試食提供された今年度の開発商品8品

## 運営委員からの指導・助言

### 今年度の取組に対する意見

- ・ 地域の産業への就職、就業に結び付く機運が少しずつできており、取組がよい方向に進んでいると感じている。
- ・ 生徒達が楽しみながら授業を受けていることが、大変よく伝わってきた。
- ・ 本来なら地元の企業がやるべきの安全な籠の製作に、高校生が問題意識をもって取り組んでくれたことに大変感謝している。
- ・ 地域連携の充実は、地域の魅力を知り、愛着をもつことにつながり、進路にも反映されるため、大事にしていきたい。
- ・ 獣医療の学習において、知識や技術の習得と同じくらい心の教育が大切であり、小学生との交流により、コミュニケーション能力を高めることは、とても大きいと感じている。

### 課題や今後の取組に対する意見

- ・ 地域に貢献したいという考える生徒を増やすために、プロジェクト学習において、成功や失敗などの様々な経験を重ねたり、関係機関との連携の中で、社会性を高めるなど、自信を付けていくことが大切である。
- ・ 町の広報やテレビ、新聞などによる取組の発信は、地元の人々の話題になったり、注目されるためにも大事だと考える。
- ・ 取組を充実させることは素晴らしいことであるが、長い目で見て、生徒の負担になりすぎないような連携のあり方を考えていく必要がある。
- ・ 外部講師として授業を行う上で、何が一番効果的で、どんな観点が価値の高い授業なのかを考えていきたい。
- ・ 企業として、職員の待遇改善に取り組むとともに、水産業や卸業など異業種の取組を職員の研修に活用したい。

## 伴走者からの指導・助言

- ・ 事業終了後に向けて、この素晴らしい取組の火を消すことなく継続していけるよう、教育委員会や新ひだか町、企業等が意見を出し合い、議論を進めてほしい。



**令和4年度(2022年度)  
マイスター・ハイスクール事業研究実施報告書(第2年次)  
令和5年3月**

指定校名 北海道静内農業高等学校

〒056-0144 北海道日高郡新ひだか町静内田原797番地  
TEL:0146-46-2101 FAX:0146-46-2151  
website : <http://www.shizunainougyou.hokkaido-c.ed.jp/>